

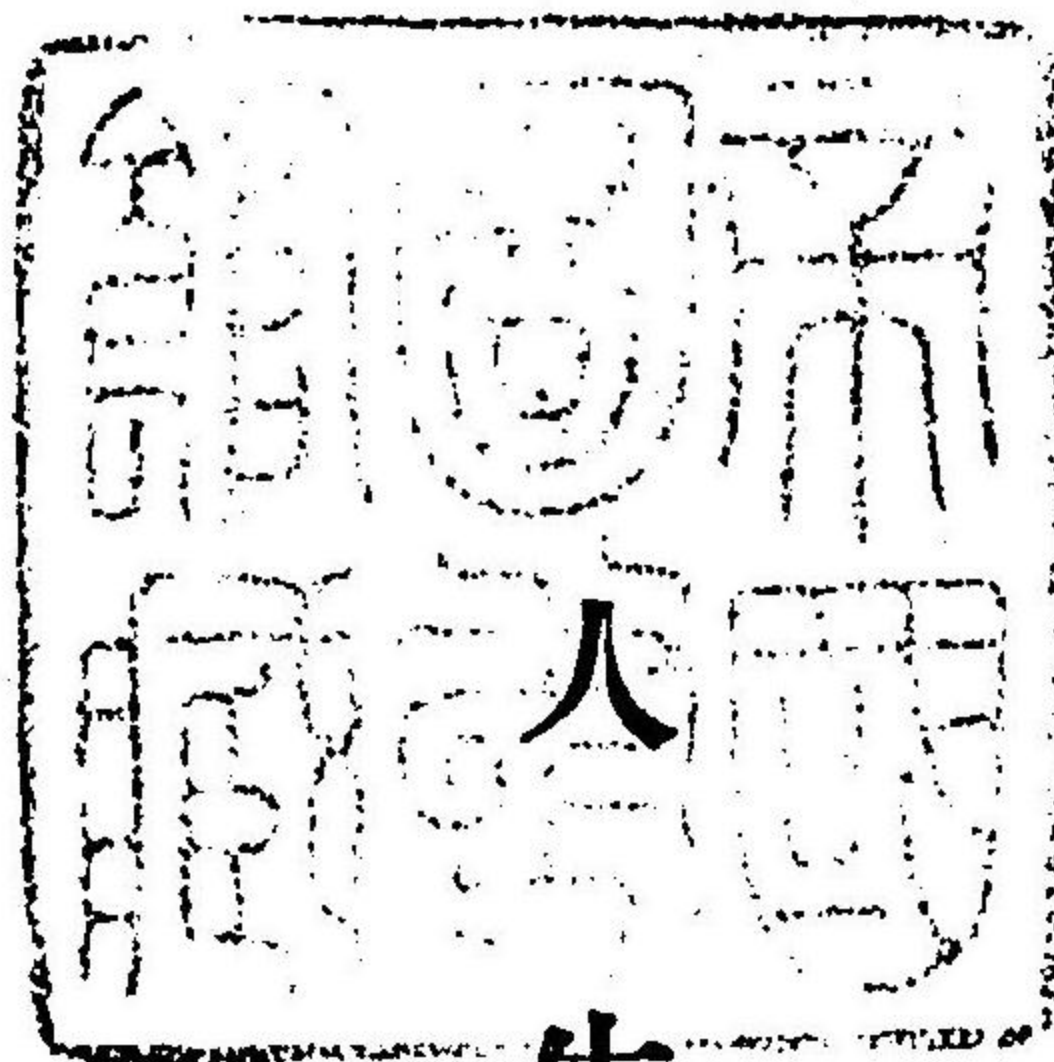
311
215

宮川經輝著

人生の慰安

東京 警醒社書店

324-238

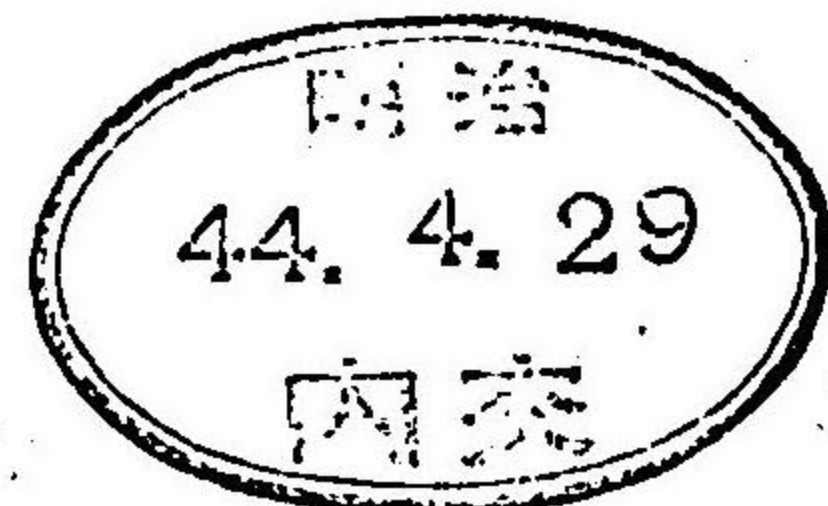


生

の

慰

安



明治
44. 4. 29
内家

本書を余が敬愛する
大阪基督教會員及び
斯道を研究せんと欲
する篤志の愛兄弟に
さしぐ。

本書は最近二々年間に渉れる説教中より人生問題及び之が解決に必要なもの二十五篇を收む而て最後の一篇を除くの外大阪講壇の速記者愛宕秀敏氏の速記なれば特に記して氏の勞を謝す。

人生の慰安目次

人生の慰安	一頁
人生の眞價	一〇
人生の危機	二三
眞我の流露	三七
人生と詩趣	五二
人生の馳場	六六
人生の最快事	八一
靈的戰勝の愉快	九五
人生の最高峯	一一〇
人格の餘光	一二六
神子としての我	一三八
我獨り存するに非ず	一五二

目次

人間交際の大義……………一六七

進徳の本……………一八〇

人格の權威……………一九一

存養の道……………二〇五

聖き情感……………二二〇

大成の希望……………二三四

神知の根柢……………二四九

基督教の神的要素……………二六一

偉人の浩歎……………二七一

世界の進運に伴ふ基督教の使命……………二八五

福音の福音……………三〇〇

信念の向ふ所天下に敵なし……………三二三

影をさらへて實を失ふ勿れ……………三三五

人としての神、神としての人……………三四二

人生の慰安

宮川 經輝 著

エホバは我をみどりの野にふさせ、いこひの水濱にまゝなひたまふ

(詩篇第二十三篇二節)

此は僅か六節より成立して居る短い歌である極めて簡單ではあるが餘韻婉々真に麗はしい雄篇である。蓋し東風吹來つて池の水を解くが如く温なるものが含まれてある。此詩は過去二千八百歳の間人口に膾炙したものであつて、幾億萬の人が之を愛誦し且之によりて大なる慰安を得たか知れない、都合三段になつて居る、第一段は牧者が羊の群を緑の牧場と憩の水濱に導びく状、第二段は指導者が杖もて其群を連れ歩く、「死のかげの谷をあゆむことも禍害をおそれじ……なんぢの咎なんぢの杖われを慰む、」第三段

人生の慰安

は主人公が盛宴を設けて温かなる饗應をするところである、此三段共にお話をしたのであるが、時が足りないから今日は第一段に止めて置く積りである、是は古来ダビデ王の作と銘打てあるが、今日の學者は何うもさうではなからうといふ人もある、若し是がダビデ王の作つたものとすれば、王が弱冠の頃ベツレヘムの野に父に代つて羊の群を守つた経験からして書かれたもので趣味津津たるものである。

私は前週に岡山縣下擴張傳道の爲に田舎に參つたのである、此頃は新芽出の時である、山も野も滴る許りの翠緑を込めて居る、其緑の野山を眺めつゝ、一千町歩も二千町歩も打續く青々とした麥の畑の中を道に添ふて走る時の其心持は何とも云へない趣きであつた、田舎に住んで居る者は左程にもあるまいが、煙の都、黄塵萬丈の都會生活をなす者が此頃田舎の緑の野邊に接する時は云ひ知れぬ快感を催すものである、此煙の都といふ趣味のない乾燥した町に住んで居る者が、偶々緑の野邊に出會してもお話する如く愉快である、彼の亞弗利加や亞拉比亞の幾百哩又は幾千哩といふべき砂の上を旅する旅人が幾日もく見るものは塵色の砂ばかりである、時にオエシスと稱へる緑の

野邊と憩の水濱を見出す時は其時の快感、其時の喜悅は筆にも口にも云ひ現はす事の出来ないものがあるといふ事であるが、左も右もなん けれども自分には分らない、此時に緑の野邊と憩の水濱といふ字を用ひて居るのは、其背後に早魃が續いたといふ事が含まれてある、早魃が二ヶ月も三ヶ月も續けば木の葉は萎み野の草は枯れ其邊の溜水は盡きて、而も濼々として流れて居つた河の水さへ渴てしまふ、其時の牧者の心配は大したもの、羊も山羊も飢渴に迫つて来る、牧羊者に取つて生命ともいふべき獸類の群が亡くなるといふ事は是は商賣人が身代限りをなすと同じ事である、實に堪へられぬものではない、商賣人が身代を失ふといふ事は、商賣人夫自身には苦痛であるけれども、失はるゝのは身代で何も苦痛はない、金を失つても株權を失つても無情の金無情の株權何の事はない、けれども牧者の身代といふべき者は羊であれ、野羊であれ、生命あるもの、殊に牧者は其羊を我子の如く之を愛し、可愛い名を付けて呼んで居るといふ、其羊が草無きが爲に飢る水無きが爲に渴き終に死ぬるといふ事であれば、牧者に取つては財産を失ふといふの苦痛ばかりではなくして、其可愛い愛子に別れる

が如き悲嘆が生じて来る譯である、早魃の年に遭へば牧者は羊の群を連れて、彼所の谷間には青草があるまいか向ふの木の下には芝生が残つて居りはしまいか、彼の山陰には流れ出る清水がなからうかといふ譯で、精神を凝して緑の野邊と憩の水濱を探り歩くといふ、いよく探し當てた時は牧者の喜悅はどんなであらう、ここに羊の群が食ひ飽きつ青草を薦に夢温かに臥し睡るを見、憩の水濱に水を吸ふて満足をする状を見る時は、無上の感謝に満たさるゝであらう、是は詩人が羊を歌ふ爲に作つたものではない、人間の生涯に當接めて見なければ作者の意を解する事は出来ない、此世界は大早魃であつて、凡ての者が煩悶と心配と苦痛に堪へきれない、どうか是等の惱める人に人生の慰安を與へたいといふ意味で書かれたものである。

今より千六百年ばかり前にジヨスチンマーターといふ哲學者があつて基督教信者となり遂に斯教の爲に命を棄てた事がある、此人は何うかして緑の野邊に青草を求むる如く、憩の水濱に清水を探す如く、此乾燥無味の世の中に何か我心を安んじ慰むる者を見出したいと思つたのである、其時に彼れは哲學者は確かに我を幸福なる生涯に導い

て呉れるであらうか、哲學者は緑の草を興へ憩の水を興ふべきであらうかと思つたのである、そこで先づ第一にピタゴリヤン派の哲學者に出會つて頻りに神の事を尋ねた、哲學者曰く神を語る是は空論である、何ば探したと云つて探し當つるものではないと、次にアリストテリヤン派の亞流を汲む逍遙派の哲學者に會ひ其冀望として、どうか一つ先生の御指導に依つて、緑の野邊とも憩の水濱ともいふべき人生の幸福ある生涯に入りたいと申し込んだ所が、宜しいマア此所へ足をお留めなされとの答に接し、夫から二三日逗留をすると、先生曰く君はいくら月謝を拂ふか、月謝の決めを着けなければならぬと、ヂヨスチンは其一言を聴いてア、こりやア金の爲にする哲學者だな、此所には憩の水濱もなければ緑の野邊もないと思ひ、左様ならと云つて此所を出たのである、其次に再びピタゴリヤン派の哲學者、而も世界で有名なる哲學者の許に参り、どうか先生私を幸ひなる生涯にお導びきを願ひたいと申したら、宜しい、夫は音楽と天文学と幾何學の三ツを修め、先づ形而下の學を土臺としなければ形而上の學には進まれないといふ事であつた、ヂヨスチンは是は到底叶はぬと思ひ、去つてプラトーン

派の哲學者に會つて頻りと談論を試みて見たが其所にも探るところのものは得られな
い、到頭失望の餘り廣い野原に出でつゝ、右思左考思案をなし茫然として野山を歩いて
居つた時に、一人の老人に出會つた、其老人が熟々デヨスチンの顔を見て君は何を探
して居らるか、何を求めて居らるかと問はれたから、有りし次第を物語つた時
に老人が極めて懇切に教へて呉れたが、夫は神に觸れなくちやアならぬ、神の御許に
行かなくちやア君の探すものは得られない、其神には何うしたらば觸れますか如何に
したならば其神を探し當てますかと申すと、夫は預言者の預言者に依らなくちやアな
らぬ、ナザレのイエス、キリストに依つて現はされたる天の父に觸れさへすれば、天
の父は君が探すところの慰安であつて、一度天の父を探し當つれば君の願望は満たさ
れ、君の希望は確かに癒さるゝと云つた、そこでデヨスチンは其教訓に従ひてキリス
トの教を尋ね、キリストが現はしなされたる天の父を見出して安心の境に入り、所謂
心廣く體胖なる人となつて、生涯の間、教の爲に盡したのみか到頭教の爲に生命を棄
つるまでに至つたといふ、又轉じてオーガスチンの生涯を見ても同様である、イエス

の模倣といふ有名な書物を著したトマスエケンピスの生涯を見ても矢張り同じ事
である、デヨンバンヤンの天路歷程を見ると、バンヤンは其住んで居る市街が滅びな
んとするといふ事を以て、「生命々々限りなき生命」と云つて耳に栓をして飛出したと
云ふ基督信者の生涯を描いた、其基督者は天の父に來つて初めて其渴望を満たされた
といふ筋書になつて居る。

一昨日岡山で一人の婦人に會つた、其婦人は醫學博士の妻君である、今日は圓滿なる
家庭となつてあるが、斯なるまでには悲哀の歴史が伴ふてある、其醫學博士なる者は
名譽を擔ふて大學を卒業し、岡山の高等醫學校に奉職する身となられた、ところが不
幸にも大早魃に出遭つた、野も山も青草は悉く枯れ、谷の清水は盡き果て、居るに堪
へないといふ羽目となつた、其次第は譯あつて親類から妻を貰つたが、嫁と姑の間柄
は折合が悪くして、我宿に歸れば母親の膨れた顔を見ない日には妻に悲しい面を見せ
らるゝ、不愉快で堪へられない、遂に他に妾宅を拵へて家を外への放蕩三昧を極めた、
遂に獨逸に留學をいたしたが獨逸でも金使ひが荒くして親類の者より屢々強異見を受

けたといふ事である、今より三年ばかり前に博士は基督信者となられた、其信者となられた動機は何所にあつたかと言へば、博士の洋行中に其令夫人が先づ信者になり、家に歸つて見れば嫁と姑の間が誠に水も漏れないやうに親密になつて居り、妻が我に對するところの仕打は全く一變して實に地獄が變じて天國となつたといふは此事だと思ふばかりに家庭が清まつてあつたので、大早魃の家庭が縁の野邊となり、憩の水濱となつたやうな次第であつた、年頃日頃早魃に苦んだ博士も、其状を見ては非常の感に打たれて、遂に妻が信する愛の神を信するの事となり、今日は家庭ほど美しい處はないと自ら信するのみならず、他人にも屢々其事を語らるゝといふ事である、過日一人の姉妹を訪ねた、或は今日御出席になつて居るかも知れぬ、其姉妹と色々お話をし居つた所が、四歳とか五歳とかの折に父に死別れた母親は何所にか居らるゝさうだか分らない、今は兄上が父君の後を繼いで居られる、其兄といふは實は叔父だ、私のごふがまゝに何でもして呉れますといふ、さうして此婦人は熱心なる信者である、若し其方が天の父の前に縁の野邊を見出し憩の水濱を見出されなかつたならば、假令

肉體は如何に幸福で居つしやるとしても、心の中には早魃が絶えないであらう、幸ひに天の父とキリストを見出して心の喜悅を得られたといふ事は、眞の幸福であると私は思ふた。

して見ると諸君、人生は何時も早魃なしに行くものではない、草は枯れ水は盡きる時が来る、其時こそ吾人は此詩人と共に「エホバはわが牧者なりわれ乏しきことあらじ」エホバは我をみどりの野にふさせ憩の水濱にともなひ給ふ、エホバは我が靈魂をいかし」といふ、此自覺と信仰を有することが甚だ大切である、ナザレのイエスが世にお降りになつたのは我儕を天の父に導びかんが爲である、キリストが十字架の上に命をお棄てなされたのは、愛の力を以て我儕を憩の水濱に導びきたいといふの御精神に他ならない、今日は此所に麵麩を裂き葡萄酒を飲む是れは何を意味するかと云へば重きを負へる者、疲れたる者は我に來れと仰せられたキリストの御心情を現はすものであつて、私共はキリストの心の中に縁の野邊と憩の水濱を見出すものである、斯くの如くして天の父の中にキリストの中に安心の境を求めたるところの者は、又己れの家

底の中に縁の野邊と憩の水濱を造つて、世の早魃に遭ふて惱める者、苦しめる者を其所に受入れて、其野邊に臥さしめ其水濱に憩はしむるといふのが、是れ我々基督信者の勤務である、ごうか諸君と共に詩の第一段、即ち二十三章の二節を深く味ふて、今日の聖餐を守りたいものである。

人生の眞價

もし人全世界を得ても其生命を喪はば何の益あらん乎 (馬可傳第八章三十六節)

人生により高半面と低半面との二ツがある、後者は多く肉體に關する事柄で、何を飲み何を食ひ何を着如何なる家に住居し如何なる快樂を取り、又如何に外見を張らうかと云ふやうな類のものである、是も身體があるからには決して等閑に附すべきものではない、なる事ならば衣食住も相當に得たく、此世の快樂も罪にならざる限りは取たいものである、前者は我衷に奥深く潜んで居ものであつて、放つて置ば放つて置けな

い事はないのである、夫で多くの人が此方面には餘り心を用ひない、即ち高半面と云ふは高尚なる理想である、是は人生に於て最も大切なるもの、一つである、理想のある人間と理想のない人間とは一目して分る、如何に立派なる衣服を身に纏ひ金色燦爛たる扮装を凝して居つても、より低き方面だけに思ひを寄せて、少しも理想と云ふやうな事を味ふた事のない人は、何だか下劣なる面貌が現れる、是は實に仕方のないのである、高尚なる理想に次では深奥なる思想を養ふことである、是も養はなければ養はないで放つて置いて、世渡りをするのには何等差支がないが、衷に深奥なる思想を有する人は其言葉なり其顔色なりその深いものが現はれて来るからして、いかにも奥床しい人間である之を仰がざるを得ないやうになる。

更に今一ツは靈的趣味と云ふべきものであらう、是は音樂なり繪畫なり彫刻なり只普通一般に人々が面白いとか美しいとか云つて持嚙すやうなものでなくして、其深い音曲なり彫刻なり繪畫なりの中に潜で居るところのものを味ふ趣味である、今一ツは精神上の慰安と云ふ事であらう、聖人の所謂安心立命と云ふ境に達して居る者で

あるならば、假令満所の月を見るやうな事があつても又誤つて鐵窓の裡に繋がれても、天涯地角何れのところに在つても、心廣く體胖なりと云ふ、何だか其所に一種泰ふべからざるどころの平安が其人の衷に存して居る、是等を高半面と云ふのである、私の書齋から外を眺めると七八軒二階屋のある家が見える、下の座敷は三百六十五日朝になれば開かれてあるが、不思議な事は二階座敷は月に一度ぐらゐる雨戸が開くやうである、二度と雨戸の開く家は未だ見當らない、毎も締切つてある、餘り來客もない家と見えてトンと二階座敷を用ゐる模様が見えないのである、丁度人生はこんなものであるまいか、低半面と云ふは下座敷である、是れは暫くも閉して置く譯には行かない、眼が醒めて居りさへすれば繁々用ゐらるゝのである、少しの間も放つて置けない、より高き方面は放つて置いても誰も故障を云ふ者がないのであるから、皆之を等閑に附して居る、ところが能く考へて見るとより低き方面と云ふは家を建てる足場のやうなもので是は人生の目的ではない、如何に金殿玉樓の中に住つても夫で人生の目的を達したと云ふものではない、如何に錦繡を以て身を飾つても夫で人生の目的を達した

と云ふものではない、足場だけ拵へて家屋を建てない者があるならば如何にも愚かな人間と云はざるを得ない、人間が家を建て、見たり壊して見たり、衣服を造つて見たり又廢して見たり種々雑多な事をやるが、夫は足場を造るのである、何の爲の足場であるかと云へば夫れはより高き方面を何等妨害なく又何の檢束せらるゝところなく、圓滿に自由に發達させる爲のものである、ところが死に至るまで高半面には毫も心を用ゐない、更に修繕を加へやうともしない人間が多い、足場造りで生涯を終ると云ふは如何にも残念な事ではあるまいか。

熟々歴史を繕いて遠き昔から今日までの事を考へて見るに、秦の始皇帝は大々的の足場を拵へる事に全力を注いだ人物である、北の方には萬里の長城を築き、咸陽には阿房宮を造り立て、自分の位は二世三世四世五世萬々世にまで傳へると云ふやうな大經綸であつたからして、足場造りとしては一等の人であつたと思ふ、ところが高半面には更に心を用ゐない人であつた、追々類に敏が寄つて來る、頭髮が白くなる人、生が心細くなつた、長生不死の藥があるなら夫が得たいと云ふ愚にも附かない考を起

した、低半面に於ては遺憾なく發揮したところの秦の始皇は、高半面に於ては何等養ふところがなかつたからして、天下萬世の後に至るまでその愚を笑はれる次第である、之に反して張子房の如きは鐵椎を以て始皇を博浪沙の中に討たうとした、是は主の仇を報いんが爲であつたが、事成らずして隠れた、けれども遂に志を得て秦を滅し、再び隠れて青松白砂を友として高半面を養ふたと云ふは丈夫の本懐として感佩せざるを得ない。

本朝の歴史に於て殆んど時を同じうして出たのは三代將軍家光と中江藤樹である、家光公は足場造りに骨折り、藤樹先生は人生の目的を達せられた、ナポレオンとワシントンは何うであつたか、前者は實に立派な足場を造つたが足場から落けた、ワシントンは足場も造つたが家屋も立派であつた、ワシントン去つて百有餘年の今日彼のヘルモントのワシントンの舊邸に杖を曳くところの者は、實に懇々として去る能はざるものがある、と云ふのは何か、ナポレオンの古戰場ウートルの盛砂の上に立つて見れば、ア、英雄の末路憐むべきかなとセントヘレナを聯想せざるを得ない、然らば其靈

的方面と云ふは何うして養はるゝか、如何にすれば高尚なる理想が養はれ、如何にすれば深奥なる思想が養はれ、如何にすれば靈的趣味が養はるゝかと云ふやうな事もお話をしたのであるが、夫は到底一度の説教で盡す事は出来ない、寧ろ今日は最後の精神上の慰安と云はうか或は靈的生命と云はうか、如何にすれば我衷に在る心靈が養はるゝかと云ふ問題を考へて見たい、毎もお話する如く御互ひの身體は空氣に取巻れて居るから、空氣を吸はざれば一日も生きて居れない、又御互ひは太陽の光線に觸れなければ充分に元氣ある身體を養ひ立つる事は出来ない、丁度其如く我が衷に奥深く潜んで居るところの心靈は、其心靈の淵源なる命の命、大實在者と云ふものに觸れなければ何うしても充分の發展を遂る事が出来ない、高尚なる理想も其所に至らなければ發展しない、深奥なる思想も、靈的趣味も其所に行かなければ發展しない、然らば我が衷の靈は如何にすれば天地宇宙の大靈に觸れる事が出来るか、エール大學の教授にシユメカーと云ふ學者があつて、ツヒ此頃神及び人と云ふ本を著はされたのである、其の中に人が神に向つて發展すると云ふ事に就て論じた一章がある、云はく人間

の中に神と云ふ觀念が發達する順序は一本能、二情感、三直覺、四信仰、私は夫を讀んで是非は經驗から出て來た言葉だと思つた、如何にもさうである、本能と云ふのは何かと云へば、是は御互ひ人間が何うしても我以上のものがなくてはならない、何か知らないが天地宇宙には何か我以上のものがなくてはならないと思つて心が其方へ向くのである、丁度嬰兒が生れて四十八時間ぐらゐの経つと口をモヤ／＼させて頻りに何かを捜して居る、乳房を充行ふとチユウ／＼と吸出す、是は本能である、人間の靈が頻りに神を探し廻る事を意味する、情感とは自分の力の弱き事を感じる、何だか淋しい何だか物足らぬ、所謂靈渴を感じる、其渴を感じる時に丁度私共が慕はしき父母の顔を見れば大満足を得て之に信頼する如く、我以上のものを見出して之に依頼むことを意味するのである、左ればこそシユライエマへの如きは宗教は信頼心に他ならないと云つた譯である、次に直覺と云ふのは何か、本能性では頻りに我より大なるものを探がし、情感では頻りに信頼したいと云ふ感に驅らるゝ、ところが理性が免さない、そんな曖昧模糊たる雲を捕へ霞を掴むが如きものを何うして捕へる事が出来るか、何う

して夫に接觸する事が出来るかと云つて理性が免さない、夫で或は哲學を涉獵り或は宗教學を研究して止まない、カントが云ふ如く、現象の世界は分るが非現象の世界は分らない、五官に觸れるところのものは分るが五官に觸れないものは分らない、是に於てか吾人は堪へられない、眞に人間の有難いと云ふところは外ではない、理性の及ばないもの理性の尋ね能はざるころの神は直覺によりて捕捉する、之を稱して靈覺と云ふも可、又インスピレーションと云ふても可、理性がもう刀折れ矢盡きた時に出来て來て其實在を掴む、其實在を我物とする事が出来るのである、握つたと云ふ時には哲學は夫は分らない、宗教學は夫は駄目だといつても、我心の裏には恰も太陽が明朝東天に昇る事を明らかに認めて居る如く、天地宇宙の大御神を認めて居るからして、突倒さうとしても追除けようとしても振つたものは何うしても放す事が出来ない、最後に信仰となつて來るが、夫は智識の領分では何うしても神があるとか、人間の靈性が限りなく生きるとか云ふやうな事は分らない、そこで我靈性に補付けられたところの信仰心を以て其神を或は父と信じ、或は我祈禱を受くるころの神として之を信

する事となる、此所で我靈と神の靈と云ふものが眞に結び付く事になる。

ところが諸君、人間が此世の中に生れて出たと云ふ時には、より低き方面と云ふ此身體も一種の土塊見たやうなもので、また何の力も發揮されて居ない、只乳房を持つて行けばチエウ／＼と吸ふだけのものである、之に母の乳なり牛乳なりを與へ且又色々なる食物を與へて養ふて居ると、遂に二十歳と云ふ丁年に達すれば、極めて剛健なる身體が發達して、雨に曝されても風に吹かれても雪や氷を踏んでも、決して傷まないやうな剛健なる身體が出来る、誰が造つたか……誰が造つたか、其土塊同様の身體に自ら發達する力がある、其身體が自分の境遇を自分で造つて、打たれても叩かれても、ナニ少々の事ぢやア傷まぬと云ふだけの立派な身體が出来たのである、より高き方面も同じ事、生れて来た時には殆んど白紙のやうなもの、一種の發達し得べきところの素質はある、即ち上述の如く、本能、情感、直覺、信念と云ふやうなものがあつて、養へば養ふほど食物を與へれば與ふるほど此靈性が磨かれて来て、遂には孔子であれば心の欲するところに従つて矩を越えずと云ふ境に達し、キリストであれば我と

天の父とは一なりと云ふ妙境にまで達する事が出来る。

して見ると此心靈も自ら發展する力が備はつて居ると共に其心靈が自分の境遇を高く大きく造つて行つて、さうして天地宇宙の間を翔り歩くところの大きな心靈となるのである、左すれば人生の眞の價値は何所に在るか、より低き方面を自由に圓滿に發展せしむる爲の道具である、夫は道具であつて目的ではない、より高き方面を發展せしめよう云ふ事になると衣食足つて禮節を知ると聖人も云はれた如く、此より低き方面に餘り心を寄せない、衣食あらば結構である、衣食足らないところの我々は豫てお話する如く簡易生活に甘んずる大決心があつたならば、さう澤山金を取らなくても、さう世の中の事に離脱しないでも、此世の生活だけは出来るのである、ソコデ其麻も得たるところの能力、其餘し得たるところの元氣を以て高き方面を漸然發展せしめ、其より高き方面が一面に於ては天地宇宙の大靈と結んで、神より出るところの生命に常に満たされて居ると云ふ事になる、其所まで引上げられた我々は其理想は確かに神の子であると云ふ理想だからして、此以上の高きものはない、其心の中は常に

神の心に通ふて、神の中に在る奥深き思想を望んで行くのであるから、夫れ以上の深遠なる思想はない、其靈的修養と云ふは我胸襟を開いて高尚なる朋友と語つてさへも嬉しくて堪らない、天地宇宙の大靈天のお父様と胸襟を開いて我心事を語ると云ふ事になつて來ると、此位深い靈的修養と云ふものはなからうと思ふ、さう云ふやうに私共は此世の中に於て非常なる發展を遂るのである。

斯く私がお話をしたならば、夫は話としては實に面白いが實際さう云ふ事が出来るかと云はるゝ人もあらう、實際其所迄達し得た人が幾らもあるのが論より證據、私は歐米の如く數百年來基督教に養はれた社會に於て右の如く發達した人を見るのみならず、基督教傳はつて僅かに四十年の日本に於ても靈的方面の盛んに發達しつゝある人を見て感謝に堪へない、未だ充分なる發達は見ないにしても、兎も角も此の方面に向つて非常なる發達をやつて行きつゝある、斯くの如く發達するのが人生の目的である、其發達をするのが人生の目的であれば、人生の幸福と云ふのは其發達の跡を思ふ上に存して居る、ア、家倉が出来たア、衣服が幾十枚出来たと云つて悦ぶ、此より低

き方面でも發達すれば嬉しい、況してやより高き方面の發達に於てをやで其喜悅は尙更である、昨年までは詰らない理想を懷いて居つたが今年は斯う云ふ高尚なる理想が得られた、昨年までは何等心の中に深いものがなかつたが、今年はまだ深いものは得られない、けれども深い林の中に這入つたやうな心持がするだけでも非常な愉快ではないか、天の父を見出して、朝に夕にアバ父と呼ぶ子たる者の靈が我中に溢れて、久振りに旅行から歸つて來て父母の顔を見て樂むが如くである、其以上の趣味が我心の中に湧いて來るのは當然である、斯くの如く此世の中に於て發展し始めたところの心は、此世を去つて後に千年萬年幾萬年の後までも發展して已まないと云ふ事を考へて見られよ、實は人生は此世限りぢやアない、此世は、ABCだ、またXYZと云ふところまで行かなければならぬ、其所まで行くのには千年萬年を意味する、けれども此世に於て發展し始めたところの心靈は我が肉體は死んでも尙ほ發展して已まない、夫が私共の人生である、其人生を興へられて居るのに所謂二階座敷と云ふものは毎も閉して塵埃だらけにして置き、即ちより高き方面はトンと顧みない、多忙いゝこの一

點張で生涯を終る、將に死なんとする時に至つて何うだと言ふと火が消えるやうなもの、先が案じらるゝと云つて苦しんで居る、實に詰らない、其人は人生を誤つた人である、より低き方面は先づ相當の發達を遂げさせると云ふ、一通りの食物と衣服あらば以て足れりとするべし、さうして餘し得たところの時間と能力をより高き方面に注いで見られよ、如何なる人と雖も其方面に進歩發展しない人はない、其方面の進歩發展すると云ふ事は肉體の發達でさへも嬉しいから何れくらゐ嬉しいか何れくらゐ幸福であるか測り知れない。

どうぞ諸君と共に此方面に今一層力を入れて、さうして人間が磨き上げた其靈は永久消えるものにあらず、價値の高い物は消えない、私共が苦心慘憺磨き上げたところのより高き方面は決して消える事はない、ナポレオンはセントヘレナに流された、其最期は實に詰らない、けれどもワシントン・藤樹或は張良の如き人間が人間として存する間、即ち人間の歴史が存する間は人々の尊敬に値する所のものがある、私共の靈も亦磨きに琢いて已まされれば、遂に天下萬世の後に至るまで其感化を残すに違ひはない。

い、若し此靈的方面と云ふ方面が發揮されず、又古來靈的方面が發揮したところの跡が聖賢の遺書に止まり、或はラハウエルの繪畫やミカエルアングロの彫刻に止まつて居るならば、此靈的發達のない世界は朝鮮と同じ事だ、殆んど住むに堪へない、けれども此より高き方面の發達が幸ひにして此世の中に残つて居るから、矢張り楽しく愉快に日を送る事が出来る、此聖書の如きもより高き方面の發達の跡である、之を取つてしまつたならば實に世の中は住むに堪へない世界になつて来る、夫で何うしても我々日本國民は足場造りにあらずして家を築く爲に全力を注がなければならぬ時代が來て居るから、諸君が其覺悟を以てお磨きにならん事を切に希望して已まない。

人生の危機

イエス曰けるは爾曹の信何所に在や

(路加傳第八章二十五節)

イエスが弟子方と共にガリラヤの湖水をお渡りなされた時に、イエスは船が岸を離

るゝと直きに船の方に行つて、前日來の疲勞を休めようと思つて睡眠に就かれた、ところが船が進んで湖水の中程に参つた時に非常な嵐が起つて最早轉覆さうになつた、御承知の如くお弟子方八九分までは此湖邊の漁夫であつて、日本の漁師のやうに船には能く馴れて居る、其船に馴れた漁夫であつた弟子達でさへも、もう船が轉覆るか知らぬと思つて周章狼狽といふ場合、餘ッ程なことであつたらう、夫で先生の傍に來て「先生々々、今や船が覆りさうになりました」と頻りにイエスを呼起した時に、主は平然として起上つて浪と風をお静めになつたといふことが書いてある、風が直ちに静まつて海は以前の如く平らになつた、其時イエスは狼狽した弟子を見て「一體お前達の信仰は何所に在るのだ」と云つて多分其顔を覗き込むやうにして御覽なされたであらうと思ふ、私は此の一節を讀んでさういふ感想が浮ぶのである、一體お前達の信仰は何所に在るか、我心を覗き込んで一體自分の信仰は何所に在るのか、他人の顔を見て一體お前の信仰は何所に在るのか、斯う云つて見たいやうな場合が尠なからずある。

人生事のない時は絶波の上に棹すやうなもので、誰か信仰があるか誰がないかサツパリ分らない、始終春景色を願ふは是れ人の情であるも、天は春景色を與へるとは與へるが始終さうばかりではない、人生事なれかしと望むけれど、天は事あれかしと望むのではないかと想ふ節も尠なからずある、尤も人生を見るに極く「無事なといふ人がある、極く「無事なといふ生涯でも二度や三度は薄き氷を踏むが如く、深き淵に臨むが如く確かに危い場合がある、夫はどんな事であるかと云へば、一は子供が稍や大きくなつて成人期に達した時である、此時は人生の危機の一である、伸びるか縮むか眞直に行か横に反れるか眞に危いところである、孔子は十有五にして學に志しと云はれたが、其十有五といふのが危いところ、子供を有つた人は能くお考へなさい、スタンフォード大學のスタアバックが宗教心理學に何と書いたか、多くの人々に手紙を出して其實驗を聞いて、而して後斷案を下していふのには、男の子は凡そ十六だ、女の子は凡そ十五である、算へ年にすれば男の子が十七か女の子が十六といふやうな時である、其時能く行けば先づ其人の生涯は夫で略ぼ定まる、悪く行くと夫から

悪書生の仲間に入るか破落家の仲間に入るか、非常に危い事になつてしまふ、其次は學生であれば目指す學校を卒業して是から職に就かうといふ時、年齢で云へば二十三四といふところである、此時が即ち伸びるか縮むか眞直に行くか反れるか實に危いところである、家が富裕であつて別に職に就くにも及ばない、早稻田大學か慶應義塾でも終つて来れば、安閑として暮せるやうな家では職に就く心配はないのである、その代りに此時機に於て大抵怠惰してしまつて、何の役にも立たないやうな事に得てなり易い、是れ人生の危機である。

其次は婦人であれば嫁に行くといふ時、男子であれば妻を娶らうといふ時である、是實に剃刀を下に置くやうに危いところであつて、能く行けば伸びる巧く行けば眞直に進むのだ、けれども悪く行くと女はヒステリーを起して、遂には須磨の浦曲に身を投げるやうな事になる、其所まで行かなければ青靨めた顔をして泣きの涙で目を送るといふ、多くの婦人達は職を求める危険が少ない代りに、お嫁に行つたといふ其刹那槍玉に上る事が實に多いのである、學校生活の時代には蝶よ花よ、實に此世の中は理想

の郷の如く思ふて居つたのが、一度嫁に行つて見れば姑に呪まれる、理想と思ふた良人は獸類のやうな人間であつて、到底生涯添ひ添ぐべくもあらずといふやうな事になつて来た時に、是で大抵な女が身體が死ななければ心が死んでしまふ、實に危いものである、男子の方は何うであるか、何是式の事はと云つて初めの中は氣張つて居る、ところが家庭が甘く行かないといふ事からして、姑が最愛の妻を虐め出す、進退維れ谷まるといふやうな場合になつて来て夫から馬鹿を始める、遂に身を持崩してしまふ者が幾千人あるか幾萬人あるか、實に多くの例を眼前に示される、是れ確かに人生の危機である。

其次に来るのは得意なれば得意に伴ふ危機がある、失意になれば失意に伴ふ危機がある、何方にしても實に薄き氷を踏むが如く、深き淵に臨むが如く、他人に煽動上られた結果思はぬ不覺を取つて、日糖會社の社長酒匂君の如く、我と我一命を棄てなければならぬといふやうな氣の毒な事も沸いて来る、又失意になれば失意になつた結果として、嘗ては政治家として時めいた新井毫君の如く、瀬戸内海の藻屑と消えなけ

ればならないやうな事も生じて来る、普通の人としては今まで会社に忠勤を擲で、
 今まで銀行に能く仕へたといふのに、俄かに辭令が来て免職となつた、其免職の辭令
 を受けた時に地舖踏みをして、斯うではなかつたと思ふ時に臍が千切れるやうな思ひ
 がする、其臍の千切れるやうな時が即ち人生の危機である、ところが天は残酷しいも
 のである、また夫丈では許さない、妻が病床に臥して半年も一年も起つ事が出来ない
 といふやうな苦しい事を添物にして下さるのである、先日一人の岩崎といふ兄弟が永
 眠られたが、今を去る事二年前彼れの長男の脇太郎といふのが天王寺中學を將に終へ
 んとして斃れた、卒業證書は校長の恩寵に依つて寢床で與へられた、青年の脇太郎は
 卒業證書を手に握つたが、多分卒業證書に接吻したうらうと思ふ、併し身は起つ事が
 出来ない、遂に彼の世の人となつた、此脇太郎氏が死んだ時に父親の喜三郎氏は既に
 死の數の人となつた、何故かといふに彼れは砲兵工廠の職工長であつて、僅かより
 貰へない日給の中からして此長男が中學を卒業したらばといふ一筋の希望を以てあら
 ゆる物を注ぎ込んだ、病氣に罹つたといふ時には更に有る物無い物悉くさらけ出して

借金までも拵へて、其子の病氣の治らん事を求めた、其子が既に死んだといふ時に、
 此父親は遂に二年後に死なねばならない病根が其中に潜まつたのである、實に悲惨だ
 人生の悲惨此所に至つて極まれりと謂つべきである、天は斯くの如き添物を危機を踏
 めるところの人間に下さるといふは、抑々是れ何の意味であらうか、尙其他に海の難
 山の難盜賊の難火事の難、實に種々難多なるところの難關を越るなければならぬの
 が人生である、斯る危機を踏まねばならず、斯る難關を越るなければならぬところ
 の私共人間は、如何にして「安しや罪の世にも主の血に依りて安し」と歌を謠ひつゝ、
 之を過す事が出来るか、到底尋常では過されぬといふので、諸君は信仰にお遣入り
 なさる譯である、此前の聖日にお話し申した如く我心の中に、世界の總てよりも優れ
 る心霊のある事を發見して、此心霊は更に天の力を加へて貰つて、水でも火でも何の
 其といふ勢ひを以て之に耐るところの信仰を養ひたいといふので、御互ひはパンテス
 マを受けてキリストの弟子となつた譯ではあるまいか、又此様な今お話しするが如く
 に右を見ても左を見ても悲惨極まりなき世の中であるから、切めては後の世に此世の

取返しを附けたいといふ考もあつて、否此世で人格を磨いて置けば、後の世に於ては
行先よしといふ考からして、信仰にお道入りになつた方もあらうと思ふ。

然るに、諸君、平常無事の時には聖書と讚美歌を携へて教會に出遣入をする、婦人
會には嫣然なる顔を以て聖書の講義を聴く時に、互ひに愛し親むといふ結構な事もあ
るのである、又信者互ひに「天津世の心地する」と云つて共に誦み共に興する事もあ
る、平常事なき時には立派な信者であるところの者が、さて危機が来たといふ時に、
お弟子方がサア海が荒れて来て船が覆るといふ刹那、狼狽騒いで先生々々、早う起き
て下さい、もう船が覆りますと云つたのと同じ事、狼狽騒いだ結果として信仰も心霊
も何所へか飛んで行つてしまひ、主イエスが我々の顔を覗き込むやうにして、オイー
體お前等の信仰は何所にあるかとお尋ねなさる、お前等の信仰は何所にあるかとお尋
ねなさるのである、事のない日には信仰も要つたものぢやアない、鮫波の中を歌乃唱
ふて過す時には心霊の修養も別に要らない、けれども船が覆らうとする人生の危機
に臨んだ時が信仰の必要な時である、其信仰の必要なといふ時に汝の信仰何所にある

かキリストに答められねばならないやうな信者では駄目である、實は氣の毒な信者、
詰らない信者である、過日バルメル夫人の傳記を読んだ時に、此夫人はウエリスリー
大學の經營に八年間も費つたのである、ハルワード大學の教授バルメルと結婚をして、
後にはボストンのケンブリッジに居を構へて、亞米利加の教育界の爲に骨を折つた、
縦から見ても横から見ても實に涼しい美しい人格の人、而も深い學問を極めた人、然
るに此人の生涯を見ると大學に勉強をして居る時には囊中屢々空しく、財布の中に金
がない、幸と大學を卒業して一の女學校に教ふるやうになれば、田舎の數醫者であつた
父親が嘗て商業に手を出した爲に破産をしなければならぬといふ運命に出遭つた、
自分の月給も妹の月給も殆んど全部を舉げて父親を扶けてその破産の場合を忍んだ、
幾干もなく此夫人は屢々咯血した、遂に寢床の中に靜かに寝まなければならぬ事に
なつた、さう斯うする中に最愛の妹が肺病に罹つた、自分に咯血をするやうな弱き身
でありながら、其最愛の妹なる肺病患者を自分の傍らに置いて之を看護し之を養生
させ、幾日も一夜伽をして扶けてやらなければならぬやうな事に陥つた、然るにバ

ルメル夫人は自分が咯血をしようが妹が肺病に罹つて死なうが、父親の破産の報知に接しようが囊中屢々空しといふやうな貧乏に迫らうが泰然自若たるものであつて、少しも狼狽する事もなければ周章する事もない、己が爲すべき事は着々と手を着けて行つて、ウエリスリー大學をして亞米利加で一等の大學たらしめた事を見る時に、何か此人の生涯には他の人が持たない者がなくてはならないと思つて幼い折りの事を調べて見ると、年端も行かない五ツ六ツの頃からして姉嬢であるが故に重い責任を受け、妹達の世話をなし手足の續く限り此身體の續く限り其母親を勤り扶けて来たといふ、さうして母親の乳房から天の父に信頼すべき事を吸込んで、日曜學校に於て學んで遂に日曜學校の先生となり、如何に多忙な時と雖も如何に困難な時と雖も、此夫人が受持つた教育、或は教會から托せらるゝところの仕事を辭したといふ事はないのである、此夫人の骨にも髓にも天の父を信じキリストを慕ひ、此世の重き苦痛は後の世の光榮に比べられぬといふ事を自覺したので、總身悉く信仰であつたと申しても宜いのである、是がハルワード大學の教授バルメルと結婚をいたした時には、其身體の體量は百

封度、僅か十二貫よりなかつたといふ、今日此所に御列席なされる御婦人方は八貫か九貫もない人もある、けれども外國の婦人で十二貫といふは實にヒョクとした身體である、ところが結婚後一年目には體量が四十封度増したといふ、奮闘の結果身體を作り立て精神を築き立て山なす困難を打破つて忍ぶといふ立派なものが出来たのである。

キリスト、イエスの御生涯を尋ねて見ても、十三か十四で父親のヨセフを喪ひ給ふたといふのは、先日もお話しした如く是れキリストの危機である、夫から三十にして世にお立ちなされるや野の試みにお遭ひなされた、是れ即ち危機である、更に進んでバナテスマのヨハネといふ者を殆んど師と仰がれた、其先生にお別れになる、是れキリストの危機である、夫から人望がズーツと附いて来て王様にしさうなといふ得意の時代が来た、是れキリストの危機である、得意の山の絶頂にお登りになつたかと思ふと、今度は弟子方がキリストの傍から離れようとしたので、之に向つてお前等も私を棄てて何所かへ行つてしまふかとお尋ねなされたこともある、是れキリストが失意の谷底

にお沈みになつたのである、上つたり下つたり實にキリストの生涯は波瀾の多き生涯であつた、けれども如何なる場合にお臨みなされても申命記の言葉に依つて養はれたるキリストは、母親のマリアの口から教へられたところの聖書の言葉は、キリストの心に貯へられて毎もキリストを活かしキリストに元氣を付けて、キリストは總ての危ふき場合を切抜けて、遂に十字架上に榮の冕を頂く身とおなりなされたのである。

諸君、生れながらの基督信者、母親の乳房から信仰を吸ふたといふ人間、父と母との祈禱の中に育つたといふ者は弱いやうであつても、その中に非常に強いところがあつて一時横路に外れたと思つても、尙其耳に残つて居る讚美歌の聲、其心に刻まれてある聖書の言葉が何時しか之を誘ふて、再び信仰の道に立戻らしむる事が多い、けれども中年にして信者となつた者、此世の傷を受けて後に信者になつたところの者は一廉立派な信者になつて居るやうであつても、多くは表面だけであつて、丁度一向宗を三十年四十年信じて居つた婆さんが基督信者になつてアーメンと唱へる様になつ

たが、サア火事だ、サア泥棒だといふ騒ぎになると、アーメンといふ聲を失つてしまつて南無阿彌陀佛といふ聲が出て來ると同じ事である、事のない日には立派な信者であるが、サア今度の北區の火事のやうなものに出遭つた、サア何うも病人が出來た、もう死ぬる、イヤ自分は俄かに免職された、もう到底此世の中は何うもならないといふ事になると、部屋の中に潜々と泣崩れてしまふ、部屋の中で泣かない人は天を怨み他人を恨むといふやうな事になつてしまふ、もう此世の中は頼みにならないと云つて厭世的になる、是れ祖先以來養はれた佛法が其所へ出て來た譯である、爾曹の信仰は何所にありや、此信仰が意識に導入つて居るばかりぢやアない、副意識の中にまで導入つて來なければ危急の場合にアーメンが出て來ない、イヤといふ場合に夫の父が出て來ない、イヤといふ時に天の父よ我を憐み給へ、我を助け給へ、キリストの御足の跡を踏んで立たなければならぬといふ信仰が我中に燃えて來たならば、何が來ても彼が來ても泰然として神の聖旨のあるところに従つて行くのである、神の聖旨を行ふといふ決心で其人の生涯を貫く事が出来る、夫が信仰である『歳寒而後知松柏

之後洞」と孔子が仰せられた、春から夏にかけては常盤樹も其他の樹も皆青々として居るから何れが何れか分らない、サア霜が降りて来た、雪が降つて来た時に、常盤樹だけはシヤン／＼として其緑を保つのに、他の樹は枯れてしまつて見る影もない、夫と同じやうに私共に實際に骨にも髓にも信仰が這入つて来て、父は我と偕に在りとキリストが仰せられた如きものが我中に這入て居りさへすれば、どんな事に出遭つても大丈夫である、其大丈夫といふところまで漕付けない我々は實に氣の毒なものである、實に氣の毒なものである、其苦心は水の泡だ、けれども大いに養ひ大いに磨いて立ちさへいたしたならば、如何なる困難な場合にも笑つて其間を過す事が出来る、假令笑ふ事が出来ないにしても天命に安んじて其場合を過す事が出来るやうになるのである。

諸君、常に路加傳八章の二十二節以下を見られよ、お弟子方が狼狽した時に、キリストは船の艙の方に睡つて居らつしやつたが、眼を覺し來つて平然として弟子方の顔を覗き込むやうにして、お前等の信仰は何所にあるかとお尋ねなされたやうに私共も

折節キリストに顔を覗き込まれて、お前は先日教會でエライ大きな聲を出して祈禱をして居つたが、お前の信仰は今日何所にあるか、此信仰が何所にあるかと尋ねらるゝやうな事ではならない、尋ねられぬでもチャンと我中に其信仰が活きて、我骨髄となつて存して居りさへすれば、是が實際な基督信者である、其所まで行かないのは未だ信仰がどうかしてゐるのだ、どうぞ諸君は信仰が何所にあるかと問はれないでも宜いやうな信者になつて貰ひたいものである。

眞我の流露

イエズス曰けるは父よ彼等を教し給へ其爲こころを知らざるが故なり

(路加傳第廿三章三十四節)

羅馬書の第七章十三節以下を読んで見ると、使徒パウロは自分の中に二人の人があゝる、一人は善い事をせよとすると他の一人が夫を妨げる、二つの者が我胸中で戦ふて

眞我の流露

居ると申して居る、善をしたといふ方を清められたる人といひ、悪をせよといふ方を生れた儘の人といふのである、此所に眞我といふ字を使つたのは眞の我といふ事である、是は一人一個の本領といふ意味である、眞我といふ字を使へば之に對して物我といふ文字を用ひなければならぬ、物我、御互ひが此世の中に生活をするのに我も眞の我ばかりであり、人も眞の我ばかりであつたならば疑ふ事も要らず、心を扱ふ事も要らず、水入らずの親子のやうな有様である、誠に清く結構な世の中であるけれども、何所の何國へ行つて見ても、眼に見える限りは物我ばかりである、物我といふは私慾私情に捕虜にされた我である、電車に乗れば電車の中は物我ばかり、我勝ちに良い位地を占めて他の人を顧みない、店屋に顔を突出すと此方の懐中を直きに見て、富裕さうであれば多く儲けてやらうといふ事で掛つて来る、宿屋に泊れば宿賃が決つて居るから仕様がな、成るべくお世辭を澤山に列べて茶代を餘計に置かせようとして掛る、甚だしきに至つては親子の間でも子供は親の金を成るべく多く引張り出さうとする、親は成るべく自分の利益の爲に子供を使はうとする、實に困つたものである

併しながらさういふ物慾に掩はれた人々の間に於ても時々眞我が現はれるものである、秋の霜枯時に何方の山を見ても荒涼寂寥實にや天地は無情の色を呈して居るのに、彼の麗はしい菊の花が爛熳と咲亂れて而も麗はしい清香を放つや、如何にも乾燥無味の秋空に春が來たやうな心地がする、何うも物我ばかりの世の中では堪へ切れない、例之は商賣人が株式に手を出して其勝負を争ふて居る時の顔貌と云つたら見られたものぢやアない、宛然物慾の塊が動いて居るやうに見える、けれども其商賣人が會社を離れて己が家に歸つて幼児を懐いたり抱へたりして楽しんで居る時には其所に眞我が現はれて、菊の花でも眺むるやうである、物我に掩はれた商賣人が幼児を相手にする時に眞我に歸つた其刹那は、自分もさぞ楽しい事であらうが、夫を見るところの家内眷族までが皆笑を湛えて如何にも嬉しさうにして居る、是で人間の壽命が延びるといふ者である、先日加納子爵の家を訪ふた時に其所の令夫人が斯ういふ話をされた「家の娘共が學習院から歸途に姉と妹と手を携へて毎も三等汽車で歸つて來ますが、其列車の中には色々な人が乗込んで居ります、其所に一人孤兒院の子供が乗つて居り

ましたが、如何にも憐れな聲で清快丸が何かを賣つて居りました、其時に妹の方が姉に姉さん少しお金をお遣り遊ばせと云つて屢々姉を促しましたが、姉は多勢見て居るところだからして金を與へ兼ねて躊躇して居つたのであります、汽車が大森の停車場に着く時に其列車の隅の方に乗つて居た外國の婦人が窃と懐中から銀貨を取出して、さうして子供が降りようとする途端に、子供の肩から掛けてあつた袋の中に子供が知らないやうに銀貨を入れてやつた、夫れを姉と妹が見て歸つて来て、お母さん斯ういふ事がありましたと云つて話をしましたと私は其話を聞いて、其列車の中には實に慾の塊が多く乗込んで居る中に一人の外國婦人が眞我に立歸つて、或は宣教師であつたかも知れないが、誰も知らないやうに窃と金を出して、子供も知らないやうに其袋の中に入れてやつたといふは、即ち是れ眞我の流麗せるものである、それを二人の少女が見て非常なる感に打たれた譯であつたらうかと思ふ、これあるが爲に實に此悲しき味氣なき霜枯時のやうな世の中も私共は先づ生きて居れると思ふのである、若し眞我が何れの所にも流麗しなかつたならば堪へられたものじやアない。

然るに此眞我といふに先天的のものと後天的のものと二つがある、前者は生れながらにして有つて居るのである、夫は親としての本領は子の爲にならば己が身を棄つるといふところまで行くのである、假令棄つる場合がなくても、我子の爲めならば己れを割く事だけは敢てするのである、曩に「花よりも愛でにし我子よ」といふ歌を聞いたが、路加傳の十五章を繙けば彼の放蕩息子子の比喩に「云ふ一節がある、襁褓を被て我子が歸つて来る事を聞いた父親は直ちに己が家を走り出で、之を迎へに行く、子供の方では、お父様お救へに背いて遊女の爲に頂いた金は使ひ果して實に一文無しになつて歸つて来る我であれば、子と稱ふるには足らない者であります、神の聖前と貴方の前に罪を犯しましたと白状するのを、父親は半分も聴かずして、其破れ衣を肩に掛けた子供を抱いて之に接吻し、最も能く肥えた懐を宰つて我子が歸り来れり云つて御馳走をして悦ぶといふは、是れ即ち親の眞我が現はれたのである、然るに兄息子は畑から歸り来る時に、我家に珍らしくも絃歌の聲や舞の音が聞えるので、何だ一人の僕に問へば、彼れは貴方の弟御がお歸りになつたからして父君が悦んで振舞を

なされて居ますと云つた時に兄弟は非常に不興である、自分は始終父の許に在つて忠實に家の事に力を竭すのに未だ曾て我爲には左様な酒宴をお開きになつた事はない、然るに譲り受けた物を遊女の爲に費した放蕩息子が歸つて来たといふ事であらう、いふ事をなさるとて怒つたといふは、此兄息子は兄だけに物我が掩はれて居る、父のみは物我を離れて眞我に歸つて我子を受入れた、此比喩の意はキリストが天の父は斯くの如く父として、本領を以て我等人間に對し給ふといふ事をお示しになつたのである、子が親に對する時にも偶子としての眞我が現はれるものである、けれども親が子を思ふ其眞我から生ずる思ひに比べて見れば、子が親を思ふ心は實に淺いものである、相濟まない事であるが實に淺いものである、比べ物にはならない、西洋の人々は殊に英吉利、亞米利加の人々は夫婦の間に時々眞我を現はす事がある、けれども一夫多妻の國に於ては到底良人が妻に對しての眞我は現はれない、妻が良人に對する眞我は現はるゝかも知れない、是は已むを得ない、仇し女が傍はらに在つては何うも眞我が現はれない、是等は人の本領で、實に其眞我の現はれ来る時は美しいものではあるが、先きにお話

した如く先天的のものがある、是は鳥獸にもある、鶏を飼つて見ても、犬猫を飼つて見ても、親としての鳥獸には人間と同じやうに我子に對しては眞我の流露せるものがある。

して見ると人間として最も養ひたいのは後天的の眞我といふのである、夫は生れた後に自分の修養と心掛に依つて得らるべきものである、譬へば天の使命を悟つて、其使命の爲に盡さうといふ心が切實になつて来て、己が使命の爲には位も忘れ名譽も忘れ金銭も忘れるといふ人があるが、其人は眞我を養ひ得た人である、既に眞我を養ふたとすれば、如何なる場合に出會つても踏外れるの過失のといふ事は更々ない事になる、イザといふ場合になつて道を踏外すのは未だ眞我が養はれてないからである、見られよ、シモン、ペテロはイエス、キリストが捕縛に就き給ふ其頃までは眞我を養ふて居なかつた、物我が交つて居つたのである、物我が交つて居つた爲に貴方はナザレのイエスのお弟子であらうと、祭司の長の下僕に星を指された時に、イヤ私はイエスなぞ、いふ人は知りませんと空嘯いた、三度までも空嘯いたのである、けれどもキリ

ストが汝は鶏の鳴かざる前に三度我を知らないといふと仰せられた其御教訓と、キリストが三度まで知らないといふ時に回首つて、ペテロの顔をシロリと一目お睨みなされると、其時シモンは身も世もあられない感に打たれて男泣に泣いたといふことである、此時からペテロは其眞我が現はれ來つて、五旬節の日に於てのペテロは實にエライものであつた、七十子會議の前に曳出された時のペテロは偉丈夫であつた、我見しどころ聞きしところは證明せざるを得ざるなり、半屋の中に放り込むならば放り込みなされ、首を斯るなら斬りなさい、我實驗したところは云はずして居られませうかと云つて立つたといふのは、實にペテロの眞我が遺憾なく流露したのである、彼のゼヘダイの子のヨハネといふ者は天より火を呼下して此街を焼くまで敷圍いた血性男子であつた、けれども多年修養の後に彼れが年老いて一步も歩けないやうになつた時に、若者の肩に負はれて教會の集會に臨んで「幼兒よ爾曹互ひに相愛すべし」といふ一言を繰返すのが常であつた、ヨハネの本領は愛であつた、ヨハネの眞我は愛であつた、「爾曹互ひに相愛すべし」といふ其一言は私共の千萬言の説教よりも人々の肺腑を

貫き身を棄て、他人を愛さなければならぬといふ感を起こさしめたに違ひない、パウロは如何であつたか、彼は眞に牧師であつた、哥林多後書十二章の十五節を讀んで見ると「我いよ／＼爾曹を愛すれば愈爾曹に愛せられず然ぞ欣びて爾曹の靈魂の爲に財を費し身を盡すべし」と録してある、是れパウロの眞我の流露である、十三通の書翰を讀んで御覽なさい、如何なる酷い目に遭はされてもキリストの信者を愛して是が爲に己が身を盡すといふ事は一度もパウロは踏外した事がない、今東京で教會上非常に成功して居る一人がある、其人は何うも餘り皮肉な事をいふとか、或は何うも妙に人の事を穿るとか云つて嫌はるゝ性質の人である、併しながら今日日本に於て彼は一番能く整ふた教會を有つてやつて居るが、其人に君は何が一番好きかと私が尋ねて見たならば、演説は口が吃るからして大方好きとは云はないだらう、けれども文章は其人の得意だから好きだらうと思つたところが、其人の長所である文章を書く事は一番嫌だといふ、夫では君は何が一番好きかといふと教會だといふ、好きこそ物の上手なれで、此人が教會が好きだといふ、夫で其人の教會は非常に榮える、さうすると彼れ

の本領は牧師といふ、教會の人の爲にならば財を費し身を盡すといふところまで行く人である、實にエライところが其所に現はれて来るのである。

今亞米利加人は何故にワシントンとリンコンを晩の明星と宵の明星の如く尊ぶかと云へば、合衆國の爲と人道の爲には己が身を犠牲に供へるといふ事が二人の眞我であつたからである、是は實にエライものである、私は伊藤公爵といふ名を聞く時には毎も鼻で扱ふて居つた、又演説の度毎に幾度公爵を罵倒したか知れない、彼れの私行上から云へば私は倫理道德の敵だと今でも思つて居る、けれども上御一人の爲と國家の爲に生命を捧げるといふ赤誠、即ち政治家としての本領を有つて居られたといふ事は許さなくてはならないのである、哈爾濱に於て韓國人の爲に狙撃されて、彈丸が幾らも其肉に撃込まれた時に更に狼狽るところなくして從容として死に就いたといふは、適れ公爵の本領が其所に現はれた譯であつて、彼れに従つて居つた某は腰を抜かし某は舌が強張つたといふ時に、撃たれた御本人は更に狼狽るところなくして從容として死に就いたといふは見上げたものだと思ふ、彼れの眞我は上御一人と我日本國家

の安全の爲には盡すといふものがあつた事を見て、四千八百萬の國民は彼れが私行上より流した害毒のあるをも打忘れて、彼れに對して、實に古今に比類なき悲哀の情を以て對した譯であつたらうと思ふ。

諸君、今日私共はナザレのイエスの死を弔ふために此所に集つたのである、キリストの眞我は是れ又養はれたものであつたと思はる、昔の人は生れながらだと申すのである、生れながらのところもあつたが、實は非常にお養ひなされたのだと思ふ、何と云へば「ゲッセマネの園に祈禱の爲にお這入りになる其場合に」「我心太く愛ひて死ぬるばかあり」と仰せられた、ゲッセマネの園に於て祈禱をなさるゝ時に「若し聖意に叶はば此杯を我より離ち給へ」と二度までもお祈りなされたのである、キリストにも亦物我が多少あつたに違ひはない、けれども我心の従を成んとするに非ず聖旨に任せ給へといふお祈禱をなされて後のキリストは物我が離れてしまつて、眞我のみ残つたのである、故に十字架の上に於て七度言葉を吐きになつたのであるが、其言葉を味はひ來れば四苦八苦の苦痛の中に母親をヨハネにお頼みになつて「是れ爾の母なり」と

仰せられたのは、子として親を思ふの眞我が遺憾なく流露したものであるまいか、
 「父よ彼等を赦し給へ彼等は其爲すところを知らざれば也」と云つて、己れを捕へて
 磔刑に遭はせた仇人の爲に赦をお願ひになつたといふは、是れ救世主としての眞我が
 圓滿に流露した者である。「我渴く」と仰せられたのは飲みたいといふ物我が其所に現
 はれたやうであるが、併し掌から血が流れ、其傷の爲に非常なる涸渴が生じ來つた時
 に人間としてのイエスが我渴くとお叫びになつたのは、是れ即ちキリストの天眞が現
 はれたのである、斯ういふ場合に女々しくも渴くなを言つて不可ないといふ氣張があ
 つたならば、夫れこそキリストの物我が現はれた譯である、渴くから我渴くと有りの
 儘に仰せられたところに私はキリストの眞我を見出すのである。「我事終りぬ」といふ
 お言葉は世に降り給ふた使命、犠牲の死を遂げて世の罪人を救ふ、其使命を果したと
 いふ勝利の聲であつた、是れ即ちキリストの眞我が現はれたのである。
 諸君、人間は養ふたといふだけでは未だ足りない研濟した人間は眞我が中に潜んで
 居るからして、イザ事といふ時に其眞我が現はれて來て死花が咲くのである、其眞我が

を養ふて居ない者はイザ事といふ時に物我が現はれて來て缺點を出すのである、亭主
 が生きて居る中には如何にも貞操の堅いやうに見えた女が、一度亭主が冷やかになつ
 てしまふと忽ちに物我を現はし來つて、世間に指彈さるゝやうな事になるではない
 か、一昨日であつたが某雑誌を覗いて見ると、新渡戸博士が自分は北海道でエライ女
 を見た其女は主人は肺病に罹つて長く病床に臥して居る、四人の子供が足手纏ひにな
 つて居る、然るに何時行つて見ても孀然として、良妻として慈母としての勤めを盡し
 て居る、其良人が死なれた時には今度こそは彼の女が狼狽するであらうと思つたのに、
 實は涙一滴溢さないで其間を泰然として凌いで良人を見送り其子供を立派に育て、居
 つたが、遂に自分が病の床に臥して起居も自由にならないやうな場合になつた時に、
 今度こそは彼れが缺點を出すであらうと思つたのに、遂に死に至るまで毎も笑顔であ
 つた、實にエライと云つて居る、或人が其女の現場を見て來て先生が彼女がエライと
 仰しやつたが、私は或ひは賞め過ぎではあるまいかと思ひましたが彼女の臨終の際に
 輝ける笑顔を見た時に、先生の眼は違はぬ、實にエライ女である事を認めたといふ話

しをしたと書いてある、其點だ、物我に掩はれて居るところのものは今太陽が光線を放つたかと思ふと直きに雲霧が掛つて暗くなるやうなもの……眞我を養ふたところの者は、假令雲が掛つても直ちに光輝燦爛たるやうなものである、私共の朋友の中にもと知己の中にも何だか立派な事も言ひ又時には立派な事もするし、良きやうな人も多しなからずある、けれどもイザといふ時に何だか頼みにならないやうな心持のする者も居るのである、イザといふ時に頼みにならない人はどんな人だといふと、夫れは眞我が養はれて居ない人、實は其人に依り頼むべき本領が出来て居ない、夫で頼み甲斐がない、平素は何うも餘り愛想もない、時には皮肉な事をいふやうな人間でも、其人の中に本領がありさへすれば眞我が養はれる、キリストの爲神の爲世の爲人の爲ならば名譽も地位も財産も何の其といふ勢で、自分の初心を貫ぬくといふ眞我が養はれてあれば、其人は實に頼むべき人である、何ぼ役に立たない父母でも子供は命の親と頼む、何故頼むか、他の人では役に立たぬ、父母でなければならぬ、父母は又其子の爲にならば命を棄て、掛るといふ本領があるからであらう、妻が良人を頼むべきところは其

點である、自分が病氣にでも罹つたならば良人が自分を棄て、しまひはしないかと思つて居れば、何ぼ三越に行つて衣服を買ふて来て呉れても、高嶋屋から頭の裝飾を買ふて来て呉れても其妻は一日も安心が出来ない、何一ツ買ふて来て呉れなくても、イザ事といふ時には力になつて呉れるといふ良人の本領を認めて居れば、即ち眞我が其所に現はれて居れば妻は満足する、良人が妻を思ふのも亦然りである。

して見ると諸君、ナザレのイエス、キリストが臨終の際十字架にお現はしなされた其眞我は、キリストが救世主としての眞價を示したものであるから、ごうか私共もキリストに倣ふて日々に眞我を養ふて其眞我が病氣に罹つたり貧乏に陥つたり、種々な困難を嘗める際に遺憾なく現はれて来て、さうして神の御榮えを現はし人の光輝を現はす事の出来るやうになりたいと思ふのである、我々基督信者がさういふやうに眞我を養ふて、其眞我が此所に發露して来たならば、夫が此の世の中を……霜枯時の秋の空に菊の花が清香を放つ如く、趣味深い住易い天國たらしむることとなる、亞米利加や其他の國に行つて見ても其眞我を養ふた基督信者があるが故に私共は良い國だとい

ふ、其眞我を養ふた基督信者を取去つてしまつたならば、亞米利加や英吉利でも眼も當てられないやうな修羅道になつてしまふ、どうか我々日本の基督信徒が其眞我を養ひ來つて、英米の夫れの如く住易い、住心地の宜い國にしたいものである、どうか諸君も其點をお味はひにならん事を切に希望いたしますのである。

人生と詩趣

互に詩と歌と聲に感じて作れる賦を以て調りあひ又うたひて用費の心に主を設美すべし
(以弗所書第五章十九節)

一寸茲に申して置かなければならぬ事は、此詩と云ふ中には支那の所謂詩のみでなく廣い意味の詩であるから、短かき歌長き歌發句俳諧と云ふやうな類も含んである、而して詩に趣と云ふ字を加へたのは何と申したら宜しからうか、例へば山紫水明の境に入れば何となく人の心の中に歌でも詠んで見たい、詩でも作つて見たいと云ふやうな、

其所に一種の面白き感が生じて來る、夫が詩趣と云ふものである、私は十二三の頃漢詩を五十ばかり列べて見た事がある、是は詩を作つたのでもなく又詩を誦ふたものでもない、即ち漢字を列べたのである、と云ふのは詩語粹金や詩韻合英と云ふやうなものを持つて、春ならば春、秋ならば秋と云ふ題に就て古人の句を拾ふて列べる、夫れで詩の形は出來たのであるが詩趣と云ふは何も無い、毎日先生から題を與へられて二首なり三首なり詩作しなくてはならなかつた、ところが此頃は詩趣は偶湧き來るが、扱列べて見ようとする時韻字も平仄も分らなくなつてしまつて、偶ま起つた詩趣を殺すのが常である、右申す如く私は今日詩も作れず歌も詠めず、まあ何も出來ない云ふ武骨漢である、其武骨漢が詩趣を論ずると云ふのは一寸不似合な譯である、詩を列べようとしても句を成さず歌を詠まうとしても成らず、所が心理作用は妙なもので作れないだけそれだけ深く詩趣が活躍するやうである。

扱此詩趣と云ふものには三つの要素がある、第一は想像である、是は人間の能力の中で最初に發達し幼年少年青年の時代が最も盛んである、今日幼年に何か喜ぶやうな話

をして聞かせようとするは即ち伽話でなくてはならぬ、私の方の四ツばかりになる子供は何を云つて聞せても喜ぶ、先づお父さんお話と云ふので舌切雀かちく山、夫れから桃太郎と、何度でも繰返して話をする、幾度繰返して話してもよく聴く、向ふは詰記して居る、詰記して居るが話をすれば喜んで聴く中にすやくと眠る、少年の時代になれば斯ふ云ふ種類の伽話では承知が出来ない、或は冒険小説と云ふ様な者を喜ぶ、譬へば西洋人であれば亞拉比亞の夜話とかロビンソンクルソーの漂流記やうなものを喜んで讀む、私共の少年時代に一番喜んで讀んだのは三國史であつた、是は殆んど詰記するばかりに覺えて居る、それから漢楚軍談、十二朝軍談、私の最も愛讀したのは日本外史である、是れは矢張り一種の小説に過ぎない、更に進んで青年の時代になれば山陽の詩集、古今名家詩集、プラオニング、テニンソン、キップリングの詩集などを繕いて喜んで之を讀む、何となれば想像の翼を擴げて或は亞拉比亞の野を横ざり、或はヒマラヤ山頭に登つて世界の偉觀に接し、或は九天の上に飛上つて耳未だ聞かなかつた處の聲を聞くからである、實に愉快極まるのは想像力の最も盛んなる幼

少年青年の時代である。

ところが人間も三十を越え四十の坂に昇ると云ふ事になつて來ると漸く世路の艱難を経て人生の甘い辛いがよく分つて來る、さうなると頭腦が兎角實際的になる、事物の値を測るやうになる、何でも論理に叶はないやうな事は駄目だと云ふ考になつて來る、そこで金儲けをしよう、位の山に登らう、名譽は得たいと云ふやうな考はあるかも知れない、多分ある、少年青年の時代には或はネルソンや東郷大將を夢み或はシルロトツやカルネギーを夢みるやうな事もあるが壯年の時代になればとてもさう云ふやうな事は思ひも寄らない、五十圓の月給が六十圓になれば結構だ、或は月々百圓より収入が無いのがまあ五割増、百五十圓にもなつたら宜いと云ふやうな譯で、段梯子を一ツづゝ踏みしめく上るやうな時代である、時々は想像の翼を張つて或は南米に行つて一つ幾百萬の身代を拵へて、大層高樓の中に妻子を安らかに眠らせたいといふやうな夢も見、けれども實際手も足も出ないと云ふやうな事になつて、何うも平凡な考に成つて仕舞ふ、考へが平凡になるからして生活も平凡に成る譯である、タルウ井ン

は有名な進化論者であつたが若い時分には非常に詩が好きで毎日詩集を繙いて深い感興に驅られて之を讀んで居つたと云ふ、ところが草木や昆蟲や鳥獸の研究に身を委ぬるやうになつてから、朝より晩まで其方の研究が忙がしくなつて、遂に頭腦が實際的になり理屈的になり論理的になつてしまつたのであるからして如何なる詩を見ても面白くないやうになつた、何等詩趣が起らないやうになつた、噫失策た、噫失策た、今一度あの青年時代に楽しんでやうな詩を樂しんで見たい、あの青年時代に喜んだやうな歌を悦んで見たいと思ふが一寸も悦ばれない、そこでメルウ井ンは如何に忙がしい生涯を送る者であつても、毎日一度は巧妙なる詩を讀むが宜しい、吟するが宜しい、人間には詩趣がなくてはならないと云ふ事を論じて居る、是は私は味ふ可き事だと思つたのである、其次に詩趣をなすところの要素は感興と云ふ事である、英語にアスピレーションと云言葉がある、即ち水蒸氣や香の煙が上へ昇るやうな工合に人の心から自然にして向上の思ひが發するのである、今一ツはインスピレーションと申して、是は上よりの力が加はつて來て、何か斯う神が手を延べて我を上へ引上げて下されるや

うな工合に此方の方が上つて行くやうな思ひが起ることである、アスピレーションは我中に植込まれたものが發揮するを云ひ、インスピレーションは上から非常な感發力を與へられて、止むに止まれないやうになるを云ふ、是は諸君も時々自覺されるであらう、譬へば私が富士の高根に登つて千代の巖に腰打掛けて、東の方に眼を放つて大磯茅ヶ崎の海岸からして江の島が錦繡の如く浮び、又眼下には函根の蘆の湖や離宮が手に取る如く見え、又西南の方を望めば一萬尺内外の信州の峯々山々は白雪を冠して空際に聳えてある、此偉觀に接した時に非常なる感興が湧いて來た、其眺望は偉觀と云ふか壯觀と云ふか將又宏壯と云ふか、殆んど形容の辭がなかつた、噫詩が出来るならば噫歌が出来るならばと云ふ心になつた「古人が是は是はと計り富士の山」なんものであらう、實に山を見て川を見ても石を見ても岩を見ても草を見ても木を見ても鳥を見ても獸を見ても、母親が子供に乳房を含ませて居るところを見ても、或は賤の女が幼兒を背負ふて山坂を越ゆる有様を見ても、一種の感興が湧き來たつて、之を

詩になり歌になり現はしたいと云ふのが是人間の常である。

今一ツ進んで人間には毎もお話するが如く理想と云ふものがある、詩は志を言ふとも云ひ、又この行くところを言葉に現せば詩となること云ふ事もある、理想はより良き理想を生むのである、其より良き理想は更により良き理想を生むのである、丁度幼き子供が盛来い／＼と云つて呼ぶ時に、此處迄来たら甘水やらう／＼と云つて釜を呼び寄せる面白い歌がある、兎も角人間はさう云ふやうな譯で梯子段を一段昇るともう一段と引張られる、又一段昇ると又一段と引き上げられる、さうして五段十段二十段三十段と昇つて行き、もう百段昇つたからして之以上はなからうと思ふと間違た、百五十段でも二百段でも五百段でも千段でもあるのであつて、ヤロブが夢に見た梯子は天迄達してあつたと云ふのであるから私共ののぼる理想の梯子段は無邊際であるからこれ以上はないと云ふところがない、其點が實に私共の幸福なるところである、此頃夏休みになつて、新體詩と云ふやうなものは何んな事を書いてあるか知らんと思つて引出して見た、私の見たのでは満足が出来ない、是は面白いと思ふと想がない、想

が面白いと思ふと句をなして居らぬと云ふやうな譯であつて、私の理想を満足せしむるやうなものは未だ見出さなかつた、一寸宜からうと思ふものもあつたがどうも満足が出来ない、私が幼年の時代からして折節開ひて見た中では志を云ひ現はして居るもの、所謂理想を論ふて居る點に於ては横井小楠が第一である、其一二を擧げて見よう「神知靈覺湧如泉、不用作爲附自然、前世當世更後世、貫通三世對皇天」實に偉い詩である、マア一ツ秀逸なものがある「帝生萬物靈、使之亮天功、所以志趣大、神飛六合中」支那人の詩では「萬物靜觀皆自得、四時佳興與人同、道通天地有形外、思入浮雲變態中」と云ふ句を愛誦して居る、是以上の詩は多く知らない、或はロングフエローの「人生の詩」と云ふやうなものも實に妙である、更に聖書の中の詩の十九篇は偉い詩だと思ふ、お手近にあるからしてお讀みになつたら宜からう、斯う云ふやうな詩を讀んで居ると、何うしても理想が高まらざるを得ない、一ツの理想はより良き理想を生み、より良き理想は更により良き理想を生むと云ふ事は其邊の意味を現はして居るのであらうと思ふ、サンタヤナは人間の高尚なる理想に至つては是は韻文でなくて

は到底言現はす事は出来ないと叫んで居る、或は夫が繪畫に現はれ或は夫が彫刻となつて現はれて来る事もある、言葉に現はれたのが詩である、紙の上に現はれたのが繪畫である、型に現はれたのが彫刻である。

そこで今お話しした想像と感興と理想の此三ツに基いて聖書六十六巻を當嵌めて見たい、幼年の人々に讀ますべきものは何であらうか、萬人必讀書と云ふ聖書も幼年に適當なものはいくつかないやうである、路加傳第二章の九節以下に「近傍に羊を牧もの有けるが野に居て夜間その群を守たりしに夥くの天軍現はれ出で天上ところには榮光神にあれ地には平安人には恩澤あれ」と書いてある、彼の所は意味が分るか分らないかは知らないけれども、幼年と雖も何だか彼所を讀記する時には其心の中に「ベツレヘムの野や牧者を夢み、三々伍々羊が枯草の上に遊んで居る事、或は天上に夥多の星が音楽を奏して謠ふと云ふやうな大きな思想に這入る事があるかも知れない、少年の讀むべきものは澤山ある、譬へば創世記の如き別に韻文ではないが、幼稚の思想であるからして記事の多くは想像である、譬へばノアの洪水と云ふところを見ると百五十日

雨が降り續いたと書いてある、想像も想像も非常な想像である、七日ぐらゐな雨が降り續く事があるかも知れない、日本の梅雨なら三十日、夫を五倍した百五十日、而も大洪水である、今度東海道は實に大洪水、三十里の間は海のやうになつて居ると云ふ、ところがノアの洪水は全世界が水の下になつたと云ふ、恐ろしい想像である、子供や少年の讀むのには實に持つて來いの書物である、尙ダビデとゴリヤラの戦ひも實に愉快ではないか、向ふにゴリヤラと云ふ大の男が立つて、物々しく我に敵對をしようと思ふ者は出て來いと叫んで居る、其所に青年ダビデが身に寸鐵を帯びず狗でも逐ふやうに投石器を以て悠々として出で來り、石を嵌めてバツと投げると、其石がゴリヤラの肩間に當つて大の男が堂と倒れる、其大の男に馬乗になつて腰なる劍を引抜いて首を斬つて差上げると、敵も味方も動揺いて大聲を揚げたと云ふ、丁度那須の與市が屋島の陣に於て扇子的射つたのと同じ事、實に何うも少年の讀物としては愉快禁ずる能はざるものがある、新約聖書の方になれば彼の路加傳の初めにイエスが十二歳の時にエルサレムの宮に昇り、三日三晩の間大學者を相手にして問答された所なども少

年の愛讀に價するものであらう。

更に進んで青年の讀物としては舊約聖書の中で詩篇であらう、次は以賽亞書の四十章以下であらう、是は何うも實に非常なものである、何所を開いてお讀みになつても心飛び魂馳せ、横井小楠をして云はしむれば魂は飛ぶ六合の中と云ふべき所で深奥雄大なる詩趣が其所に充溢してある、新約聖書の方をお讀みになるならば、十二の年から三十の年まで大工の仕事をして居つたところのイエスが、ヨハネと云ふ大人物がヨルダン河の邊りに現はれた事をお聞きになると、直ちに大工の衣服を引掛けて其儘ヨルダン河に飛んで行つて多くの人々の中に混り、ヨハネの人物がどんなものであらうかと其風采を眺めて居らつしやる、さうするとヨハネは爛服を以て群集の中に一人の勝れたる青年あるを見出して「世の罪を負ふところの羔を見よ」と云つてイエスを見付け出した所やヨハネからバプテスマをお受けになる時に天開けて聖靈の如く降り、且「天より聲ありて是我心に叶ふ愛子なり」と云ふやうな所や、又弟子をお取になつて、いよいよ立働かうとなさると今度は人生の前途甚だ何うも心外に堪へない事があ

るからして、ニゲヤの野に道入つて、何う云ふ様にして天下を救はうかと云ふ、其目驗見に就て四十日四十夜の間お考へになつて三ツの誘惑が來たと云ふところから、更に進んでいよいよ活動をしようとなさると、親類縁者がイエスが狂人になつたと云つて捕へに來る、イエスがナザレ村へお來でになると崖から突落さうとする所など青年が讀んで堪らない、實に壯絶快絶の所である、私共人間も矢張りあゝ云ふ工合に青年の時代には思ひ付いたところはドン／＼やつて行く、信するところは何所までもやる、親類縁者が狂人と思ふくらゐに勇猛心を養ふて飛んで行くこと云ふやうになりたい、今時の青年にはそんな事はないが、我々の青年時代にはイエスのやうに行つて見たいと思ひ立ち、先輩を困らせた事もあつた、更に進んで壯年は箴言或は傳道書をお讀むべきである、何も彼も悟つてしまつて傳道書を見ると、悟つたも悟つたも天地宇宙の間何も新らしい事はない空の空なりとある、けれども十三章の十三節に行くと「事の全體の歸する所を聽べし云く神を畏れその誠命を守れ是は諸の人の本分なり」と書いて、人生の大悟は此所だと云ふ事が示してある、或は使徒パウロの十三通の書翰などをお

讀みになると、壯年の實驗が着々として當るところがある、更に老年は何所を讀んだら宜いかと云ふと黙示録の三章か或は黙示録の二十一章二十二章、或は約翰傳の十四章などを讀んで見ると天國の事が手に取るやうに描いてある、實に何うも萬人必讀書と云ふは此事であらうと思ふ。

私は今日諸君に向つて詩を作れとは云はない歌を臨へとは云はない、發句を捻り出せとも云はない、そんな事は抑々末である、さうか御互ひの生涯が詩趣ある生涯になりたい、詩趣ある生涯と云ふは清い大きな理想が出来るやうに、或は聖書を讀み或は説教を聴き或は山に登り河に棹すと云ふやうな、時に感興が頻りに起つて来るやうな生涯、更に聖書に接しキリストに接する時に裏に押へやうとしても押へられないやうな理想が此所に生じて来て、何だか心の中には高妙深奥なる理想のあるところの人になること云ふ、詩趣を味ひたいものである、金儲けや位置の進む事や、妻子を大切にすることは結構である、同じ事なら詩趣を解したいものである、家庭の中に日を送るにして「朝に妻は花をまみ笑ひ夕に稚兒は鳥を踏ふ」と云ふ趣を描きたい、或は此夏の日

妻子を連れて笑面の瀧の奥深いところへ道入つて、さうして石に腰打掛けて父と母とは物語に餘念なく、其息子娘は脛も陽も小川に道入つて、或は草を摘み或は石を拾ふて居ると云ふは是一種の畫題である、實に其所に詩趣が生じ来る譯である、或は良人が車を轆けば妻が後押をする事と云ふところに趣むきを以つて見るならば一種の畫題、一種の詩趣が現はれて居る、又諸君が病人を訪ねて其枕邊に共に語り共に祈禱をする時に、其神妙なる姿は是詩趣にあらざるはなし是實に畫題にあらざるはなし、人生の詩趣此所に津々として起り来るものがある、私共はさうか此神が與へ給ふた生涯を凡俗な詰らない生涯として、ア、と溜息を吐いて居る事の代りに我々の手の觸れるところ我々の足の踏むところ、悉く化して之を詩趣ある生涯にしなすと云ふ事が實に大切であらうと思ふ、聖書の中には散文が多くして韻文が少くないけれどもキリストが「野の百合花を見よ空の鳥を見よ」と仰しやるところは散文であるけれども其内容は一種の詩である、或は羅馬書第八章の受造者悉く歎き勞苦と云ふところは散文であるけれども、宏大なる詩趣が其間に含まれる事を見る、我々の生涯も散文的の所が多

い、けれども散文的の生涯の中に韻文的の生涯が現はれ來つて詩趣をなす、若し夫暇があるならば詩を作るも宜し歌を詠むも宜しい、どうか諸君の詩趣が其所に現はれて來て越むきをなす事を切に希望して止まない、實は詩を作るよりも歌を詠むよりも諸君が歌や詩の題となるやうに、一ツ詩趣ある生涯を自分でお作りになる事が大切である、どうぞ其邊をよくくお味ひにならん事を希望する。

人生の馳場

是故に我儕かく許多の見聞人に雲の如く圓れたれば晴の雲霞を築る罪を除き耐忍びて我儕の前に置れたる馳場を越り、イエス即ち信仰の先導となりて之を成全する者を望むべし、彼は其前に置さるるの喜樂に因てその恥を厭はず十字架を忍びて神の寶座の右に坐しぬ、なんぢら倦疲れて心を衰ふこと莫らん爲に惡人の如此ものれに逆ひしをも忍たる者を思ふべし (希伯來書第十二章一節—三節)

私は不幸にして希臘に參つた事がないから其地形が能く分らないが、書物を調べて見たところではオリンピアの競走と云ふがあつて、是は希臘一國に限られた競走であつたが非常に有名なもので、四年に一回オリンピアの平原で行はれた、其競走場は幅が十六間餘で長さが百七間あり、而して其周圍には四萬から四萬五千までの観客が席を占むるやうになつて居つたと云ふ頗る大仕掛けの競走である、パウロは其書翰の中に度々此競走の事を引いて人生の馳場に譬へて居る、オリンピアの競走で勝利者は橄欖の枝と葉を以て拵へた榮冠を得而して其勝利者を出した土地の人々は之を擔ぎ廻つて大々的祝意を表したさうである、四萬若くは四萬五千の見物人に取圍まれての競走頗る晴の競走である、ところが伊太利の羅馬にては之に五倍若くは六倍するところの馳場が設けられてあつた、丁度私は村上文學博士に案内されてバラチン丘上に登つた時に、博士が此山と向ふのアベンチン山の間はネルコスマキンモンと稱へて、世界で有名なる馳場であると指し示されたので非常なる感興を以て視察した、其馳場と云ふのは今は只灌木の林となつてをる、観客が座したと云ふ所も何か木の生えた山腹

たるに過ぎないやうに覺へて居る、其競走は多くは軍事に用ゐる馬車の競走であつて之を取巻いて見る観客は二十五萬人を算へるほどであつた、二十五萬の観客に取巻かれての競走は雄大と云ふの外はない、實に盛んなる競走をやつたものである、當地で觀兵式がある時に城東練兵場に乗出す所の兵の數は一萬に足りない、僅か五千か六千の者である、之を見る者もマア二萬か三萬に過ぎない、二十五萬の人が其バラチンとアベンチンの山腹に座を占めて之を見たところ斯う考へて見られよ、實に何うも千々萬々、何と形容して宜いか殆んど形容のしやうがないと云ふくらゐである、私は東京で五萬六萬の人が上野の公園の四方に集ふたのを見た時でも其夥しい數に驚いた、二十五萬の人間と云へば實に大したもの云はざるを得ない、然るに希伯來書第十二章の首節にある馳場を見ると、記者は驚くべき想像力を以て雄大と云はうか豪壯と云はうか、大々的馳場を描いたものである、何となればオリンピアの馳場は先に申したやうに幅十六間に長さが百七間、羅馬のソルヌマキシモンは測つて見なかつたから何とも云へないが、幅が二百間に長さが六百間か七百間くらゐのものたるに過ぎない、今私共

の眼の前に現はる、此馳場は六大洲を意味して居る、天文學から云へば此世界は實に小さなもの、五尺三寸から五尺八寸くらゐな身體を持つて居る人間から云へば實に非常に大きな世界、其世界を馳場と見たのである、其馳場が既に大世界であると云ふ事が驚くべき事であるが、其馳場を取巻いて見物をするところの観客は二十五萬や二百五十萬ぐらゐな少數ではない、神を始め凡ての天使及び開闢以來今日に至るまで此世界の競走を終つて天に登つたところの者は千々萬々、殆んど數の知れないほどのものであらうが、夫を觀客と見たのである、實に此馳場を走るのの舞臺である、觀客其者の數の夥しい事を以て驚くばかりではなくして誰が見物して居るか云ふ、觀客の性格を考へて見なければならぬ、天地宇宙の主なる神が第一の觀客であり、世々の聖人達が皆見物人の中に在ると云ふ而も其見物人の中で最も眼に着くところの見物人はナザレのイエスだと云ふ。

諸君はお考へになつた事があるか私は始終考へて居る、實に御互ひ人間が此世の中を走るのに、過去つたところの父も母も兄も姉も我等の祖先も、又我等の友人も皆其

見物人の中に這入つて居る、而も其親客は非常なる注意を拂つて覗き込むやうにして、私共の一舉一動心の中の事までも見物して居る事である、我に親しいところの人々が其親客の中に居つて、而も瞬きもせずして我思ふ事、我考ふる事、我企つる事、我行ふ事、我言ふ事を悉く見て居ると考へて居る、實にエライ事である、此馳騁を走る者は御互ひ人間、諸君も私も一人も残らず此馳騁を走つて居る、雲の如く我を圍繞める見物人の前で此馳騁を走つて居る、時々此世を去つた我子供等がお父さんやお母さんが何う云ふやうに人生の馳騁を走つて居らるゝであらうかと思つて、皆を凝らして見て居る時に彼方で遺損ひ、又此方で失敗を取つては堪つたものではない、實に私共は此興味ある馳騁を走るのは非常なる責任競走である事を自覺せざるを得ない、撰手に選まれてさへも一枚の面目に關すると思つて屬むではないか、我祖先や我父母や我子供等や先に行つた師友が我を見て居る、尙キリスト、イエスが覽て居らつしやる、天の父が見て居らつしやると思へばいかにも大責任競走である、私は豫てお話しした如くオクスフォードとケンブリッジの二大學校に參つて、この大學の食堂に

這入つて見ても、其大學が出したところの大人物の肖像が四方の壁に隙間ない程に掲げてある、大學生が諸先輩の前で食事をして居るのを見る時には是は良い仕組だ斯う云ふやうに仕組んで置けば懦夫も志を立てなければならぬやうになる、けれども希伯來書の記者が説くところは夫よりもマア少し適切である、一人一人の人間の四邊に其人に興味を有つて居るところの者が殊更に注意して見て居る、私共が端艇競漕や徒歩競走を見に行つても、知らない人が白い帽や赤い帽を冠つて競走するのは只面白いだけであるが自分が知れる某が場に現はれたと云ふ時にはもう此方の血が跳つてさうして非常なる注意を以て見る、もう黙つて居る事が出来ないので聲を出して應援をする云ふやうな譯であるからして、天國から見物をして居るところの者も同じやうな意味で私共を見て居らるゝであらう、時には聲を發してさうして注意を與へると云ふやうな場合も少なくないであらうと思ふ、さう云ふやうに私共は考へて、此晴の舞臺即ち人生の馳騁を走るべきではあるまいか、ところが此馳騁を走るには何ふ云ふ心得を持つたら宜いかと云ふと、徒歩競走をやる時には亞米利加の如き英吉利の如き我

肌を他人に見せてはならないと云ふ嚴重なる習慣のあるところにも拘はらず、襯衣一枚に半ズボンと云ふやうな譯で非常な輕装で馳騁に登るのである。若し長いズボンを穿き重い靴を着け而も何か荷物を擔げて居ると云ふ事であつたならば到底勝利を得る譯には行かない、希伯來書には何と書いてあるか曰く「總ての纏へる重き荷を取去り」と、此所を讀んで見られよ、總ての重き物と纏へる罪を除き……總ての重き物と云ふは何を意味するか、人生の馳騁を越る目的は何であるか、此世の馳騁を越る目的は運動に依つて健康體を拵へると云ふ事に過ぎない、鐵のやうな體格を鍛え上げると云ふ目的で徒走競走をやる、人生の馳騁を走る目的は人格を鍛え上げると云ふ、人格を鍛え上げると云ふが目的、其目的を以て馳騁を走るのは單純生活でなくてはならない、總ての重き荷を取除くと云ふ意味は單純生活に道入れと云ふ事である、キリストは馬太傳なり路加傳なりに於て生命は糧よりも優り、身體は衣より勝るにあらずや、何故に飲まう食はうと云ふやうな事を考へるか「先づ神の國と其義を求めよ」と馬太傳には書いてある、路加傳には「只神の國を求めよ」と書いてある、即ち人格

を磨く事に一心不乱になつて飲む事だの食ふ事だの着る事だのと云ふ事に心遣ひをするなど云ふ、單純生活とは何を意味する、自分の身體が雨露に濡れないだけの家があれば宜しい、身體の健康を保つに足るだけの衣食があれば夫で宜しい、自分の身分相應の服裝を着けて居りさへすれば夫で宜しい、贅澤なものは一つも要らない、用ゐもしないやうな部屋の多い家などは不必要であると云ふやうな考になつて、單純生活に道入る、シオドル、ローズベルトは大統領在職中に單純生活の主張者で會つ「單純生活」と云ふ書物を著した、佛蘭西のワグネルを白館にて優待し、日に「贅澤になり行く亞米利加人に單純生活の福音を聴かせたと云ふ事は實に深い思慮より出た事である、英米の金満家は一般に日本のそれに比べて見れば頗る簡單なる生活をやつて居る者が多い、何を食はうか何を着ようか如何なる家に住はうか、何う云ふやうにして外見を張らうかと云ふやうな事を考へると、夫が爲に心の大部分を費してしまふから人生の馳騁を越るのに非常なる重荷となる、今日此所に集まられた聴衆諸君の中に修養の爲に聖書を讀まうとしてもトンと暇がない、心靜かに祈禱をしようと思

ふても時間がない、集會にでも精々出席致したいと思ふが何うしても缺かさず出席する譯には行かないと云ふ、何故に行かないかと其原因を尋ねて見ると單純生活に満足が出来ない、成るべく多くの金を拵へて夏の暑い日には何所かに別荘でも造つて、其所から通ふやうな生活をしたと夢みて居るからして、段々複雑なる生活に這入るやうになる、いよく複雑になればなるほど金が要る、金を造らうとすれば其方に一生懸命にならねばならぬと云ふところから人格の修養はお不在になつてしまふ、左ればこそキリストが「先づ神の國を求めよ」、「只神の國を求めよ」、飲んだり食ふたりする事はさう心頭を勞するに足らないと云ふは是れ意味の深い教訓である、單純生活さへやつて居れば書物を読む暇は出来る、殊に聖書を読むくらの暇はチャンと出来る、十分や二十分祈禱をする暇は確かに出来る、教會の禮拜や其他の集會に出席するくらの暇は確かに出来る、夫を出来さないと云ふは、我を壓するばかりの重荷を擔いで居るからである、御婦人方にしても同じ事である、夏の日には大抵浴衣掛けて居れば済む、けれども訪問や或は晴の場所に浴衣で行く譯には行かないから、マア其所

は相當の物を一二枚持て居れば、もう夫で衣服の望みはなしと云ふ人であつたならば、實に氣安い事であるが、三越ではどんなものを賣出して居るか、高島屋では何を拵へて賣つて居るだらうかと、そんな事を夢みて、さうして其所を見にでも行つたが最後、ア、彼れが欲しいと思ふ時には金が要る、金が要るとなるともう少し旦那に働いて貰つて、澤山家のために廻して貰はなくちやアならぬと云ふやうな方に氣を取られてしまつて、ア、人格の修養に時がない暇がないと云ふだらうが單純生活に這入らへすれば何ほでも修養をする暇が出来る。

夫から繁る罪を除くと云ふ事がある、オリンピックの競技に出た人或は今日でも徒歩競走でもやらうと云ふ人は、第一に禁じなければならぬものは酒である、飲酒家は到底競走には堪へられない、第二に禁じなければならぬものは煙草である、第三に注意をしなければならぬものは食物、何か私共に罪が密着して居る、酒や煙草や其他の大きな罪が密着して居つたならば到底競走に勝てない、酒を廢し煙草を止め其他の人生の馳場を越るに妨害となるもの、即ち人格の修養に妨害となると云ふものは悉く之

を除き去つたならば實に身が軽くなる、スガくとした心になれる、其輕いスガくとした心を以て人格修養をやつて見られよ、確かに人生の賭場を充分に走る事が出来る、其丈の心得を以て私共がサア賭場の上つたと云ふ時に、前から行つて居るところの父も母も先立ちし我子供等も過ぎにし朋友も世々の聖賢方もナザレのイエスも、一齊に彼の體格、彼の扮装、彼の心懸で賭場を走るならば、確に勝利を得るに違ひはないと思つて見て下さる、其人達は一步も踏み出さない先きに早安心の體である、けれども何うも複雑な生活をやつて贅澤三昧と云ふ重荷を擔ふて、而も酒を飲み煙草を喫ひ其他色々害になるやうな物を身に付て賭場に出て見られよ、到底彼れでは勝てさうにはないと云つて、皆が曇めた顔をして居るに違ひない、此賭場を走る心得は是は何うしても御互ひが先づ我身に應用しなければならぬ、身輕に而も害になる物を悉く除き去つて、健康體を養ふて賭場に臨むが如く、或は我心を害する物即ち人格を損ふやうな物は之を除き去つて人生の賭場に臨む、決勝點……競走をやるには決勝點がある、人格修養の決勝點はキリストである、希伯來書の記事は「イエス即ち信仰の先導となり

て之を成す者を望むべし」と書いて居る、私共が目蒐けて走る決勝點はイエス、キリストのやうになりたいと云ふ事である、斯う云ふ場合にイエス、キリストが在したならば何うな事だであらうか、何う云ふ思ひをなさつたらうか、どんな計畫を立てられたらうかそんな行狀をなさつたらうか、キリストの顔にはどんな光輝があつたらうかと云やうな事を日々夜々に考へて、此決勝點に進入しなければならぬと云ふ事を一心不乱に思ふてさうして其人格の修養をやること云ふのが人生の賭場である、是が基督教である、キリストを除いて基督教はない、キリストの如くになりたいと云ふ此希望を除いては基督教はありやアしない、一にもキリスト二にもキリスト三にもキリスト、悉くキリストと云ふものを目當にして走らなければならぬ、中には補正成を決勝點とする或は菅原道實を決勝點とする、或はソクラテスを決勝點すると云ふ人もあるけれども、さう云ふやうな不完全なる者を目當とするよりも理想の人、空前絶後の大人格であつて而も世の中の辛酸を嘗めて益々光り輝いたところのキリストを目當として走ると云ふのが是れ一番良い人格修養の目當である、本書の記者は非常

に考へた、何を考へたか云ふと人生の劇場は此世界と云ふ大舞台、見物人なる千々萬々の聖人達の中にキリストあり、其キリストの後方には天の神が見て居らつしやると云ふ、此見物人に取圍まれた晴の舞台の、而も人格の修養に志を立て、各自場に登つたもの、日暮れて道遠しと云ふの感に驅られて途中で挫折する者があるかも知れない、所謂落伍する者があるかも知れないと氣遣ふたのである、氣遣ふたと云ふは實に當然である、私共が明治九年七月の三十日に共に人生の劇場を走らうとして場に登つた、言換れば洗禮を受けたところの舊友は四十名あつた、三十四年を経て今尙人生の劇場を此見物人の前に走つて居る者が幾人あるかと尋ね來る時に實に心細い感に打たれる、僅かに其十の一に足りない、二人か三人よりない、情ない事と云はざるを得ない、初めには猛虎の走るが如く走つたところの者が段々落伍してしまひ、私と共に四年間學校の教務で競争をやり、同志社で三年も共に走り、同志社を出た後にも十年十五年走つた後は疲れて落伍してしまふた、其落伍をした原因を尋ねて見ると思ひ半ばに過ぎるものがある、何であるか、妻君が此世の麗き生活と名譽を慕ふので、

明けても暮れても主人に向つて牧師のやうな貧乏な生活をお塵しなさいと云ふので、其事が落伍せしめた大原因である、其人達に聴けば立派な言前を云ふ、相當な理窟を述べるが、天の見物人が見て居らつしやるところに於ては、落伍の原因は連添ふところの者に引落された、足手纏ひになつたと云ふ事に歸するのが多い、夫で希伯來書の記者は倦疲れて心を失ふ事なからん爲に「悪人の如此己れに逆ひしをも忍びたる者を思ふべし」と云ふ理想のキリスト、空前絶後の大人格なるキリストの積極的の方面だけを見ては何うも疲れる、右から左から悪人に責立てられて、前にも後にもキリストを蹴踏さうとして足手纏ひとなつたところのものがあるに拘はらず、キリストは之を切拂ひくして艱難辛苦の中に奮闘を續けて、遂に十字架上に大勝利を得させられた、彼の眞個のキリストを見よと云ふ、苦痛を忍んだキリストを見よと云ふ、後になり前になり實に艱難を一身に擔ふたところのキリストを見よ、此十字架上のキリストゲツセマネの圓のキリスト、枕するところさへお持ちなさらなかつたキリストの御苦難を思ひさへすれば何うして我々が美味い物を食はうの、美しい着物を着ようの、或は贅

澤三昧に日を送らうの云ふやうな考が起るか、決してさう云ふやうな考は起る筈がない、若し起つたならば其考を打拂ひくして、其キリストを思ひつゝ走らなければならぬ、さうさへすれば決して氣を落す事も疲れる事もないと云ふ實に至れり盡せりと云ふべきである、今日より後諸君がどうか希伯來書の十二章を愛讀するところの方になつて頂きたい、人生の馳騁を走ると云ふところから説始めて来て、遂に如何なる艱難に遭ふても如何なる苦痛が來ても、此苦痛や艱難は親が愛する子を鞭撻つやうに、神が我人格を修養させようと思つて鞭撻をなし給ふのだからして、決して無理な事をなさる神と思はずして艱難は我を珠玉にするに云ふ其信仰で走れと云ふの教訓、諸君が病氣に罹る時諸君が失敗に陥る時、諸君が事業に墜落する時、何か人生の馳騁を走つて落伍しよう云ふ場合に、希伯來書の十二章を細いて、大いに勢ひを附けて御奮闘にならん事を切に希望する、斯くの如くして一夜の夢の覺むる時には人生の決勝點、其ナザレのイエス、キリストの如くになつて天父の前に善且忠なる下僕と云ふの御褒賞を頂く身となるであらうと思ふ。

人生の最快事

イエス 睡を受けし後いひけるは事竟ぬ首を俯て靈を付せり (約翰傳第十九章三十節)
われ既に善戦をたゞかひ既に馳るべき途程を盡し既に信仰の道を守れり今より
後義の冠わが爲に備あり主すなはち正き審判をなす者その日に至りて之を我に
に予ふ獨われに予ふるのみならず凡て彼の顯者を慕ふ者にも予ふべし

(提摩太後書第四章八節)

人間の生涯は淺く考へて見れば右にも左にも前にも後にも悲哀と苦惱のみが満ちてあつて、如何にも詰らないものゝやうに思はれるが深く考へて見れば其苦惱と悲哀の多くは人間に快事を見出さしむることゝなる、古人が苦は樂の種と云つたが、私の今日云はんと欲する快事といふのは樂といふのは意味が違ふかと思ふ、併し苦痛と困難は快事を生出すと云ふても宜いではあるまいか、然らば其快事といふのは何か、是は己が心に満足する、自身がア、宜かつたと満足する、此満足は御互ひの生涯に取つて

非常に必要なものである、私は毎日此満足が得たい、毎週土曜日の夕には此満足が得たい、一年度の終りに大満足が欲しい、更に多きを云へば魂の緒の將に消えなむとする臨終の時に一大満足が来る事を望む、併しながら此満足も人格に依つて種々に違ふ、百姓は今頃は米が良く出来たのを見てア、宜かつたと云つて満足をするであらう、即ち實れる垂穂を見てア、今年宜かつたと満足をするであらう、商賈人は誠に景氣が宜い、イヤ今年は大いに儲つたと云つて満足するだらうと思ふ、家倉が出来たと云つて満足する人もあらう、又餘り高尚な考を有たない男は背廣の三揃ひが欲しいと思ふて居つたが、マア辛と月給の内から三圓づゝ、残して七ヶ月掛つて出来た、ア、嬉しい、御婦人では去年までは簞笥の抽斗が二ツ丈満ちて居つたが今年三ツ満ちた、今年土用干には一廉骨が折れた、マア宜かつたと云つて満足する、けれども少し進んだ人間は洋服が出来た、衣服が出来たといふ事では満足が出来ない、家倉が立派に建上つたと云つて別に悪い感じもしないが夫で満足は出来ない、お医者様が何うも此節は寸暇も得られない程に患者が歩つて来る、薬が賣れる、何うも嬉しい事だといつて

満足が出来るか、夫で満足をする人間であれば俗人、苟くも學士博士といふ肩書を持ち、苟くも世の中に出て生れ甲斐ある生涯を送りたいといふ者であれば、そんな眼に見えるものでは満足が出来ない筈である。

然らば何を以て満足するか、學者は汗水を流して夜さなく書さなく骨折つた結果三百頁四百頁の書物を著はして夫が版になつて出て来た時に、イヤ詰ない本が出来た、けれども此著述は確かに我日本人の智識を啓く爲に貢献するところがある、但しは日々に墮落しつゝあるところの青年男女が此本を讀んで、彼方此方から手紙を寄越すのを見ると改まつた者も尠ならずある、マア宜かつたと云つて心の中に快感を覺える、北里博士が破傷風の薬を發明したといふ事を聞くが、若しさうであつたとすれば獨逸留學中から志して居つたが、否獨逸留學中に於ての宿題であつたかも知れない、兎も角も留學中に於ての骨折が空しからずして此實を結んだと思ふ時には非常なる快感、到底俗人輩の知る事の出来ない満足を覺えた事であつたらう、木村駿吉君が無線電信を發明したといふ、其發明が出来たといふ時には、實に立つても坐つても居られな

い程の満足であつたらう、斯くの如き満足斯くの如き快感を買はうとすれば骨折なしには得られない、汗を流すか、涙を流すか、何か一通りならざるところの苦心をしなれば満足が買はれない、提摩太後書の四章の七節八節を読んで見ると、パウロがわれ既に善戦をたゝかひ既に馳るべき途程を盡し既に信仰の道を守つたからして、今は我爲に義の冕が天上に待つて居るといふて大満足を表された事が記してある。

諸君、三十餘にしてキリストの召を受けて、亞拉比亞の野の中に三年引籠つて修養をしたのはパウロである、此春日糖事件で保釋を許されて此世の空気を吸ふ事が出来るやうになつた代議士、否以前の代議士連中の内には僅か二ヶ月かそこらであつたが、監獄の獨房の中に四ツの壁を見るの外何物をも見る事の出来ないといふ、淋しい部屋の中で送つて來た其人達は、獨房の生活堪へられないと思つたであらう、けれども某の如く書物を読む事を無上の快樂として味ふた經驗を有てる者は、此六十日間の獨房の生活は我に取つては我生涯を洗ひ替へるところの基礎となつたと云つて感謝しなればならない、否感謝したであらうと思ふ、パウロは罪を犯して牢屋の中に道入

つたのぢやアない、キリストの御教への蘊奥を極めんが爲亞拉比亞の野の中に引込んで只獨り三歳の間殆んど何人の顔も見えないところで修養を積んだと申すからして、パウロの修養や高い月謝を拂つて居る、骨折なしに出來た修養ぢやアない、苦心なしに出來た修養ぢやアない、夫からいよゝ亞拉比亞の野の中より出て後の生涯は如何であるか、海の難、陸の難、山の難、河の難、道を傳へれば石にて打たれ、棒にて叩かれ、三十九の鞭を幾度もく打たれ、或時には猛獸とも戦はさるゝといふやうな酷い目に遭つた、パウロの書翰をお読みになれば明らかに記してある、尙教會の内の難教會の外の難といふがあつた、教會の外の難といふは到るところ猶太人が迫害をする、教會の内の難といふは、偶々信者を造つて置けば其信者は墮落する、實に酷い事になつてしまふ、教會の内を見ても外を見ても、安き日はないくらゐに三十幾年の間を過した、さて六十餘歳になつてキリストに召さるゝまでの生涯は詰らなかつたが、一度キリストに召されて後は何うであつたかと云へば、夜となく晝となく世の人を救はんが爲に全心全力を盡した、其盡した結果としてパウロの人格が誠に美事に出來上つて

来たのであるからして、もう自分も餘命幾干もない、サア此世を去つた時は何うかと考へ来る時に、天上に於てはキリストが我を待つて居らつしやる、而も義の冕を頭の上に冠せようとして待つて居らつしやると思つた、其思ひは金鶏勳章を貰つたよりも各國の帝王から紀念の徽章を貰つたよりも使徒パウロの心の中には満足であつたらう。

ところがパウロ以上の方があつた、ナザレのイエス其人である、三十の年までは非常な生涯、貴君方はどんな貧乏な家にお生れなされた方でも蒲團の上に寝かされなかつた人は一人もあるまい、生れて直ちに板の上か土間の上に寝かされた人もあるが薄ッペラな蒲團でも蒲團の上に寝かされたであらう、ナザレのイエスは馬小屋の馬槽の中に寝かされた、稍や赤ン坊の眼が開くか開かないに、ヘロデ王が殺さんとするので埃及に連れ行かれ、十二三にならるゝや杖も柱も頼む父のヨセフは亡くなり、大家族を細腕で支へなければならぬ事になつて、雨の降る日も風吹く夜半も枕を安んずるところなくして母や兄弟姉妹の爲にお盡しなされた、三十の年にバプテスマを受け、救世主として名乗り出らるゝや、其忙しさは食事なさるゝ暇がなかつたと書いてあ

る、キリスト御自身の言葉を見ると「空飛ぶ鳥は巢あり地に匍ふ獸類は穴あり然れど人の子は枕するところなし」と仰せられた、私共は柔かな枕を毎晩敷いて寝る、宿屋へ泊つても船の中に寝ても柔かなる枕を敷いて寝る、然るにナザレのイエスは枕するところがないかつたといふ、蓋し孔子が四十五年掛つた事業を否な夫以上の事業を、釋尊が五十年以上掛つた否な夫以上の仕事を、僅か二年足らずの間に遣付けたといふイエスであるから、其多忙さは到底私共の想像の着かない程で居らつしやつたかと思ふ、尙其上に親類はイエスを狂人と思つた、世の人はイエスを山の崖に連れて行つて下に突落して殺さうとする、屐を石を投附ける、何所へ顔をお出しなされても、イエスの顔が現はれるのを待つて皆が待構へて居つて非常なる苦痛を與へるのである、最後にゲツセマネの園にお遣入りになつて、血の溢るゝ程の祈禱をされた、其祈禱が終るや否や擲へられてアンナスの御殿やカヤバの御殿に曳かれ、更にピラトの法廷に曳出され、眼を掩ふては鐵拳を振つてキリストの横髪面を叩く者、荆棘の冕を拵へては其刑がイエスの額に立つやうに上から押へ附くる者がある、人生の苦痛人生の悲惨

極まつた譯である、種々の苦痛を凌ぎ種々の難儀を凌ぎ來つて、掌中に打ち込まれた釘の傷は裂けて、苦痛は刻一刻に増り來り、身體の重量に依りていよいよ苦痛は増すばかり、其時にイエスは事終りぬと一言、事終りぬとお叫びなされたる其一言は是は人生の最大快事である、キリストに取つては最大の満足である。

斯く私が申したならば磔刑に上げられ身體は裂かれて今や息を引取るといふ其場合に何の快感があらうか、何の満足があらうか、實にキリストは倒死をされたのも同じ事だと思召す方があるかも知れないが、夫は俗人の考へ、夫は俗人の心、空前絶後の大人格と仰ぎ奉るナザレのイエスの心は我々俗人の腹で解めるものではない、十八年の沈黙の生涯も三年の苦痛多かりし生涯も何の爲の生涯であつたかと申せば、世の爲人の爲即ち犠牲の生涯として、遂に犠牲になつて死するといふのがイエスの生涯である、今や苦痛の極に達して魂の緒の消えようとする時には事終りぬ、天の使命を全くした、人は三十三で死ぬるも死である、八十五で死ぬるも死である、百二十五で死ぬるも死である、人の生命は長い短いには論がない、佐久間象山は大方五十幾つで死ぬるも死である、

だらうと思ふ、けれども橋本佐内は僅か二十四か五である、吉田松陰は二十九か其邊である、松陰と云ひ左内と云ひまた三十に足りない身を以て此世を去つたので、如何にも惜しい死を遂げたといふのは俗人の考へである、二人は心ゆくばかりの仕事をした、思ひ切つたエライ仕事を決行けた、吉田松陰の死は幕府の生命を確かに縮かめた、長壽をして何にも詮のない事、心ゆくばかりの仕事をして死ぬるといふ、己が心に満足するだけの人格を磨き上げて此世を去るといふのが、是れ人間の最大快事ではあるまいか、十八で死ぬるも構はぬちやアないか、十五で死ぬるも構はぬちやアないか、否夫れ以下で死ぬるも神が御賞識なさるゝやうな人格を造つて死ぬるならば、假令此世に於て仕事が出来ないでも、思ひ入の仕事をやらうといふ考へで準備して居つた人が死ぬるといふのであれば夫れが満足である、人生心ゆくばかりの仕事をする準備又は仕事を決行ける、其仕事に耐るだけの人格を造るといふのが是れ人間の最大快事である、諸君の内には折角志を懐いて朝に夕に書物を読み大いに練り鍛ふて御座るが到頭其志を果さずして空しく此世の露とお消えなさるゝ方がなきにしもあらずと思

ふ、假令此世の露と身體は消えても、其人が高い月謝を拂つて磨いた人格は神の御前に消えざるのみか、其人格の感化は必らず幾多の人々の心の中に残り存るに違ひはないからして、私共は其最期が参つた時に我生れてから死ぬる日までの事を思ふて、ア、我は不束かなから神の命に依つて人格を磨き、我は詰らないながら我に生命を假し給ふたなら、一塵の仕事が出来る丈の準備を此腕に備へたといふ自覺を持ちさへすれば事終れり、無限の満足を以て此世を去る事が出来る、幸ひに五十六七十まで延びる事が出来て、己が植えた木は成木して空の鳥が棲むやうになり、己が人格が神の御前に尠なからざる感化を保つ事が出来るやうになつた事を見て、ア、此生涯は空しくなかつた、思ふほどの事も出来なかつたが、決して空しい生涯ではなかつた、今は神が我を召し給ふが神の聖前に出たならばア、善且忠なる僕父の備へ給ふ喜悅に入れよといふ、御褒美が待つて居ると考へて御覽なされ、今此世を去るといふ其瞬間は顔が輝いて来る、其瞬間は内に喜悅が満ちて跳り立つばかりになつて、身體は疲れて叶はないやうになつても、其心の喜悅は躍々として禁する能はざるものがある、是が

人生の最大快事である、之に反して如何であらう、さて醫者は匙を投げた、親類縁者は枕邊に寄つて泣いて居る、是は人生の出来事己むを得ないと観じて見た時には、我は生れてから今日に至るまでどんな事をしたか、何か神の御前に土産に持つて行けるやうな事があるかと想ひ到つた時に何うであらう、一枚の衣服でも殖やさうと思ふて深更まで仕事をした、背廣の洋服でも買はうと思つて一碗の飯を減じたやうな事があつた、己が名譽の爲には他人を傷つくるやうな事があつた、基督信者の面を冠つて居つたが、人知れず罪を犯し人知れず悪い事をしたやうな事もある、ア、我生涯は破れかぶれの生涯である、更に此世の中に何等の感化をも残す事が出来ず、人と生れて人としての努力も盡さなかつたといふ自覺が迫り來つたならば如何であらう、牧師が枕邊に行つて「さうです、貴方は天國の快樂を待つて居らつしやるか、此世の中に思ひ残す事はありませんか、何か喜悅がありませんか」と尋ねられたならば只顔を背向けて、潜々と泣くより他はないであらう、詰らない生涯を送つて、而も碌々として何の仕事をも爲し得ずして死するは、人生是れより詰らない事はない、若し其悪事をなし

て其悪事が露顯して、世間に顔出しも出来ないやうになつて死ぬるといふ事であつたならば如何であらう、是より人生の不満足人生の不愉快はない、そこで私共はパウロに背りたいと思ふ、七十八十の齡を迎へてイヤ此世を去らなければならぬといふ時に我は既に善戦を戦ひ我は既に馳るべき途程を走つた、我は既に定まれる道を守つた、義の冕が我爲に彼所に待つて居る、諸君左様なら、是から天國に行つて待つて居りますと云つて、元氣よく暇を告げて天上に昇るやうな生涯を得たい、若し不幸にして早く此世を去るといふ諸君があれば、ナザレのイエスの如く此世に於ての努力は是で終り我使命は完うせり、使命を完うせりといふは何か完うすべき心を有つて居つたからして、神は此心を愛でさせ給ふ、是れ此使命を完うしたも同じ事だと思つて下さるご觀じて事終れり、誰が泣いても誰が悲んでも悲み給ふな、我事終れり、我はキリストの前に行くのだ、死ななくちやアならぬ、誰か此所に死なんでも宜い人があるか、老いたるも若きも皆死なくちやアならぬ、其最期の瞬間といふ、最期の瞬間に至つて満足を以て此世を去る事の出来るやうな人間になりたいと思へば、毎日毎日寢床に

這入る前に満足を以て感謝する生涯でなくちやア不可ない、毎週土曜日の終りに感謝をする生涯でなくちやア不可ない、毎年十二月の三十一日の十二時に感謝をする生涯でなくちやア不可ない、今年も詰らない、此瞬間も詰らない、此日も亦遺損ひましたと云つて、さて在様ならいふ時に満足があるか、諸君、賭博打つやうな考はお持なさらぬが宜い、賭博打は今年も遺損つた、來年は千兩は確かに我物と思つて居る、宗教家諸君も賭博を打つやうな考を以て、どんな悪い事をしてもどんな詰らない事をしても、父よアーメンと云ひさへすれば夫で許して下さい、キリストの十字架を信じさへすれば總て許して下さい、本願寺に行くも南無阿彌陀佛と云ひさへすれば即身成佛疑ひなしといふ、ご算盤を弾いて見てもごう考へて見てもそんなものは出て來ない、高い月謝を拂はずしてものになれるであらうか、高い月謝を拂はないものになるごいふ事が若し世の中にあつたれば即身成佛疑ひなし、南無阿彌陀佛で行けるかも知れない、アーメンの一句で行けるかも知れない、けれどもそんな甘い事はあり得べきものでない、皆それ〜に月謝がある、諸君が若し進んで月謝を拂はなければ神が

人生の最快事

諸君から月謝をお取りなさる、諸君が月謝を拂ふといふは時を拵へて聖書を讀む、暑い日でも寒い日でも厭ひなしに神の宮に集つて、共に祈り共に勵む事である、諸君が福音宣傳の爲に骨折ることである、けれども其月謝を拂ふのが厭である、最愛な息子娘でも妻でも、杖柱と頼む良人でも神がお取りなさる、夫を取られた時には吃驚して眼を曇すのであるが、どうか御互ひが高い月謝を徴收されて吃驚しないやうに、又自分が立ちも匍ひも出来ぬやうな病氣に罹つても吃驚しないやうに此方から毎日日謝を拂ふ、一週間は週謝を拂ふ、月の終りには月謝を拂ふ、年の終りには年謝を拂ふ生涯の終りには生涯の謝金を神の前に拂つたといふ事であれば、神はア、善且忠なる下僕よ父の備へ結ぶ喜悅に入れと仰しやるに違ひはない、ドーカさう云ふ生涯を送られんことを希望する次第である。

靈的戰勝の愉快

靈に憑られたる靈れ 天使たち來り奉ふ

(馬太傳第四章十一節)

人生は戦ひに始まつて戦ひに終るべきものであつて我國を見ても外國を見ても、内を見ても外を見ても悉く戦ひの跡ならざるはないのである、今より四日前には陸軍紀念日として盛んなる祝典があつた、是は奉天の戦ひに打勝つた其喜悅を現はすべき祝ひの日であつたらうと思ふ、世界の舞臺に於て盛んに活動をなし、殆んど此人の右に出る者はないと思ふ程に大活動をなしたローズベルトは其職をタフトに譲るや、三週間経つか経たない中に阿弗利加の内地に猛獸狩に出掛けて行くといふ事である、一寸考へて見ると虎や獅子や象や麒麟や、そんな者を銃先で打止めた云つても慘酷なだけである、別に何にか意味がなくなつてはならない、人道的の大統領と云はれたローズベルトが猛獸狩に出掛けて行くといふのは、何か其間に深い意味がなくなつてはならぬ

靈的戰勝の愉快

い、近頃着いた亞米利加の雑誌に依つて見ると、一百年後の歴史家が筆を執つて歴代の大統領の事を評する時に方つては、ワシントン、リンコルン次にロイズベエルトといふ順に書であらう、而してロイズベエルトの執政は人道を以て始まり人道を以て終つたと云ふ事であると、實に世界稀なる頌徳表を奉つたやうな譯である、其ロイズベエルトが私共の眼から見れば慘酷と思はれる獅子打ちに出掛けるのは、惟ふに八年の間ワシントンの白館に於て殆んど枕を高くする時間なき程に大活動を續けたからして、オイスターペーの静かなる別邸にシツとして居れと云つてもシツとして居る事が出来ない、政治的に獅子の如き活動をしたロイズベエルトは、阿弗利加の内地に氣候と戦ひ猛獸と戦ふて、數ヶ月の間其戦ひの生涯を送つて見たいといふは如何にも男らしい事であつて、彼には是丈の活動がなければ到底喜悅がないのである、私共日本人はさういふ事を考へる時には實に慙愧の至りである、此戦ひは大か小か、是はもう御互ひの生涯には附着いたものである、そこで其戦ひといふのが色々あるのである、一は肉の戦ひである、是は多くは此世の中に何うして飯を食はうかといふ戦ひである、區役

所に行つて見ると二百人ばかり腰辨當の小役人が多忙さうに算盤を弾き筆を走らせて居る、熟々其顔を見ると氣の毒の感に堪へないものがある、青白くなつて働いて居る人が少からずある、實に苦戰奮闘をやつて居る、其他銀行會社何れの店へ行つて見ても皆肉の戦ひをして居る、此肉の戦ひも打勝てば愉快だが打敗ければ非常に不愉快である、三日ばかり前に岸和田から歸つて來る途中車の中で六十近い商賣人が居た、其所に南海鐵道の役人が追入つて來て色々話をする、貴方の商賣は如何うも確かな商賣はありますかといふと云つたところが、其商人はイヤ私の商賣は危険な商賣はありません、けれどもエライお儲けなさるぢやアありませんかといふと、儲けるからして其裏には大失敗といふ意味が含んで居ります、私の商賣ほど危険なものはありませんと話をした、ア、是は相場師だなと私は思つたのであるが、兎も角何所へ行つても矢張り肉體の戦ひといふ事は事實である。

次は智恵の戦ひである、學生諸君は此頃其方面だ、水曜日の午後四時から高等工業の學生の爲に聖書の講義をする、學生諸君が此前の水曜日集つた時に、試験がくとい

ふ一言で何も問ふ事はない、學生の試験といふは是は智の戦ひである、私は學生諸君が試験前の奮闘、試験中の奮闘を思ふて實に身が慄然とする、何故かといふと私が奮生時代であつた時に夏休暇に歸らうとしたが、朋友が「オイ宮川、是から寫眞取りに行かうぢやアないか」さうかそれぢア一緒に「行かう」と云つて八人連立つて寫眞屋へ行つて寫した、夫から其寫眞が出来たので、之を見ると宛然幽靈の寫眞である、十七を頭として十五ぐらゐまでの血氣盛んであるべき等の學生が頬の肉は落ち體軀は瘦せて、單衣物を着て居るが、其瘦が外に現はれて居るからである、私が同志社を卒業して故郷に歸つた時、姉共が私の傍に来て色々問ひ掛けるから、之れに應じて答をして居つたが、段々問はれて遂に何も彼も話をした、私等は京都へ行つて勉強するといふのだから、貴方々は愉快なことだらうと思つていらつしやるだらうが、時には風呂錢のない事もあり、蒲團がなくして一枚の蒲團を柏に折つて其中に寝た事もある、夫から先は斯様々な事もあるといふ話をすると、其所に居る姉達が「ホロ／＼と涙を流して、さうまで苦心をして勉強をするといふ事は、自分達は勉強した事がないから

氣が注かなかつた、若し夫程に不自由な事があるならば、何か此方から時には送つたら宜かつたらうにと同情の涙を流して呉れた事を記憶して居る、智的戦争も亦非常なる苦痛を意味する事である。

更にもう一ツ其他に義的戦争といふのがある、是は道義的の戦争である、私は十五の年迄は餘り道義的の戦争といふ事は知らなかつたが、一度學に志してからは今日に至るまで三十有餘年の間、一日とても道義的の戦争のない日はないのである、鳥の啼かん日はあつても、道義的の戦争をしない日は稀である、自分が記憶して居るところに依れば酒を飲んで到底人間になれないといふ考から酒に打勝つて以來、或は情慾に打勝たんが爲、或は名譽の慾に打勝たんが爲、或は其他の罪を排斥せんが爲、實に種々の戦ひを續けて居るやうな事で、今日と雖も尙戦ひは終らないやうな次第である。今一ツ其上に戦ひがある、是が即ち靈的戦争といふのである、心靈の上の戦ひである、車を同じうして来た相場師には靈の戦ひはないのであらうと思ふ、併し偶にはあるかも知れない、多くの學生方には智的戦ひがあつて、靈的戦ひの何者なるかを知ら

ない方もあるだらうと思ふ、又教育家とか何とか云つて口に道徳の事を頻りに唱へて居るが、さてさういふ人に果して靈的の戦ひがあるかと尋ねて見れば、靈的の戦ひの何者たる事を知らない人があるかも知れない、一兩日前に或人と話しをいたして居つたところが、東京で名ある教育家が電車に乗つて紙入を落した、夫から警察の方に拾つて、其紙入が其人の手許に歸つて来た、警察で其紙入を開けて見たところが、其中には詰らない汚ない物が通入つて居つたり思ひも染めないやうな物が通入つて居つたりして、實に開いた口が塞がらなかつたといふ事であるが、是は口に道徳を説くところの名ある教育家であつたといふ事を聞いて、私も口あんぐりしてさうかと思つた切りで、二の句が續けなかつたやうな事である、斯くの如き人々には靈的の戦ひといふやうなものはないであらう、私等には肉の戦ひがある上に智の戦ひがある、智の戦ひがある上に道徳の戦ひがある、道徳の戦ひがある上に更に靈の戦ひまでもして来たのであるからして、一方から云へば實に苦しい事である、苦しい事である、ところが其靈の戦ひといふは何を意味するか、靈の戦争といふは何が目的かと云へば是は疑問である

る、肉の戦ひは事物であつて良い衣食住を得れば夫で宜いのである、智の戦ひは立派に卒業でもして、専門の事に依つて世の中に立つやうになれば夫で宜いのである、道徳の戦ひは人に後ろ指を指されないやうに、多少は人に尊敬される、やうに品性を磨きたつれば夫で宜いのである、左らば靈の戦ひは何が目的であるか、靈の戦ひは眼に見えない世界に頭を突込んで、其眼に見えない世界をも御支配なさるゝところの、神の心に結び付いて、さうして神と我との間には吉野紙ほどの間隔もないやうになつて、神の思ひは即ち我思ひ、神の喜悦は即ち我喜悦、神の悲痛は即ち我悲痛といふところまで行くのであつて神の懷中に遁入つて、神の心を心とするといふのが靈的戦争の大目的である、其目的が達せらるれば食ふ物がなくても着る者がなくても四面楚歌の聲の中に取圍まれても、どんな事に出遭つても、心の中には云ひ知れない喜悦が満ちかちかちとして、是程結構な事はないであらうと思ふ、其靈の戦ひの大目的が見えない世界の奥に潜み給ふところの見えない天の父に結び付くといふやうな高尚なる事であるからして、信者の中にさへも多くは此靈の戦ひの何者たる事を知らずに過す人がないでも

ないと思ふ、戦ひが敗るれば其人は立ちも匍匐も出来ないうやうな事に陥つてしまふ、即ち失敗が齎し來るところの禍が大なるだけ、勝利を得れば其喜悦が夫れだけ大であるといふ事は、是れ私共が想像の着く事であらうと思ふ、何故奉天の戦ひを陸軍記念日として是を後の世までも守らうとするのであるか、日露双方共に百萬と號する兵を滿洲の野に出して、此所を先途と戦つた、我軍不幸にして奉天に敗れんか、露西亞の兵は遂に我日本を滅すやうな大失敗になつたかも知れない、海軍の方では波羅的艦隊を全滅せしめた日を記念するに違ひはない、若し東郷艦隊がロゼエストウエンスキーの艦隊に對島沖で敗られたといふ事であつたならば、今日頃日本は露西亞の屬國となつて居るかも知れないのであつて、其失敗が齎すところの禍が大なるだけ、對島沖の海戦と云ひ奉天の陸戦と云ひ、其戦勝の喜悦は非常である、肉の戦ひは勝てば大きな屋敷となり大きな別荘となる又は酒池肉林の快樂を得るといふやうな事であるが、敗けたといふと裏長屋に住むやうなことになる、他人の借屋に住むくらゐなところであるから、肉の戦ひに敗れたのは夫れ程大なるものぢやアない、其代りに成功したからと云

つて夫程の愉快もないのである、智の戦ひは學生が入學試験に落第をすれば、最早其人の運命は夫れで定まるやうな事になるのである、卒業試験に落第すれば其人は生涯頭が上らないやうな事になるかも知れない、勝利を得たる學生が大に悦ぶのは當然である。

道義的の戦ひとなつて來れば、酒に打勝とうとして打勝てなかつたといふ人は何うなるか、毎日酒を煽つた結果病氣に取付かる、か家を飲潰すかする、情慾に打勝つ事の出来ない結果は何うなるか、汚ない病氣に取付かれて、其禍を子孫に残すといふ事になる、己が名譽心を抑へる事の出来ない結果は何うなるかといふと、大不人望に陥つて、世間に顔出しが出来ないといふやうな事になる、其失敗が齎し來るところの禍が夫れだけ大であるからして、道義的の成功は實に其愉快が夫れだけ大きい譯である、不肖私の如きも十五歳の時は酒と戦ふて打勝つたといふ、其道義的の勝利が如何にも愉快であつた爲に、其次に來たところの情慾の戦ひにも勇ましく戦ふて見たが、遂に打勝つ事が出来たので、更に一層の愉快を覺えたのである、其次から次に起り來ると

この戦ひに負けて居つたならば、諸君の前に顔出しが出来ないのであるからして、其禍や大なり、打勝てば諸君の前に實に非常なる喜びを得ると共に、天の父の前に喜びを得る譯であるからして、いよいよ打勝つ事が愉快になつて来て、道義的の戦ひにも負けし魂を以て之に打勝たうと努むるやうになる。

然らば靈的戦争の失敗とは何であるか、イエス、キリストが「誠に誠に我爾曹に告ぐん人の前にて我を知らずと云ふ者は天の父の前にも我之を知らずと云ふ爾は外の暗黒に出よ其所にて悲しむ切齒する事あるべし」といふ教訓をお残しになつた、一夜の夢の覺むる時にラザロはアブラハムの懷中に抱かれて長への春を迎へて居るのに、彼の金満家は地獄の火の中に投込まれて、咽喉が渴いて堪へられない苦痛の中から、ごうご咽喉を濕す爲に一滴の水を與へ給へといふ果敢ない願望をしなければならぬやうになつたといふ比喩などを讀で見ると、靈的戦争の失敗は限りなき滅亡を意味する、限りなき滅亡といふ所まで深く考へなくても、此世の中に居る間ア、淋しい、煩悶多く、心配に悩まされ、御婦人はヒステリー、男子は神經衰弱、いよいよ死が近

づいて來るといふやうな事になると、實に憂めた顔で見ると見られないやうな憐れなる事になつて行くのは何であるか、靈的戦争の失敗が齎し來るところの禍である、私は信者の死ぬる寢床なれば何時でも附いて居つて見たい、幾人か私の膝を枕にして安らかに此世を去つたのを見たのである、即ち其意味は死人の枕邊に私が座つて其死ぬる有様を見て居つたが、笑を含んで總ての人に挨拶をして死ぬるものもある、又は讚美歌の聲に耳を傾けつゝ、喜びを以て此世を去る人もある、此世の中に於てさへも金錢にて得難い、又權威を以て奪ひ取る事の出来ない喜びがある、さうして此世の後に來るべきものは限り絶えぬ長への春といふのであるから、是程愉快なことはない、ペテロは其喜びは言ひ難しと申して居る、パウロはキリストの愛より我を離らせん者は誰ぞやと凱歌を揚げた時には、實にパウロの愉快は天に達して居つたらうと思ふ、イエス、キリストはゲツセマネの園に於て三度までも此苦き杯を我より離ち給へとお祈りになつて、三度目の祈禱が終るや弟子のところへ行つて、是から寝ねて休め、我を付す者今其所に近づきつゝあると云つて、己を捕へに來る者の足音を聞く時に、平然

として其來るを待つて居らつしやるどころなどは、是れ實に私共の想像の出來ない程に大なる喜悅があつたらうと思ふ、聞くところに依れば過日私の三番の娘と同級生であるウヰルミナ女學校の一人のお嬢さんが病氣に罹つて此世を去つたのである、其病床の話しを聞くに實に泰然たるもので、父母にも醫者にも看護婦にも、もう私の今度の病氣は命取りだ、死ぬる事になつて居る、私の爲には何にも悲しんで下さる必要はない、どうぞお母さんもお父様も醫者も看護婦も皆キリストを信じて、眞個に心靈の命を得て貰はなくちやアならないといふ説教を、十七ぐらゐの少女が其病床の中で試みさうして瀟然笑つて此世を去つたさうである、遂に父母も洗禮を受くる決心をなし、醫者が第一に悔改むる事になつたといふ、是れ靈的戰勝の愉快である、僅か十七か十八の花で云へば舊、其舊が散る譯であるからして、天地も爲に悲しまざるを得ない、況してや其父母たる血を分たる人々に於てをや、けれども少女御自身が死期の至るを知らざる者の如くして安らかに天の父に任せたとはいふは、是れ戰勝の愉快である。どうか私共は靈の戦ひを戦ひたいものである、靈の戦ひとは何である、眼に見えな

い天の父と我とを妨ぐるものがある、是れ情慾の戦ひである、天の父と我との間を距つるものがある、是れ名譽心と野心である、天の父と我との間を距つるところのものを名づけて惡魔といふ、其惡魔を退治して、さうしてモーゼの如く見えざるものを見るが如く信する、キリストの如く我と父とは一なり、パウロの如く我を愛する者の愛より我を離らせる事は出來ない、我を愛める者により是等の事に勝ち得て餘りありといふ生涯に進入つたならば、即ち私共は靈の戦ひに於て大勝利を得たのであるから、安心して笑を含んで行く事が出来るのみならず、一夜の夢の覺むる時にはアブラハムの懐中に進入つて長への喜悅に進入るといふ事になるのである、今日は此所に僅かの麵麩を裂いて之を食ひ、一滴の葡萄酒を口の中に入れて、宛然子供歎し見たやうな事をなして、之を晚餐とか聖餐とか唱へて居るのである、けれども諸君、東郷大將を始めとして海軍の人々が一堂の中に會合して固い麵麩を食つて盃を擧げるのはロゼストウエンスキーの艦隊を滅ばして、日本を泰山の安きに置いたといふ喜悅の印、又一方には大山元帥を始めとして一堂の中に相會合して、麵麩を裂き盃を擧げて、奉天の大

勝利を祝するといふ喜びの如く、此所に麵麩を裂き葡萄汁を飲むのは何であるか、ナザレのイエス、キリストはゲツセマネの園に於て若し天意ならば此死を追れて、世の人を救ひたいといふ思召があつた、けれども死ななければならぬ運命であるからして、悦んで父の聖旨に従ふといふ御決心をなされて、遂に十字架の上に身體を裂かれ血をお流しになつたといふ、即ち我既に世に勝てりといふイエスの靈的戰勝を記念せんが爲に私共は此聖餐を守るのである、此聖餐を守るに方つて、若し夫れ私共の中に昨日今日まで情慾の雲霧があつて父の聖顔を掩ふて、私共をして天日を拜する能はざらしめたけれども、昨夜の間に情慾の雲霧を拂つて、今日は心の中に何一つ掛る雲もなしといふやうに靈の勝利を得てお來てになつた方があるならば、其方は戰勝の愉快を以て盃を擧げる事が出来るのである、此頃までは夫婦仲が悪くて不和になつて居つたが、昨夜の間に池の水が解けて蓮花池の表に打つが如く我家庭は浪靜かになつて、今日は稚兒は朝に鳥を語り妻は夕に花を笑ふやうになつたといふ、其勝利を以て此所に御出席なされた方は、此盃を取り此麵麩を食ふ時に、キリストのゲツセマネの勝利と

共に又は十字架上の勝利と共に、云ひ知れぬ喜びを以て此蓮に與る事が出来るのである、殊に今日多くの兄弟姉妹が肉を離れて靈に進み、信仰に依つて總ての慾情に打勝つて新たなる生涯に這入らうといふ御決心をなされて洗禮を受らるゝ、其洗禮を受けたところの諸君が此盃を取り此麵麩を食する時に、大いなる喜びがあるたらうと思ふ、多年の間浪人者の如くして居らつしやつたお方が、今日驟然として我教會に加はり來つて大阪市民の爲に盡すといふ事だ聖餐をお守りになる時に、其人には夫れだけの喜びがある、けれども若し夫れ初めて昨夜が昨夜まで夫婦喧嘩をやつた、何うも酒を廢めようと思ふたが廢められずして、昨夜も亦朋友に頼められて盃を取つたといふやうな戦ひに敗れた人があるならば、其人は此盃を取る時に是れ喜びの盃であらうか、實に其人に取つては此盃は失敗不愉快の盃である、若しさういふやうなお方があるならば、此盃を手に取る前に主の聖前に悔改めて主よ我罪を免し給へ、此弱き我を免し給へと眞實なる祈禱をして、主の赦しを受けてア、我も今悔改めて善かつた、どうぞ此盃を手に取るに足る者とならせ給へといふ切なる祈禱を以て盃をお取りになつた

ならば、神は其衷情を愛下ノ喜悅をお與へなされるであらう、さうか諸君、此世を終る時には長への春を迎へて、靈的戰勝の愉快を永久に我物とする事の出来るやうにありたいものである。

人生の最高峯

是故に天に在す爾曹の父の完全が如く爾曹も完全すべし(馬太傳第六章四十八節)

我日本の歴史を稽いて見ると、應仁以來元龜天正の頃まで言換れば足利の末方より、織田信長が天下を一統するまでは殆んど無政府同様の情態であつて、諸國に蜂起したる英雄豪傑は其槍先で斬取御免と云ふ意味で、自分の腕一つで其領分を押擴むる事が出来た、亂世に於て斯くあるのは己むを得ない事であつたらう、ところが人間の生涯は如何に秩序ある世の中でも斬取御免の意味が大分含まれて居るやうに考へられる、明治の今日でも矢張り世の中は我が力一ツである、力次第で博士にもなるれば貴族に

もなれる、又一國の首相にもなれる、そこが人間の面白いところである、私は人間の四邊には一方から考へて見ると十重二十重に幕が張つて居るやうな感じがする、其幕を押破るのが人間の勤務のやうに思はれる、又一方から考へれば人間の生涯は山登りのやうな譯である、一步は一步より高く登つて行けば登る程眼界が廣くなり心持が良くなる、遂に山の絶頂に登り着いた時には地上に在れども天津世に在るが如き心持になる、私共が此世の中に生れて出た時は何かなしに白紙のやうなもの、母の乳房を哺へて吸ふ事だけより知らない、希臘の聖人ソクラテスが世の中に生れた時も白紙、哲學者プラトーンが世の中に生れた時も白紙、東洋の大豪傑秦の始皇や豊臣秀吉が生れた時も矢張り白紙である、賤が伏屋に住んで細を煙も立て兼ねるやうな者が生れた時も矢張り白紙、尤も其白紙と云ふ状態先より何か傳はつたところの一種のものは有つて居る、天から授けられた一種の力は備へて居る、夫がまだ發展しないのだから白紙のやうなもの云ふのである、御承知の如く第一に發展するものは想像の力である、茲に幼児が居るとする、其幼兒を取巻て居る一ツの幕を切落したならば、幼兒の想像の力がズー

ツと擴がつて来て、見もの閉ものに就て一大想像を描くのである、大想像が描かれなければ小さな想像を描いて、鼻唄で玩弄物を弄つて楽しんで居る、其次の幕を切落すと今度は理性の世界が擴がつて来る、私は今でも忘れる事が出来ないのは普通學校で地理書を習つた事である、此世界の表に在る山も河も高原も平地もあると有らゆる地形が頭の中に這入つて来て、諸國の狀が我眼に映じ人間の世界が廣くなつて来て面白くて堪られない、更に歴史を讀むと我日本も開けて既に二千五百何年経つて居る、其間には藤原氏倒れて源平氏之に代り北條氏興りて其跡を繼ぎ足利氏の後に徳川氏興りて三百年の平和を保ち終に明治の世の中となる云ふ活劇が演せられ、此間幾多の人物が舞臺に上り來つて、踊りつ跳ねつ騒ぐ其狀が眼の中に這入て来る時に是又面白くて堪られない、歐羅巴の古代の歴史を繰り來る時に方つて希臘の古代史が展開し、或は眼を轉すれば埃及に於ては今より三千年の昔に代議政體が行はれて居つたと云ふ事を教へらるゝ、私が四星霜を過した寄宿舎の部屋は六疊敷に二人、自分の世界は三疊敷に過ぎなかつたが、頭の世界は何うであるかと云ふと三千年五千年の古へにまで飛ん

で行つて、其長い時代に出來湧いた人物の活劇を観覽し評下し非常な興味を感じた事であつた、更に地質學を味はふと、自分が足を以て踏んで歩く此地層が幾萬年前には斯うであつた、幾十萬年前にはあつた云ふ事が手に取る如く明かになつて來る、自分が踏んで居る此土は只一種の土塊と思つたのに、是が厚さが五里もあつて、而も其厚みが出来るには幾十萬年を経て居ると云ふ事を思つていよいよ其中に在る金銀銅鐵其他鑽石類などに就て學ぶところがあつた、是又面白くて堪られない、更に天文學の方に這入つて行つて、今までは天の窓からピカ／＼と光るものがあるとのみ思つて居つたものは悉く太陽であつて、而も其太陽の四邊には幾ツも世界が密着して居る、望遠鏡を以て土星を眺むれば其四邊には八ツ木星の四邊には四ツの月が附いて居るのを見た時に、更に此春現はれた彗星の研究などになつて來ると、もう實に自分の頭に見はれ來るところの世界は千億萬里、到底算へる事の出來ない無邊際の世界であると思つた時にア、何うも驚いた、非常なる廣い世界が其所に擴がつて來る、更に顕微鏡の世界に這入つて見れば一滴の水の中に幾萬の多くの虫が泳いで居る一として彗の種

子ならざるは無つた、尙ほ道義の幕となつて見ると善とは何ぞやと云ふ世界が現はれる、美妙學を播けば美とは何かと云ふ事が現はれて来る、哲學を播けば眞理とは何ぞやと云ふやうな世界が擴がつて来て、多くの人は世界と云へば只此眼に見えるだけの世界と思つて居るが、いよく學び、いよく味ふて來ると千萬の世界が積重なつてあるのである、更に音樂を味ふところの人であつたならば、其音樂の耳が聴くところに於ては私共の耳に聞えない天上の音樂まで聞えること云ふのである、何と形容して宜いか殆んど形容の出来ない程に此世界は廣いと云ふ事を感ずる、更に心靈の世界と云ふ方に心を寄せて見ると、哲學でも道義學でも美妙學でも自分に見えなかつたところのもう一つの大きな世界が其所に現はれて来て、或は宇宙よりも更に大なる神が在すと云ふ事が分つて來る、此宇宙よりも更に大きな神が我お父様であつて我は神の愛子であること云ふやうな事が分る時には、何と云つて宜いか實に形容は出来ないものである、私は此夏一人の牧師が訪ねて見えた時に、貴方は此夏何所にお行でなさるかと聴かれたから、イヤ何所にも行きたくはない、景色を眺めて見ても詰らないし、又海水へ

道入つて見たところが詰らないし左らばと云つて滋寺の公園のパノラマを見ても面白くなし、何所にも行きはしませんと申した、ところが其牧師が如何にも眼に見える世界は詰らない、眞個に詰るところは人間の心靈でせうと申された、眞個に詰るところは人間の心靈でせうと云ふ其一言は私も同感、別荘を造つて見た處が何の詰るところがあらう、大隈伯のやうな邸宅を拵へて見たところが淺慕なもので詰らない、此世界に於て眞個に味ひ極まりなしと云ふものを見たいと思へば人間の心靈の世界に來なければならぬ、人間の心靈の息の掛つたところでないこと面白味はない、音樂を申してもベートーウエンやワグネルなどの大きな心靈が其所に加はつて作つたところの作曲でなければ、眞個に人間が全心全力を込めて味ふ程のものはない、彫刻や繪畫の如きものでもミカエルアングロやラファエルやレンブラントやバンドイクやハントの如き畫工が畢生の力を盡して其心の中に在るものを描き出した其所に私共が是はとばかり驚かなければならぬやうな妙なる味ひがある、手近いところで申せば今晚のやうな時に時事新報の主催に掛る笑面の觀月會に行つて見たところが、ウツ／＼と譯も分らぬ

人間が虫が動くやうな工合に谷川の邊りに沿ふて歩く、其所に燈々たる明月が素知らぬ顔をして照輝いて居る、何所に不思議があるか、左らばと云つて海邊に出て月が海上に映るのを見ても、別に是と云ふやうな趣きがないかも知れない、けれども一度聖書を細いて之を讀む時に、或は古今の名家が著したところの書物を細いて之を讀む時には、實に無盡藏とも云ふべき智識の寶や道義の寶や心靈の寶が其所に含まれてあるからして、夫を人間が味はなければ眞個な満足は出來ない、測るべからざるキリストを友とすと使徒パウロが云はれたのは夫であらうかと思ふ。

世界は斬取御免、此世界は此方の力次第で大きな世界ともなれば又高い世界ともなる、力がなければ此世界は實に小さな詰らない世界となつてしまふ、同じ人間が日英博覽會に出掛けて行くにしても、一人は其博覽會を見るばかりではない、英國の人情風俗に接するばかりではない、更に英國の粹の粹と云はるゝ大人物の嚮導に接して、さうして其人の頭の中には測るべからざる程のお土産を持つて歸つて來る、又今一人は圓丁として行つたところの者で庭を造つて二千三千の金を貯へて歸つて來るが、其

人の頭の中には金の外に何もない元の木阿彌であつてロンドンブリンヂと云ふところは田舎のお祭りのやうに仰山人が通つて居りましたと云ふ事と、倫敦の街は大坂とならば大分立派でありますと云ふ事の何にも得て歸つて來ない、同じ倫敦を見ながら一人は何にも持つて來ぬのに、他の一人は非常なるものを持つて歸ると云ふ事を考へて見ると、矢張り何所までも此世界は斬取御免の世界である事を自覺せざるを得ない、サア斯うなつて來ると己れを磨くより他に仕様がな、我心靈を高くなし我心靈を奥床しくなし、我心靈を美しくなすより他に途はない、諸君が約翰第一書を開いて其四章を氣を注げてお讀みになると「愛なき者は神を識す神は即ち愛なれば也」と書いてある、何を意味するのであるか、愛のない者は神は分らない、何となれば神は愛だからと云ふ、私は此一言を讀んで今更の如く幼い時に父母を失ひ、他人の間に成長して此世の中は冷酷なりと思つて居るところの者に満腔の愛情を注いでも其愛が分らない事を思はざるを得ない、けれども其人が父となり母となつて、幼兒を膝の上に懷き抱へするやうになつた時に、此方が満腔の愛情でなくても其半分の愛情を注いでも、

其人の心には此方の愛が犇々と應へて眞に愛に溶かされる思ひをする。云ふのは是何であるかと云へば、此方に愛が出来たからして他人の愛が分る、曾て他人に進物を與へた事のない人は、他人から贈物を貰つた時に其有難味は分らない、現に孤兒院に育つたところの人間に色々な物を與へると當然の事と思つて貰ふから、眞に有難いと云ふの感激は起らない、残念な事である、何故起らないかと尋ねて見れば、貰ふだけで曾て他人に與へた事がない、何か他人に與へようと思つれば之を持つて行けば悦ぶであらうか何にすれば先方の用を辨するであらうか、彼れにしようか此れにしようかと七日も考へた後に物を買つて持つて行く、さう云ふやうに心を盡して他人に物を與へた経験があれば、他人が物を持つて来て與た時にあゝ是は僅かな物であるが、此物を眺へて持つて來らるゝまでには幾度も相談をし幾度も考へ、幾度も店を覗いて遂に買ふに至つたのであらうと思へば如何にも有難く心に感ずる、天の父の愛も亦同じ、靈の世界に這入ると云ふは即ち天の父の愛を知ることである、天の父の愛を味ふことである、ところが此方は曾て他人を愛した事がない、己れを棄て、他人の爲に盡した事がない、頭の先から足の先まで悉く己れであるが、其己れを微塵も棄てた事のないと云ふ人間であつたならば、獨子のイエスを賜はる程の天の父の愛も其人には感せられぬ、己れを棄て、人を愛して初めて天の父の御慈愛が泌々と我心に分る譯である、是は只一ツの例である、心靈の實驗のない者は何うしても靈の世界の話は分らない、情感の清められた事のない人間は美しい情の話は其人には分らない。

して見ると此人間の生涯は何所までも山登りをしなくては不可い、何所までも切開いて行かなければならぬ生涯である、五足登るよりも十足登つた方が高くなる、眼界が廣くなつて來る、十足登るよりも百足登つた方が眼界が廣くなり高くなる、百足登つたよりも千足登つたらは更に高く更に廣くなつて來ると云ふのが是れ山登りの實驗である、私共は人生の山を登るに、初めは想像の世界が廣くなつて來る、先づ一ツだけ登つた、夫から智識の世界が廣くなつて來ると、其智識の世界だけでも十段も二十段もあるから段々と踏登る、夫から情の世界に這入り美しい情を味ふて行く。夫丈踏登る、更に靈の世界に這入つて天の神様と相交はる事が出来るやうになつて來たら夫丈

清く高くなる。

諸君、試に思へ、御互ひ人間の生涯に取つて人生の最高峯と云ふのは何かと云へば、是は理想の境に遣入ることである、夫は何う云ふ意味であるかとお尋ねになるならば、先日中より度々繰返した如く人間の中には理想が植付けてあつて、二ツの理想が更により良き一ツの理想を生む、もう此所迄達したからして是以上はなからうと思ひの外、其所まで達するともう一ツ高い理想を生んで来る、もう是ならばと思つて其所へ達すると更に高い理想を生むのである、奥野昌綱氏の歌に「富士の根の上はあらしと登り来て仰げばいと高き大空」と云ふのがある、富士に登る時にあゝもう一合来たもう二合来たもう六合目邊に来ると木立がなくなつて眼界がズーツと廣くなる、夫から七合八合九合と登つて遂に絶頂に達したならば、もう此上はないと思つて上を仰ぐと仰げばいと高き大空、キリスト、イエスが私共にお示しなされたる理想は「天の父の完全さが如く爾曹も完全くすべし」と云ふ事である、是則ち仰げばいと高き大空である、此理想の境に人間が踏込んで来るならば是以上の良いものはないのであ

る、ところが多くの人はナニニ基督信者と云ふ者は理想ばかりが高くて、其實際を尋ねて見ると實に詰らないものだと云ふ、我々基督信者は世の中の人と云ふものは理想もなければ實際もないからして、更に詰らないぢやアないかと辯駁しなければならぬやうな譯で、是は人間已むを得ない、理想が高いから實際は理想に追着かないけれども、其理想が高ければ、高いほど其高い理想が我を高める、理想が清ければ清いほど我を清める、理想が立派であれば立派であるほど我を立派にしなすが一ツ茲に油断のなるぬ事がある、曩に司會者に朗讀を願つた哥林多後書第十二章の使徒パウロの靈の實驗を讀んで見ると「我一人の人を知れり、彼れ携へられて第三の天に至……人の云ふべからざる言を聞き」とある、自分が斯ふ云ふ實驗をしたと云つて話をすれば餘りに高慢に聞えるから、某と云ふ人があつて斯う云ふ實驗をやつたが、其人は第三の天に登つた、神のお傍へ行つて人間の聞くべからざる聲を聞いたと云ふ理想の極、即ち人間の達し得べきいと高き山の絶頂にまで登つた、其最も高い峯に登つたところのパウロが二三行先を讀んで見ると「父よ此刺を我より除き給へ」と三度祈つたが、神は

「我恩寵爾に足れり」と云つて其刺を除いて下さらぬ、何となれば「わが能は弱に於て全うせらるゝなり」と書いてある、何を教へたものであるか、清められたるパウロはパウロの中に二ツの心がある、清められたる心は第三の天に登つた、其清められたる心と相列んで居るところの一ツは眼爛れであつたか或はマラリヤに罹つて身體が弱かつたか、兎も角パウロは肉體の上に非常なる困難を感じたから、神よ此困難を取除き給へと一生懸命に祈つたと云ふ、理想の高い山に登つたところのパウロであるからそんな事は無頓着で宜かりさうなもの、一方は人間の登り得べきいと高き山の峯に登つて居る、一方は人間を謙遜ならしむる谷の底に落ちて居る事を示したものである、ペテロは何うであるか、馬太傳十六章を開いて見ると、イエス、キリストがカイザリヤ、ピリビの方に弟子方を連れておいでなされた時に世の人は我事を何と云ふかとお尋ねになつた時に、イヤエリヤと申して居ります、古への預言者と申して居りますと答へた汝は何う思ふかとお尋ねになると、ペテロは非常なるインスピレーション……天來の感興に驅られて「主よ爾は活神の子なり」と云つた時に、イエスは「血肉

汝に示せるに非ず天の父がお示しになつた」我は教會をペテロ即ち磐の上に建つべしとお賞めになつた時に實にペテロは高い山の絶頂に登つた、三四行先を讀んで見ると、其高き山の絶頂に登つたペテロはキリストが之に向つてサタンよ我後方に退けとお叱りなさらねばならぬやうな事を仕出來して居る、ペテロやパウロが山登りに於て一方は絶頂に遠くかと思ふと、他方に於てはまだ平地に足が附いて居る、ナザレのイエス、キリストは何うであるか、馬太傳十七章を開いて見ると、三人の弟子を連れて九千尺のヘルモン山の絶頂にお登りになつた時に其御顔は雪の如く輝き、其衣は布晒の晒した布よりも白く輝いて居つた、キリストは「是れ我心に叶ふ愛子なり」と云ふ天の聲をお聴きなされた、キリストの生涯に於ての最高峯である、其キリストが數日の後にゲツゼマネの園に於て「父よ聖意に叶はば此盃を我より放ち給へ」とお祈りなされたのは何を意味するか、靈の世界に於ては達し得べき極點に迄達して御顔に光輝を生じたほどのイエスが、死なぬいで済むものならば死なぬいでさうか此場合を過ごさせ給へと云ふお祈勝は是イエスの弱點、清められたるイエスの心は天に登つて居る

が、イエスの人なる心は死なないで済むならばと云ふ思ひであつた、して見ると御互
 ひ人間が祈禱會に来てさうして或は感謝をなし或は祈禱をなす時に、段々心霊が向
 上して眞の理想に達し、聖者になつたかと思ふやうになつて、今晚こそは斯う云ふ正
 しい身になつた、罪も汚れも取除かれてしまつた、ア、清まつたと思つて教會を出て
 家へ歸るや否や、或は怒つたり或は憤つたり或は遺損つたりすると云ふのは是何を
 意味するか、是人生實に己むを得ない、若し人間に此遺損ひがなかつたならば、天狗
 になるかも知れない、理想の上には是以上ないと云ふところまで進める人間が、又
 しても遺損ひましたと神の前に數多度罪の白狀をしなければならぬと云ふの
 は、是實に私共の修養上に於て大いに味ふべき事ではあるまいかと思ふ。

バンヤンが説教をやつてさうして講壇を降つて來た時に、信者の一人が先生今日の
 説教は實に大説教でありましたと云つたら、彼は其人の顔をシロリと見て、貴方が云
 ふて呉れる前に悪魔がチャンと私にさう申しましたと云つて眞赤な顔をしたと云ふ、
 其點である、何所迄も理想を磨かなかちやアならぬ、理想は天の父の完全が如く完全

すべしと云ふ所ではなくてはならない、其所まで眼が注がなくても我は紳士である、我
 は淑女である、我は神の子であると云ふ所に置かねばならぬ、萬物の長でなくちや
 アならぬ、キリストの如き人にならなければならぬと云ふ理想を、明けても暮れても
 我が眼の前に輝かして行かなければならぬ、左らば理想通りに行くかと云ふと又して
 も罪を犯すと云ふ事があるから、さう云ふやうな時には主よ我を免し給へ、主よ我を
 助け給へと云つて主の御力を仰ぎつゝ、修養を續ける、斯くの如くして失敗をしたペテ
 ロも使徒行傳を讀んで見ると高い大きな人物になつて居る、パウロの如きも琢きに磨
 き養ひに養ふた結果は、キリスト以來の第一人と云はれるほどの立派な人間になつて
 居る、若しペテロが理想を持たず若しパウロが理想を磨かなかつたらば、何うしても
 其所には行かれない。

どうか私共は失敗があらうが罪汚れに陥る事があらうが、さう云ふ場合に接した時
 には我を助け給へと祈りつゝ、何所までも高い理想を踏登つて行く事が大切であ
 る、人間の生涯は修養一ツ、人間の生涯は進歩一ツ人間の生涯は熱心一ツ、彼所まで

行かうと思ひさへすれば行ける、けれどもさう云ふ高い志を持たず高い理想を持たないところの人間は生涯碌々として眞個に詰らない人間として朽果つる譯であるから、さうか今日は諸君と共に人生の最高峯、理想の山に登ると云ふところを以て深く神を思ひ、キリストを想ふて見たいと云ふのが私の願望である。

人格の餘光

光に命じて暗より照し出めたる神我儕をしてイエスキリストの面にある神の榮光を知の光を顯さしめん爲に我儕の心を照し給へり (哥林多後書第四章)

既に新聞で御承知であらうと思ふが、十一月の四日に京都同志社の創立者として、新島襄先生と同功一體の人と云はる、デビス先生が亞米利加のオベリンで死去されたのである、又本月の二日に日本聖公會の創立者として一部の人々よりは聖人とまで思はれた監督ウヰリアムスが其郷里に於て死去されたのである、デビス先生は我日本に

殆んど四十年の間犠牲の生涯を送つた方である、私は此人は十九世紀式の聖者と云つて宜からうと思ふ、一個の軍人であつて、尤も是は軍人になる志の方ではなかつたのである、亞米利加の南北の戦争の時に大學の學生であつたが一身を投じて兵卒となられて段々戦功を立て、遂に四年の戦争が終つた時分には陸軍大佐の位置を占めて居られたのである、いよく戦争が終つて平和の生涯に道入られた時には直ちに神學校に飛込んで神學を修め、専ら教會に従事して居られた、アメリカンボールドが我日本に傳道を開始するに方つて、又奮つて傳道界に飛込んで非常なる盡力をされたのである、先生の殘したものは京都の同志社と、今一つは今日我日本の傳道界に活躍して居る約百名の牧師傳道師である、實に先生の人格は此世に光を放つたのみならず、天下後世に至るまで我日本の最初の宗教界に於ける聖者の一人として輝くであらう、監督ウヰリアムス氏は私はよく知らない、此人は十七八世紀式の聖者であつて、生涯獨身で艱難苦行を悦び努むると云ふ質の方であつたやうに聞いて居る、此監督の遺物としては監督の俸給を殆んど殘らず積立て、京都及び東京に會堂を築かれたのであ

る、餘りに人格が清高にして、所謂水至つて清ければ魚棲ますの類で、聖公會の人々に監督ウヰリアムス氏を學んで聖者の生活をなす者が見當らない。夏の日に舞子垂水の邊に遊ばれた方々は、夕陽の海面や天空に映る景色の到底舌や筆を以て描き出す事の出来ない麗はしさを感じて居らるゝであらうと思ふ、私は三年ばかり垂水に避暑をしたので夕方になれば西の空を眺めて夕陽の餘光を賞した事がある。

斯くの如く餘光を示すと云ふのは、是は太陽の光其者が偉いからであると言はざるを得ない、去りながら阿弗利加の砂原を照すのも、垂水や舞子の海面を照すのも同じ太陽であるが、其太陽の光線に接觸する其土地の模様で、黄昏時の空をして得も云はれない景色を寫し出さしむるものである、そこで餘光と云ふのは是は何も御互ひが研究する必要はない、又如何にすれば餘光を止むる事が出来ようかなと云ふやうな事は私共が考ふべき範圍ではあるまい、大いに研究すべき問題は如何にすればキリストの御命令に従つて世の光となり得るか云ふ事である、世の光となりさへすれば餘光が現はれる事は當然である、光と云ふは何う云ふやうにして來るべきものかを考へて

見られよ、先づ世界の成立から一ツ考へれば、無氣體の世界は是は譬へて云へば暗黒の世界である、富士の山に登つて六合目邊から上は見渡す限り焼砂で生物と云ふものは石に蒸す昔くらゐなものである、其邊を飛ぶ蠅くらゐなものである、彼の黒い焼砂の山を見ると大暗黒である、何等の光ある事なし、丁度此世界が無氣體であつた時は實は暗黒で何等の光もなかつた其所に草木が生じて來て少しばかり明るくなつて來たのである、次に昆蟲や飛ぶ虫が出來て又少し光を加へたのである、下等動物が生じて遺憾なく本能性を現はした時に更に光が加はつたのである、最後に人間の世の中となつて智慧が發達し智識が進む事になつて、其所に何とも云へない一種の光が加はつた、更に道義の力が生じて善のなすべきを知つては之をなさねばならず、惡の憎むべきを知つては之を避けねばならず、理想を越えては走らなければならず、いよいよ道義が我儕銘々の心の中に現はれ來つた時には更に一段の光を増したのである、遂に過日もお話申した如く智情意の下に意識がある、意識の下に潜在意識がある、潜在意識のアーツ奥深いところに行けば靈知と云ふものがあつて、其靈知や宇宙の大靈即ち神の

光に照されつゝあるを云ふ事になつて、太陽が東天に現はれていよく熾灼たる光を放つが如く、始めて人生は靈の光に照らされて、此所に光となつた譯である、私は約翰傳及び約翰書を編いて、其記者がキリストの御教訓に依つて光と云ふ事を如何にも巧妙に説いたのを見て今更の如く驚いたのである、約翰傳第一章の四節を見ると「之に生あり生は人の光なり」と書いてある、之れと云ふは道である、神と偕にありし道に生が出來た、即ちキリストイエスが人格を以て現はれたことである、其キリストの人格と云ふは智慧あり道義あり靈智ありで、此三ツを以て成つたところの人格であつたらうと思ふ、其人格が人の光であり生であつたと云ふ、夫から一章の九節に「夫すべての人を照す眞の光は世に來れり」眞個に人間を照す光は世に來た、眞の光が世に來たと云ふ、八章の十二節に「我は世の光なり我に従ふ者は暗中を行す生の光を得なり」と示してある、我はと云ふはキリストである、キリストは世の光なり、キリストに従ふ者は暗中を歩かない生の光即ち人格の光を有つと云ふ、同九章の五節に「われ世に在時は世の光なり」同十二章の四十六節に「我は光にして世に臨れり凡

て我を信する者をして暗に居ざらしめん爲なり」とある、諸君、是はヨハネ一人の私見ではない、馬太傳の五章の十四節に「爾曹は世の光なり」と云ふキリストの語が書してある、又十六節には「人々の前に爾曹の光を輝かせ然れば人々爾曹の善き行狀を見て天に在す爾曹の父を榮むべし」と示してある、光を輝せと云つても有たぬ光を何うして輝す事が出来るか、光を有つて居りさへすれば輝さうとしなくても光は自らにして輝くものである、此會堂が暗黒である時に此所へ道入つて燐寸を一本擦つて見られよ、燐寸一本の光ではあるが熾灼として光輝を放つ、光は隠さうとしても隠す事は出来ない、問題は光を有つて居るか有つて居ないかと云ふ事である、約翰傳の記者はキリストを稱して光と云つた、私共は其光に照さるゝところの者である、ところが約翰傳第一書には斯う書いてある、一章の五節に「神は光なり」同七節に「若し神の光に在が如く光の中を行かばイエス、キリストと同心たり」と書いてある、約翰傳の記者はキリストを光と云ひ、約翰書の記者は神は光なりと云つた、同じ事である、神の光がキリストに依つて現はれた、其キリストの光が私共人間に現はれて來なければ

ばならぬ、パウロは哥林多後書の四章の六節に「光に命じて暗より照出しめたる神と稱して居る、光に命じて眞暗黒から照出しめたる神だから、其神は約翰書の記者がいふ如く光なる神でなくてはならない、次に我儕をしてイエス、キリストの面にある神の榮光と斯う云つた、是は約翰傳記者の云つた如くキリストは世の光である、キリストの御顔は雪の如く光り輝いて居つたとか、馬太傳の記者が十七章の始めに云つて居る言葉は神の光がキリストの人格の中に籠つて夫がキリストの御顔に輝いたと云ふ譯である、キリストの御顔に在る神の榮光を知るの光を現はさしめん爲に今度は我儕の心を照し給へりと云ふ事となる、神の光がキリストに輝き、キリストの光が我心に輝き、遂に我心が光となつて世を照す譯である。

そこで私は又考へた、如何にも光と云ふは結構である、然らばこの光は何を意味するか、此光と云ふは第一は智慧である、人間の智慧を光と云ふ、容易い例を以てお話しするならば斯う云ふ事を能く云ふではないか、誰某は實に美人だ、殆んど世に稀なる美人だ、けれども彼の人の顔には輝きがないと云ふ、何を意味するか、人形見た

やうに美しい女だが只美しいだけで顔に輝きがない、誰某は左程の美人ではない、淺黒い、顔の輪廓も完全ではない、けれども彼女の顔を御覽なさい、一種の麗しい光があるではないか、一種の輝きがあるではないかと、其光は是餘光である、顔に餘光が現はれて居る、其餘光は何所から來たか、智慧の輝きは豈夫女のみならんや、男子も同じ事である、智慧のある人と、智慧のない人とを比べて見ると、其顔に智慧の輝きがあるかないかの差異である、其點が人間の面白ところである、是は只智慧を云ふのであるがマア一ツ夫以上のものがある、今度のは矢張り智慧は智慧だが道義の智慧である、エホバを畏るゝは智慧の本なりと云ふ智慧である、善悪を知るばかりではない、其人の心の中に理想が輝いて居る、其人の心の中に道徳上の趣味が充ち溢れて居る、其人に行つて物の判断を求むると快刀を揮ふて亂麻を斷つが如く、善は善悪は悪と明瞭に示す事の出来るものである、大學の語を以て云ふならば明德が其人の胸の中に輝いて居る、さう云ふ人に接觸すると目眩いばかりに此方を射るものがある、ア、實に徳の輝きと云ふは如何にも偉いものである、是は智慧の光に比べて見たらば一層

赫灼なる光と言はざるを得ない。

ところがマア一ツ夫以上がある、靈知と云ふ、此靈知となつて來ると宇宙間の道理が能く分る、パウロは神の靈をも辨へ知る事が出來ると高調して居る、何うも面白い戸外に出で、太陽を見てもその實相は分らない、赫々たる光が差して來るから眼が眩んで分らない、使徒パウロやヨハネの如きは靈知の人であつたと思ふ、アシ、のフランドンシスもクレルオーのベルナルドも矢張り同種の人であつたらうかと思ふ、靈知の人となりさへすれば、もう神と我とが殆んど自他の差別がないやうになるであらう、左ればこそナザレのイエスは我と父とは一なりと言はれた、キリストも光、神も光、同じ靈の光となられた、即ち神の心はキリストの心、キリストの心は神の心と合一の妙境に到達された、十九世紀に於て殆んど靈知の境に達したと云ふべき人は、ポストシの聖三一教會の牧師にして後マサツセツチュー州の監督となられたフリツプスブルツクスであつたと思ふ、ブルツクスの醫咳に接した人々は師の中にデビニチーを認めたと云ふて居る、さうしてブルツクスの裏に在す神は其顔に一種得も云はれない光輝

きを放たしめ給ふた、斯う考へて來ると實に人間は尊いものである、此所まで人間が向上發達する事が出來るとすれば如何にも人間は尊いものと言はざるを得ない、左ればキリストが「爾曹は世の光なり」と仰せられたのは是は實に人間の眞相を示したものである、人間本來の面目は光として世に輝かなければならぬと云ふ事である、大なる光か小なる光か、五百燭光であるか六燭光であるか八燭光であるか、鬼に角五百燭光でも六燭光でも八燭光でも光は光に違ひはない、御互ひに六燭光か八燭光か十燭光かマア小さな光であらうか、夫にしても御互ひの四邊には御互ひの光を期待して居る者がある、家庭の中に一人信者が出來ると其所に小さな光が現はれる、夫で今まで悪い事をして居つた詰らない家庭も、其光に照されて堪へなくなつて來て良くなるものである、もう自分は死なうかと思ふ時に上よりの光に照されると死ななくても宜いと云ふ事になる、なか／＼死なれない、いよ／＼一ツ磨いて光となつて、我四邊の人々を照さなければならぬと云ふ勇氣が生じて來るから、磨いて／＼止まない事になる、光は決して陰氣なものではない、死にたいと思ふのは暗黒世界である、暗黒世界

だから陰鬱で死にたくなる、神の光に照さるれば陽氣になる、陽氣だから喜悅と平安に満たされて来るのである、神の光に照さるゝと心全體が朗になつて来る、何等の秘密も何等の陰蔽をする事もなく腹が朗になつて来る、さう云ふやうな光が我中に道入つて来れば悪い事などはしようと思つてもされない、本心に責めらるゝやうな事は出来なくなつてしまふ、靈知と云ふ光が我衷に道入つて来れば道徳の實行は自らにして出来る、靈知の光があれば智慧と云ふものも自らにして進んで来るものである、夫は妙なるものである、ムーデーと云ふ人は大學教育を受けた事もない中學に道入つた事もない、パンヤンも同じ事であつた ジョンパンヤンはいとも賤しき職業に従事して居つた人である、ムーデーは靴屋の賣子であつた、ムーデーと云ひパンヤンと云ひ智慧の光や道義の光は受けなかつたが、神の召を蒙つて直ちに靈の光に照され靈知の人となつたので、彼等の心の中に明徳の光を生じて来た、明徳の光を生じて来たので其常識が発達して来て、眞に智慧と云ふところの者となつたのである、パンヤンが牢の中で天路歷程を畫かうと思つて筆を執つた時分にはまた文章も書けなければ

碌に聖書も讀めなかつたが、終に十二年の星霜を経て天路歷程を完成した、此書は文章と云ひ言葉遣ひと云ひ、何から何まで聖書に亞ぐところの大著述であつた、文學上から云つても聖書に亞ぐところの大傑作であつた、一番偉いものを得ると其次のものは皆興へられる。

今日此所に集らるゝ諸君の中大學教育を受けた者が幾人あるか、高等教育を受けた者が幾人あるか、中學の教育を受けた人でもさう澤山あるまい、けれども諸君屬むべし、實に愉快な事ではないか、聖書を讀んで膝を曲げて神に祈禱をなし、遂に祈禱の結果靈知の人となりさへしたならば、道徳や智慧の力と云ふものは其所に増加はつて、いよゝゝ曉の明星の如く輝く事が出来る、さう云ふ輝ける人格になりさへしたならば、御互ひに此世に於て後光の差す人間になるから、此世を去る時にはデピス先生の曰はれた如く「我生涯が即ち我使命」であり我餘光である、先生の生涯は此世に於て輝いて居つた、私共は其光に照されたのである、先生去つて後も新島襄先生と共に我日本を照す明星である、折角此世に生れて来たからには大小の差別はあるにしても、

どうか御互ひは世を照す光となりたい、榮えに榮え彌増さりて遂にキリストの形が映るまで私共の心靈を向上發展させなければ止まないと云ふ事になりたい。

神子としての我

それは天の使者の中なる誰に替て如此いへる乎なんぢは我子なりわれ今日なんぢを生りて又われ彼の爲に父ならん彼は我ために子と作べしと

(希伯來書第一章五節)

凡そ神の靈に導く者は是すなほ神の子なり、爾曹が受し靈は奴たる者の如く復び價を償く靈に非ずア、父さよぶ子たる者の靈なり、聖靈みづから我價の靈と稱に我價が神の子たるを証す

(羅馬書第八章十四—十六節)

此頃朝鮮では誰某が侯爵になり誰某が伯爵になり又誰某は子爵男爵になつたとか云ふ事で、なつた者は得々として天に登つたやうな心持をなし、成損つた者は地獄にでも落されたやうに非常なる失望をいたして居ると云ふ事であるが人間が肩書を好むこ

とは獨り朝鮮に限つた事でもないやうである、亞米利加の如きは所謂平民國で、誰も彼も皆同等であると云ふ事を共和政治の本義として居るに拘はらず十數年來頻りと突飛な婦人達が貴族と婚姻する事を好む風が流行つて、獨逸だの英吉利だの、甚だしきに至つては伊太利の貴族でも構はない、侯爵夫人とか子爵夫人とか云ふ肩書が得たい爲に貧乏貴族と婚禮をするに云ふ、男子の方にはさう云ふ弊は少ないが、夫でも矢張り何かの肩書は大いに悦ぶと云ふ事になつて居る、私共日本人も同じ弊に陥つて、何だか博士とか學士とか云ふやうなものを睨んで、夫を目的に勉強する人も尠なからずある、又は若し成れるものならば男爵にでもなりたいと云ふやうな希望を懷いて居る役人も尠なからぬやうに思はれる、けれども能く考へて見ると人間は人間から貰ふ肩書よりも、夫に百層倍も千層倍も優るところの肩書を貰つて居るやうである、人間と云ふ事で充分ではあるまいか、此人間と云ふ言葉は希臘語ではアンスロポスと云ふさうである、其意味は上を仰ぐ即ち上を仰いで立つの意である、鳥も獸類も皆下を見て立つやうに出來て居る、獨り人間のみ上なる天を仰いで立つといふ、人間の姿勢が天を

仰いで立つやうに出来て居るばかりではない、其人間に與へられたる理性と情感は非常なるものであるが、理性も情感も與ふる事の出来ない更に大なるものを望んで立つと云ふのが人間の本領である、支那の言葉に人と云は康熙字典を引いて見ると天地の性最も貴きものなりとしてある、天地の性最も貴きものが人なりと云ふ、天地宇宙の間に最も勝れたる性格を有するものが人間と云ふ意味である、矢張り支那でも人間以上のものはないと考へたものである、随つて人間は萬の物の長と云ふ句も出て來た譯である。

私は今日人間が貰ひ得べき肩書の中では紳士と云ふ肩書が貰へるならば一番宜いものだと思つて居る、御婦人であれば淑女と云ふ肩書が貰へれば、是以上のものはなからう、嘗て聞くところに依れば故エドワード七世陛下は世界の表に太陽の没することがない大領地を有する大ブレタニヤの皇帝陛下であると云ふ肩書よりも、紳士と云ふ尊稱の方が欲しいと仰せられたとの話がある、女后アレキサンデラ陛下も確かに大ブレタニヤを支配するところの國母陛下と仰がるよりも、麗はしい淑女と云つて貰ふ

方が有難いと云はれるであらう、使徒パウロはキリスト以來の一人であると云ふ尊稱を誰かに貰つたのである、又アポッスルと云ふ尊稱も貰つたのである、又は大宣教師と云ふ尊稱も貰つたのである、けれども使徒パウロが貰つた肩書の中では彼れは世界に於ける最も立派なる紳士なりきと云ふのが最もパウロの悦ぶ尊稱であつたらうかと思ふ、實に世界に於ける最も立派なる紳士と云ふ肩書ほど得たいものはない、新島襄氏は死後日本の六大教育家の一人と云ふ肩書を貰ひ、其生前にはエル、エル、デーの學位を貰はれたが自分では浴陽の一平民と云ふ肩書を付けて悦んで居られた、嘗て先生と共に神戸の備前屋と云ふ宿屋に泊つた時に、下女が宿帳を持つて來て名前を書いて呉れろと申した、先生は新島襄何所其所の住人年は幾つと書かれた、私も私の宿所姓名を書いた、ところが役人ごでも思つたのか今度は番頭が出て來て、どうか官名を書いて呉れろと云ふ、我々は何等官名を持たぬ者であると断はつたが何うしても承知しない、そこで先生は筆に墨を付けて無官太夫と書かれた、私は夫を見た時に腹を抱へて笑つたけれども無官太夫と云ふ肩書は獨り敦盛が悦んだばかりではない、浴陽の

一 平民を以て任ずるところの新島先生も、矢張り無官太夫を以て戯れにもせよ稱せられたと云ふは愉快な話ではあるまいか。

以上色々なものが欲しい、欲しくなくても人が付けて呉れるが、其人間が貰ひ得べき尊稱の中に神の子と云ふ唱は尊いものはなからう。何爵と云ふよりも何博士と云ふよりも、紳士と云ふよりも人と云ふよりも神の子と云ふ稱呼は世にも有難いものがあるまい、舊約聖書を開いて見ると創世記の六章の二節から四節までに神の子達が人の娘と婚姻をしたと云ふ事が記してある。恐らく是が舊約聖書に於て初めて見る神の子と云ふ言葉であらう。詩の八十二の六には裁判官を神の子達と記してある、今一ツは巽に朗讀した但以理書の三章の二十五節に第四の者の容は神の子のごとしと云ふ事である、舊約聖書三十九卷の中に神の子と云ふ言葉は、或は神の子達と云ふ言葉は他には見出さない、而して舊約聖書に於ては天の使者を神の子達と云つたのか、人間の中の尊い役を勤める者を神の子達と云つたのか、マア其中の一ツ、或は二ツ共に叶つて居るかも知れない、イエス、キリストに至つて初めて神の子と云ふ内容が豊にな

り明瞭になり、且尊くなつた譯である、キリスト此世に降り給はなかつたならば神の子達とは天の使者、神の子達とは裁判官、神の子達とは人間の中の尊いものと云ふからぬことであらうが、キリスト此世にお降りになつて、御自身は謙遜にして一度も自ら神の子とお稱へなされた事はない、何時でも人の子とお稱へなされた、けれどもお弟子達はイエスを神の子とお稱へ申した時に、イエスは悦んで其稱を受け居らせられたから、人の子なるイエスはお弟子方からして神の子と云ふ肩書をお貰ひなさつたと申しても宜いのである、自稱の神の子よりも如何にも其人の人格の高きところからして、四邊の人が彼の人こそは眞の神の子と云ふて呉れるならば是れ實に幸ひである、自分が我は紳士なり我は淑女なり、我は世界に於て最も尊い紳士淑女なりと申したならば狂氣の沙汰である、人が云ふて呉れて初めて價値が出る、ナザレのイエスも同じ事お弟子方が「爾は活ける神の子キリストなり」と稱へて初めて其光輝をお發しになつた譯であらうと思ふ、然らば其神の子と云ふはイエス、キリストにのみ限られたものであるかと申せばどうぢやない、キリストの如き内容を養ひ得たな

らば、我々の如き算ふるに足らざる人間と雖も齊しく神の子と云ふ稱を頂く事が出来るであらう、神の子の内容と云ふは何であるか、物は内容次第、どんな立派な尊稱を有しても内容が不味ければ駄目である、神の子と云ふ時には第一に親子間の親しき交りを聯想する、彼の人は實に親優りの息子だと云はれても、何うもお氣の毒な事には親と彼の人の間は始終意見が合はず、意氣が合はないのだと云ふ事であつたならば、是れ不肖の子である、決して親の方から眞に我子なりと云ふ思ひは生じない、子供の方から眞に是れ我父なりと云ふ思ひは生じない、如何に賢明なる息子でも親と仲違ひをして居れば如何であらう、子たるもの、第一義は何う考へて見ても親子の親しみ、又私共が此世の中を渡る中であつた彼の人は親を大切にする人だ、親の爲に立派な別荘を拵へて彼所に住まはせて日々御馳走萬端何不自由のないやうにしてお上げなされる併しながら彼の息子さんは一ヶ月に一度も親のところには寄着かない人だと云ふ事であつたならば、如何に物質的に親を悦ばすにしても、もう其人は決して子としては價値のないもので、詰らないものであると云はれても仕方がない、決して價値は

ない。

諸君、中江藤樹先生も神に對しては太上太一尊神とか大上帝とか云ふ有らゆる尊號を奉つて居られるが先生は天の神をお父様と云つて之に親しみ、之に近づくと云ふ事は教へなさらなかつたやうである、希臘の大哲人エペクトラトスは神を父と稱へる事は稱へたが、其神を朝に夕にアバ父と仰いで、此神に親しむと云ふ事は知らなかつたやうである、昔から今日に至るまで多くの聖人賢者が世に出て神と云ふ事を教へたけれども、其神をアバ父と稱へて眞に之を慕ひ且つお廻り申すことを事實の上に現はしたものはイエスの他にはなかつたのである、キリストのお弟子の中にはヨハネの如く我儕稱へられて神の子たる事を得是父の我儕に賜ふ如何ばかりの愛ぞ」と云つて天の神を父と仰ぎ慕ふ事の出来るのは是何であらうか、此くらゐな深い愛はないと叫んで居るところの使徒パウロは「爾曹が受けし靈は奴たる者の如く復び懼を懐く靈に非ずアバ父とよぶ子たる者の靈なり」と云つたところを見ると、幸ひにもヨハネやパウロは、キリストのお示しに依つて天の神を父と仰ぎ、而もお父様と云つて其父に親しくお交際

をする事が出来た、實に神の子になつたと云つて此上なき喜びをいたして居るのである、其點が得たい、過日も一人の求道者の方がお出でになつて「何うしても神を父とお慕ひ申す事が出来ません」と言はれた、私は其一言を聴いて其人ばかりではないと思ふた、既に洗禮を受けて居るところの人でも、天の父よと云つて我肉親の父母を慕ふが如くお慕ひなさる方が幾人あらうか、私も洗禮を受けて二年ばかり経つて京都の同志社に參つた時には、デビス先生に向つて「神を敬ふと云ふが當然である、基督教で神を愛すると云ふは間違ひではありませんか」とお尋ねしたくらゐであつた、其時に先生は「貴方は今分りますまいが後になつたら分ります」と穏やかに言つて居られた、夫から五年七年経つて天の父と云ふ事が稍や我心に分つて來た時に、成程神を敬ふでは不可い、神を愛するでなくてはならない、先生が貴方は今分りませんが後に至つて分りませうと云はれたのは此點だなど深く自分の心に感じたことであつた、イエス、キリストの如きは寝ても醒めても其父の事は忘れられなかつた、終夜お祈願なさるべしと云ふやうな事が義なる神怒りの神と云ふやうな頭で出来るであらうか、愛のな

い義理の父母と云ふもので始終ビク／＼して事へて居るところの者であつたならば終夜お傍に居る事が出来ない、一時間でも肩が凝る、けれども愛に満たされた生みの父母と共に連立つて歩く時には、終日終夜は愚か三十日でも五十日でもお父様お母様、我子よと云つて其間に何とも言ひ知れないものが充滿して居るが故に肩の凝る事もない、實に此上なき喜びをする事が出来る、キリストが天の父とお叫びなされたる内容は其親しみ、パウロやヨハネが天の父と叫んだ其内容は此親しみである、左ればこそパウロの如きは「我は神を喜べり」と申して居る、喜べり……私共は神を懼れると云ふ、パウロは神を喜べりと云つたのである、其所に達しなければ到底基督教の眞髓を得たものとは言へない、其親しみを味はなければ宗教の本意を悟り得たとは言へない、天の父にお親しみ申すと云ふに就て種々な障礙物がある、一寸本心に濟まないやうな事をしてもうお親しみは出来ない、一寸聖意に背くやうな事をしてもう疎遠になつてしまふ。

そこで私共は其父が常に我を見て居らせらるゝ事を自覺して、父の聖前に於て何等

本心に責めらるゝ事のない、何等心に邪魔になるやうなものもないやうに心を用的に
用ひて、神に父と云ふ事を求めて行きて、父は何時も我と共に在す。
父共に在すと云ふ事であれば、我我には平和あり喜悅あり快樂あり勇氣あり、何者
が来ても父と共にさへおれば打破して行くと云ふ力が其所に生じて来る。

第二のものは雅量と云ふ事であらう、天の如く大きく海の如く廣いところの雅量を
養ふと云ふ事である、馬太傳の五章の四十五節を見ると如此するは云ふ言葉がある、
此如此するは云ふ言葉はエライ言葉だと思ふ、汝の敵を愛せよと教へてある、 虐遇
迫害者の爲に祈勝せよ、阻ふ者の爲に祝せよと書いてある、 さうして「如此するは義
しき者にも義しくない者にも、善き者にも悪しき者にも同じく日を照し同じく雨を降
らす父の子とならんが爲なり」と書いてある、天の父の子とならんが爲に敵を愛する
と云ふ、 是以上の雅量があるであらうか、我を罵り我を撻り、我感情を害するところ
の人間を寛大なる心を以て受入れて行くと云ふは大きな雅量があらうか、馬太傳六
章の九節以下の主の祈勝を見ても「我儕に罪を犯す者を我免す如く我儕の罪をも免し

給へ」とお教へになつた、祈勝文の中に此一節があるばかりではない、祈勝文の次に人
の罪を免さなければ我罪は免されるものでないと云ふ事が附加してある、使徒ペテロ
は此大雅量を持つべき事を「イエスに教へられたので、人が罪を犯したならば七度まで
は免してやりませうかと云つたら、キリストは七度を七十倍せよとお教へになつた、
人が如何に我に無禮を加へても如何なる仕向けを致しても、其人が悔改むると云ふ事
であつたら四百九十度までは免してやれ、四百九十度と云ふは際限なく免してやれと
云ふ意味である、神の子としての我は、天空海淵の量を養はねばならぬ、一寸人が此
方の感情を害するやうな事があると直ちに其人を睨み付けると云ふ風がある、何か我
意見に反對するやうな者があると覺えて居れば、普通ちやア置かぬぞと云ふ思ひが直に
に生じて来る、我修業の妨害をするやうな者があるならば何時か報復をしてやらうと
云ふやうな思ひが生ずる、けれども夫は普通人のする事、悪魔の子はさう云ふ考を有
つかも知れぬ、神の子たる我々は大雅量を養はねばならぬ、一人でも善に進む者があ
れば悦び一人でも惡に陥る者があれば悲しみ、一人所を得れば自分が家倉を建てたや

うに悦び、二人貧困に陥る者があれば自分が貧困に陥たやうに悲しむこと云ふ、此雅量
を養ひ立ててこそ初めて神の子となり得たこと云ふべきであらう。

其次には私共の思想が清くならねばならぬ、愛する者よ我儕は神の子たり後いか
ん未ば露れず其現れん時には必ず神に背くことを知るるは我儕の眞の眞の状態を見るべ
れば也、凡そ神に由れる此望を懐く者は其深が如く自己を潔くすることを誓いてある、(約翰第
一書の三の二と三) 天の父の深きが如く自らを潔くすることを以て自任したイメス
ル人は、由來清潔の民として大いに自らを清めたものである、ナザレのイエスが此世
の中にお降りになつた時に、猶太人が表面のみを清めて心の底を清めなかつたこと
ろから酷くお叱りになつた事がある、キリストが私共にお教へになつた其清さを云ふ
は、心の澄切つて居る事を意味するのである、是は日本の道徳にも餘り見ない、道徳
と云ふ點では其所までは行けなしかも知れない、けれども聖い天の父が心の底までも
見通しに御照覧なされると云ふ、眞理の味ふところは人が見て居やうが人が見て居ま
いが知らうが知るまいが、眞の心の底には混交氣のない清い心を以て満たされると云

ふ事が大切である、神の子としてはどうしても此清潔を持たなければならぬ。

第四には理想である、毎も私が云ふ理想が又出て来た、雅量と云つてもなかく私
共は今お話するやうな廣い雅量は持たない、清いと云つても今お話する如き清い思想
を持たない、夫で天の父の全さが如く自ら全うすべしと云ふ、キリストのお言葉を理
想として、神の子になりたいと云ふ事を理想と致して、明けても暮れても具體的の理
想、ナザレのイエス、キリストを我靈眼に見て、キリストのやうになりたい、キリス
トのやうになりたいと云ふ事を心から念じて居つたならば、遂にイエスの心が我心に
なりイエスの姿が我姿となり、イエスの言葉イエスの行狀が我ものとなつて來ると
云ふ譯になるから、不知不識の間に眞個の意味に於て神の子たる事が出來ようと思ふ、
諸君が羅馬書第八章をお聞きになつて、只今私が本文に引いた十四、十五、十六と共
に終りの三十一節以下をお讀みになり、神の子の自覺に遣入つた者は飢が來ても裸體
が來ても刃が來ても、何が來ても、天の父より離るゝ事が出來ない、天の父の愛我を
屬ますに依つて更に大なる自覺に遣入る事をお學びにならん事を切に希望する。

我獨り存するに非ず

時まさに至ん今いたりぬ爾曹散て各人その屬する所に往ただ我を一人のこまんと
 然と我獨るに非ず交われさ獨に在なり、われ此事を爾曹に語しは爾曹をして
 我に在て平安を得させんが爲なり爾曹世に在て悲難を受ん然と懼るふ勿れ我す
 てに世に隣り

(約翰傳第十六章三十二、三節)

「我獨り存するに非ず」とは自分獨りで此世に居るのではないといふ意である、御
 互ひが此世に在るや時々寂寞の感に驅らるゝ事がある、何うも斯うも淋しくて起つて
 も坐ても堪らない事がある、其淋しいのにも色々あるが、ロビンソンクルーゾーの
 如く離小島に打揚げられて只見るものは大海原、只聽くものは磯打つ浪の音と信天翁
 の羽音のみといふやうな時には、夫は非常に淋しいものであらう、けれども其淋しさは
 別に心の中に非常なる苦痛があるのではなくして、只語るべき友がないといふだけの

事である、ところが世の中には多くの人々と共に在りながら淋しくて堪らない事があ
 る、譬へば一人の青年が立派に學校を卒業して世の中に立つて事をなさうといふ場合
 に方つて事志と違つて、何をしても彼をしても只失敗を見るのみである、今まで我
 友と思ふた者も餘り失敗を重ねるが爲に遂には碌に物もいふて呉れず、親類縁者も何
 だか愛想を盡かしたといふやうな場合が來ると、是は離小島に獨り託住居をする者よ
 りも其心の中には非常なる淋しさを感ずるものである、昨夏太平洋沿岸に參つた時に
 一人の教育ある婦人、殊に彼の界限に於ては一と算へられても二に下らない婦人が、
 日本を出る時には亞米利加に於て美事に成功した人の妻となる事だから、嘩かし樂し
 き家庭を造れるであらうと思つて來て見たところが、良人となるべき人は何の理想も
 なく何の趣味もなく宛然獸類も同様、只向ふ意氣が強くて數十萬の金を握つたとい
 の人であつたといふ、さて其人と結婚をして見たところが實に堪へられない年頃日頃
 我胸中を往來した理想も我清き情感も全く反古にして葬り去らるゝといふ時に方つて
 は堪へられざるの感に打たれた、實に三年が間といふものはいふに云へない淋しさに

驅られたといふ、是も確かに淋しい事の二ツである、惟ふに金殿玉樓の中に住び錦の
褥の上に座し、多くの僕婢に如様奥様と侍かれて、外眼には羨まる程の結構な境遇
にあつて、而も其良人とは枕を列べて寝む事が出来る人にして、離小島に在る人より
も其胸中には言ひ知れの淋しさを感じて、もう斯ういふやうな生活を長く続けなけれ
ばならない事であれば寧ろ一思ひに死んだがましだと、幾度もく思ふ人もあらう、
其人の胸中の淋しさといふものは是れ實に人間の言葉を以て言ひ盡す事の出来ないも
のである。

かくの如きお話をすれば夫は修養の積んでない人だからと仰しやるかも知れぬ、夫
は詰らない意氣地のない人だからさういふやうな事を感じると云はれるかも知れぬ、
けれども諸君、英雄豪傑といふ人も時に寂寞を感じる、セントヘレナに佐しき月日を
送つたナポレオンはどれくらゐに寂寞を感じたか知れない、一日麾下の將軍を捕へて
君はナサレのイエスを何と思ふかといふと、陛下よ我之を知らずと云つた時に、左ら
ば我汝に語らんとて下の如く話された曰く「我は身をコルシカ島に興して歐羅巴を建

の如くに捲去つた時には王の王とまで稱へられたものであるが、今は此離島に流され
て、而も歐羅巴に於てはナポレオンは盜賊よと云つて我を蹴つて居る、然るに一
兵の力を藉らす寸鐵を用ゐずして靈界の王となられたるナサレのイエスは愛の上に王
國を建て、今は世界の幾千萬の人が悦んで彼の爲には一命を棄つる、イエスは人に非
ず」と其ナポレオンの胸中には實に淋しくて堪へられないものがあつたであらう、猶
太の預言者の如きも同じ事である、或はエリヤが其仲間の者が片端から縛られて、我
獨り残されたりと思ふた時の其感は如何であつたらうか、エレミヤが屢々井戸の中に
投込まれて、其冷たさに堪へずして無限の苦痛に沈んだ時の苦惱よりも、彼れの心の
中には非常なる淋しさを感じたであらう、大偉人が世の中に出て何が苦しいか、頭を
叩かるゝ事が苦しいかと云へば夫は覺悟の前だといふ、他人に排斥される事を苦しい
と思ふかと云へば夫も覺悟の前だといふ、然らば何が苦しいかと尋ねたならば我胸中
の秘奥を知つて呉れる者がない、我理想も我思想も我抱負も一人として之を知つて呉
れる者がない、夫で淋しくて堪らぬといふ、ヘゲルが彼の大哲學を考へ出して遂に其

哲學書を出版した時に、或人が「先生、貴方の哲學の能く分る人が何人ありますか」と尋ねたれば「幾千の人が私の哲學を聴いて呉れるけれども、私の哲學が何うやら分つたと思ふ人は一人よりない、而も其一人も怪しい」と申したといふ話がある、天下一人として我所思を知るものなしとすれば實に寂寞の感に驅られざるを得ない、而も偉人なり豪傑なりは他人に誤解され曲解されて、或は暗殺に遭ふとか闇討に遭ふとか云ふやうな事がある、斯うなつて來ると私は毎も思ふ京都の御苑内に芝刈る小原女は幸福なものだ、晝頃に其所を通つて見ると、三々五々松の樹の影に眩を枕にして寢て居る、さうして睡眠より覺むれば其仲間の人とキヤツ／＼と云ふて笑ひ興じて又縁を持つて芝を刈つて居る、彼等の心には何等の寂寞も感ずる事がないであらう、一日の仕事が終れば僅かの賃金を貰つて、歌を誦ひつゝ、上加茂の土堤を歩んで我宿に歸りて、濁酒一杯開召せば陶然として睡眠に就といふ、斯ういふやうな無教育な人間は一面から云へば誤解さるゝ事もなく曲解さるゝ事もなく、少々の苦痛があつても其情感が鈍いが爲に格別の苦痛とも思はずして、矢張り笑ひに紛らして此世の中を送るといふの

であるからして、寧ろ是等の人のの方が偉人豪傑の士に優つて居りはしないかといふ感も起り來る譯である、けれども無學無教育なる人々は只蛆虫の如く蠢動として此世の中に生活をするといふのであるからして、快樂といふ點になつても別に是といふ大なるものはないであらう、私は斯くの如きものとなり果る事を好まない、諸君も亦斯くの如き者となり終らん事は御希望ではなからう、ナザルのイエスはキリストの前にキリストなくキリストの後にキリストなしといふくらゐであつて、何の點から考へて見ても空前絶後の大人格と仰がなければならぬ方である、此大人格の三十三年の御生涯、短い短かゝつたが其三十三年の間に何等淋しい感に打たれ給ふた事もなかつたであらうか、十二年から三十の年まで十八年間に涉れる沈黙の生涯は何にを意味するであらうか、何にも書いてないから、イエスの心事を窺ふに由ないのである、けれども毎日々々大工の手道具を携へて或は他人の家の屋根を繕ひ或は他人の塙を直すといふやうな時に、實にナザン村の譯の分らない大工や左官などの仲間に入つて、十八年の永い歲月をお送りなさるゝ時に、彼れの中に在つた理想、思想、抱負、大希望は

物々として湧き来つて止まないものがあつたであらう、さて其胸中の秘奥を他人に語らんか、四邊の人々は實に物の文目も分らない愚物のみである、到頭十八年の間、我心の萬分の一をも他人に向つて語る由がなかつた、是はロビンソンクルーソー以上の寂寞である、只キリストの心に格別苦痛がなかつたといふ事である、三十の年から公の生涯に還入つて群り来る弟子方の中より十二人を選抜して之を三年間教育して、さて三年の後に其胸中の秘奥を打明けて語るべき者が何人出来たか、ペテロ、ヤコブ、ヨハネの三人だけは優良であつた、之を伴ふてヘルモン山頭に登つて胸中の秘奥を示さんとすれば、此三人は其消息を解しない、キリストたる者は是に至つて實に淋しさを感せずしては居られなかつたであらう、殊にグッセマネの園に最後の祈禱をなさるゝ時に再びかの三人を従れて行つて、石を投ぐれば届くところ即ち半丁ほどのところに弟子方を置いて、我爲に祈つて呉れろと云つて祈つて来て見れば其三人は坐睡つて居る、之を呼起して又祈つて来て御覽なさると再び眠つて居るといふ始末人多しと雖もキリストの心を解し得る者は此三人より外には居らない、其三人でさへも此爲體、キ

リストたる者寂寞の感に打たれずして居らつしやる事が出来ようか、御覽なさい約翰傳の八章の中には「我獨り存するに非ず」同十六章の三十二節にも「我獨り存するに非ず」とある、私は決して獨り居るのではないぞと云はれたのは、此世界に私が只だ獨りだといふ事である、弟子は後方から従いて来るけれども私は獨りだ、マクダラのマリヤやヘタニヤのマリアや其他の女共が澤山に我後から従いて来るけれども私は獨りだといふ、御覽なさい、此聖書の中にイエスが一度でも弟子方と一緒に祈禱をなさつた事がない、祈禱をする時には何時でも獨り山へ行つてなされた、何時でも深い園の中に還入つて獨りで祈禱をなされたのである、何故弟子方を従れて祈禱に居らつしやるなにかと云へば、提灯に釣鐘と云はうか月に籠と云はうか天と地と申さうか、殆んど寄付く事の出来ないほどにキリストの心が高くして其弟子方の心が低いものであるから、此高い者と低い者が一緒になつて祈禱をする事が出来ない、私共を始終慰めるのは、祈禱の集其祈禱の集さへもキリストは閑値なさる事が出来なかつたからして、キリストの心は如何にも淋しかつたであらう、遂に彼のカルバリ山の麓に於て十字架に

釘げられた時には「わが神わが神なんぞ我をすてたまふや」とお叫びなされた、人間には棄てられてしまったが我を棄てない者は只神のみであると思召したか其神が又我をお棄てなさるであらうかと、斯ういふ叫びを發せられた、キリストの心實に己むに己まれないところがあつて、寂寞の感に打たれ給ふたのである。

けれども諸君、キリストは「我獨り在るに非ず父我と共に在せばなり」とお叫びなつた、キリストの御顔が輝いたのも此信仰である、キリストが終りまで奮闘をなされて我事成れりとお叫びになつたのも此信仰である、梅田雪嶺が只皇天后土の知るありと叫んだ時に彼れの心情は亂れて糸の如くになつた、只皇天后土の知るありといふ其叫びは稍や雲嶺の心を慰めたかの如く思はれる、人生是に至つて我を慰め我を勵ますものを求めざるを得ない、夫を見出さないならば華嚴の淵、夫を見出さなければ須磨の浦曲、實に堪つたものぢやアない、ナザレのイエスは高ただけ夫交友がなかつた、此世界には一人だにキリストの友といふ者はなかつた、是非なく弟子方だけを我友と呼んで切めてもの心遣りになされた、實はキリストの友たるに足らない、けれども其

キリストの「心の中に父我と共に在せばなり」といふ此信仰、天地の大本體は我父だといふ、造物者に非ずして我父だといふ、天地の大原因であると共に我父であるといふ信仰、キリストがお父様とお叫びなされたる其一言の中には到底我々の測り知るべからざるどころの深い意味が籠つて居たものと思はれる、諸君も祈禱をなさるゝ時に天に在ます我等の父よと仰しやる、私もさういふのである、グラッドストーンもアブラハム、リンコルンも天に在ます我等の父よと云つて祈つた、けれどもグラッドストーンやリンコルンが父よと云つた、其父と我儕がいふ父と稱するもの、其内容は非常に違つて居るかも知れぬ、名前は同じ事であつても其内容は非常に違つて居つたものであらうと思ふ、若しさうであるとすればナザレのイエスが天の父よとお叫びなされた、其父といふ意味は内容に於ては實に豊富なものであつたと思はれる。

諸君、子を持つて知る親の恩といふ事がある、妻も持たず子も持たない青年男女が多く居らつしやるが既に妻あり子あり、而も一人の子供を育て上げるのには一週りも二週りの苦心ではない、時には子供の爲に鷹の千切れるやうな思ひをもして育てた

我獨り存するに非ず

職のある父と母とが、其父と母とを思ふ思ひに至つては青年諸君の思ひに優るものがあるであらう、キリスト、イエスが同じ父とお叫びになつても、其父といふ内容に至つては私共が想像する事が出来ないほど深いものがあつたと私は信じて居る。さう考へ来る時に方つては諸君、約翰傳の十七章の三節に「イエスキリストと之を遣はし、天の父を知るといふ事が限りない命であるといふ言葉が實に非常な味ひがある、何となれば到底其父の内容は此世だけでは知られない、永遠の未來に掛けて之を知るといふ、心の奥深い人は奥深い丈天の父の奥床しさを知る事が出来る、心の高尚なる人は高尚な丈夫だけ天の父の高尚な事が分る、慈愛の深い人は深いたく大丈夫の父の慈愛の深さが分る、夫で斯ういふ問題になつて来ることは頭の問題ぢやアない、是は心情的問題である、實驗を積み修養を積み世の中の辛酸を嘗め、或は誤解される事もあり、曲解される事もあり、他人に顔合す事も出来ないやうな苦痛を嘗めた事もあつて、夫が爲に我心情が漸次に磨かれ漸次に養はれて来て、遂には何うなるか、使徒パウロを御覽なさい、パウロは萬軍のエホバ正義の神といふところから出發して来たのである

る、羅馬書を閉いで讀んで見るとパウロの眼中に輝いたものは正義の神である、羅馬書の一章から七章までといふものは正義の神が輝いた、正義の神の輝いた時には此パウロはア、我は罪人だ、ア、我は律法を守る事が出来ない、善を行はうとすれば悪の心が下から湧いて来て之を押へようとしても何うしても押へ切れない、ア、勵なるかなア、我悔める人なるかなと云つて實に罪惡の谷底に落ちてしまつた、けれども羅馬書の八章に至つて「懼れを懐く候たる者の靈にあらずアバ父と呼ぶ子たる者の靈なり」と叫んだ時には、此パウロの眼に見えるところのものは正義の神に非ずして愛の神であつた、パウロの眼の前に見えたるところは善の至極といふ抽象的のものにあらずしてアバ父であつた、子供が母様といふ叫びと同じ事、アバ父と叫ぶ其心情を以て此天の父に接觸して行くといふ、其アバ父と叫ぶ其一言の中に無限の慰安無限の激勵、無限の能力が加はつて来るものであるからして、其天の父が我と共に在するならば十字架の上も何のその、白刃の下に首を落さるゝのも何のそのといふ考になつて来る、彼のストラパンが石にて打殺さるゝ時に、鮮血淋漓として其額から流れ溢れる時に、

我獨り存するに非ず

我獨り存するに非ず

彼れが莞爾と笑を含んでさうして天を仰いで、而も已れを殺す者の爲に罪の赦しを祈つたといふ時に、此スラブノの心の中に在つたものは何であるか、父我と共に在せり、天のお父様が我と共に在す、何の恐るゝ事があらんやといふ感をも以て立つ事が出来た、新島襄氏が暗殺をするから用心召されよと云つて忠告を受けて、而も自宅から七條の停車場に行くまで警察が保護して呉れた、さうして遂に神戸の諏訪山に宿を借つて静養された、其の宿といふものは雨戸一枚突けば直ちに進入する事の出来る場所である、而も新島氏を暗殺しようといふ根本人は、そこを距る僅か八丁以内の所に居つたのである、然るに新島先生は泰然として其破れ屋の中に逗留して、毎日々々諏訪山を横行闊歩して居られた、何うしてさういふ大膽不敵な事が出来るかと尋ねたならば、ナニ人が殺さうと思へば調査が百人附いて居ても殺される、天の父我と共に在せり、自分の生命は天の父に捧げてあるからして、神が守つて居つて下さるからして、何者が我を殺さうとしても敢て及を我に差向ける事は出来ないといふ其信念を以て立つたといふ、父我と共にあり……諸君は暗殺にお遭ひなさるやうな事もあるまい、又諸君は

さういふ危険に瀕せらるゝやうな事はあるまい、けれども肺病の宣告を受けたら何うだ、石神病院長が診て肺だ、而も結核大分進んで居る三年が六ッかしい、此宣告を受けた時に青菜に沸湯を浴けた如く項低んでしまひ、顔は青靨め肩で息して居るならば、信仰は一體何所にあるか、もう淋しくて堪らない、朋友や何ぞはチャホヤ云つて呉れども堪らない、泣きたくなる、信仰は何所だ、父我と共に在せば也といふ此信念を有つて居つたら、肺病の宣告を受けても何の事だ、此軀を此世の中に棄て、天の父の御許に行くんだといふ、此見地を以て立つべきではあるまいか、ナニニ人がそんな事を云つても人間がニッ肺病の宣告を受けて御覽なさい、そんな元氣な事は云へない、斯く云はれるかも知れない、私共は色青靨めて項低むに違ひないといふ、けれども私は思ふに肺病の宣告を受けなくても死が眼前に迫つて来れば青靨める、是は世の中に於て私共が人間を相手にするといふ考を有つて居る間は、人間から馬鹿にされたり又嘲弄されたりするものである、人間から愛せられるといふ考を有つて居るならば、毎も何うも青息太息して此世の中を送らなければならぬ、其人間を超越して父我と共に在せば

我獨り存するに非ず

我爾り存するに非ず

なりといふ此境に道入れば、即ちキリストが云はれた如く「われ此事を爾曹に語しは爾曹をして我に在て平安を得させんが爲なり」此平安は何を意味するかと云へば、海の難に遭はうが陸の難に遭はうが、身首所を異にするが如き事があつても、如何なる事があつても神色自若として平安を保つ事が出来るばかりでない、何のそのといふ勇猛心を以て之を打破つて行く事が出来るといふ事を教へたのである、若し基督教に父我と共に在せばなりといふ信念を打込む事が出来なかつたならば、オトガスチンもマ一チンルーラルもアブラハム、リンコンも、實に此世を作り替へたやうな大人物は或は出なかつたかも知れない、其艱難の中に天の使者の如く輝ける顔を以て笑つて其難に處して己が使命を果す底の人間は出来なかつたかも知れない、今日の我日本に於て此種の人間が乏しいのを認むる事であるから、御互ひに奮勵を要する次第である、何れ一度は今お話しするやうな寂寞に打たるゝ事があるに違ひはない、殊に死の宣告等を受ける時にはいよいよ言ひ知れぬ淋しさを感するのである、其寂寞の境に在つて春の景色を眺めるやうな心地で過したいといふことであれば、基督教の眞髓は「父我

と共に在せばなり」といふ、其信念を得るの外はないといふ事を御自覚になつて、更に其點に向つて御修養あらん事を望む。

人間交際の大義

行得べき所は力を盡して人々を臨観むべし

(羅馬書第十二章第十八節)

現代の科學者は人間を一種の動物と見做したるもの乎人は交際の動物と云つて居る、是は人間ばかりではない、生きとし活ける者は皆交際の動物である、併し其中でも人間ほど交際を必要とする者はあるまい、創世記の二章の十八節を見ると「エホバ神君たまひけるは人獨なるは善らず我彼に適ふ助者を彼のために造らん」と録してある、エデンの園にアダムといふ男が只獨り生れ、茫然として居る時に神は之を憐して、人獨なるは善らず、之には同情者が必要であると云つて、エバといふ女を造つてお與へ

人間交際の大義

なされたを記してある。是が夫婦の始まりである、既にアダムといふ男がありエバといふ女があれば、此二人の間に交際なかるべからず、此二人から子供が生れて親子の始まりとなる、親子の間交際なかるべからず、其子供の弟や妹が生ずれば此所に兄弟の交際なかるべからず、其兄弟姉妹の子が生ずれば従兄弟同士の交際が始まる、交際といふは石を取つて池の水に抛つて波紋を生ずる、丸い波紋を生ずる、夫が段々段々廣くなつて行つて遂に薄くなつて消えると同じやうなものである、其波紋は石を投じた起點の四邊に描かれた小さい輪が一番濃く、厚く、夫が段々廣くなればなるほど薄くなつて遂には消える、人間の交際にも小さな輪があつて、それが段々大きな輪を描くやうになつて、餘りに其輪が大きくなると、何うしても親しく深くは行かないものである。

茲に問題が起る、交際の大義といふは何か、人は何故に交際をするのであるかと尋ねられたならば、私は源に遡つて天性だ、交際せずしては居られないから交際をするといふ、もう一ツ碎いて申せば人は情の満足が得たい、情の満足が得たいからして友を求むる、もう一ツ碎いてお話しをすれば人は誰にか満腔の愛情を捧げて見たいといふ事になる、只今撒母耳前書の十七章を讀んだが、サウロの息子にヨナタンといふのがあつて温良い玉の如き人であつた、父親のサウロは何方かと云へば神懸質の人で、愛すると來たらは根限り愛するが、冷やかとなつて來たならば愛子のヨナタンに向つて劍を投付けるといふ質の人であつた、随つてサウロの家庭は面白くない家庭であつたやうに思はれる、ヨナタンは己が家庭に於て情の満足が得たい、ところがサウロが新たにお召抱へになつた家來にダビデといふのがあつてヨナタン之を見るに實に立派な人格、飛付くばかりに立派な品性を備へた人である、ヨナタンは此ダビデを見て心からダビデの心に結付いたのである、ヨナタンは己の命の如くにダビデを愛したので、着て居る衣服も鎧兜も弓も矢も劍も、おのれの物を擧げてダビデに與へたと書いてある、ヨナタンは斯くの如き満腔の愛情をダビデに捧げて、年頃日圓燃るばかりの熱情を湛えて居つたのが初めて満足をしたものであらうと思ふ、サウロは満腔の愛情をサウロ、テトス、シルソンの如き人々に捧げたと聖書に記してある、サウロは

は満腔の愛情をヨハネに注いだと記してある、ナザレのイエス、キリストが十二人の弟子中からして、ヨハネ、ヤコブ、ペテロの三人だけを選抜いて、或は高き山に連れて行き、或はゲッセマネの園にお伴ひなされたところを考へて見ると、別にキリストが弟子方に向つて依怙偏頗な仕振をなされたといふ譯ではない、イエス、キリストの心に在る満腔の愛情を誰にか捧げて見たいといふので、遂に此三人の弟子を見出して之にお捧げなされた事となつた、又御互ひの間に於ても良人が妻に満腔の愛情を捧げることが出来て、妻は良人に對して溢れるばかりの愛情を捧げることが出来たならば、こゝに家庭の交際は極めて圓滿に行くのである、若し妻が其良人の満腔の愛情を受くだけの用意がなかつたならば、其良人は他の女性に向つて己が持てる愛情を移すのである、高尚なる人格であれば別に危険もない、けれども普通の人間であつたならば夫れこそ大變、家庭は是が爲に破れかぶれを招くこととなる、若し人間に向つて愛情を注ぐことの出来ない場合には犬猫に向つても満腔の愛情を注ぐ、牛馬に向つても己が満腔の愛情を注ぐものがある、此満腔の愛情を注ぐといふ事は人生最大の要件

である、人は己れを磨くのが第一の義務なりといふ、己れを磨くのが第一の義務といふは何を意味するかと云へば己れを抛つといふ、己れくがといふ其我を減らすといふ事である。

然るに何人に向つてか己が愛情を注ぐ場合がなかつたならば又場合があつても、己が愛情を注がないといふ方があつたならば其人は夫で磨けるであらうか、私は決して磨けないと思つて居る、亞米利加ではオールドミスほど不可ない者はないと云つて居る、オールドミスといふはいかす嬌婦、三十四の齡を迎へて未だ嫁がざる婦人、總てのオールドミスが悪いのぢややない、中には良い人もある、けれども其悪いといふのは只己れあるを知つて人あるを知らないで、自分の事はつかり考へて、明けても暮れても日を送るものであるから、氣隨氣儘が募つて仕方のない者になつてしまふ、けれども此いかす嬌婦なる者が或人の妻となつて愛情を捧げて見るか、假令生涯お嫁に行かないでも、何人かの子を貰つて之を育て、見るか、其愛情を注ぎ得べき目的物が出来たならば其時から變る、其時から慾張の女が、慾の少ない丸い嬌然した人になる、

是は昔にいかず編婦ばかりぢやアない、幾多の女も亦然りである、良人には死なれ、子はない、もう自分さへ何ぞかして此世の中を楽しく可笑しく暮らしたらばといふ考へになつて、己が愛情を注ぎ得べきものがないやうになつた日には、此婦婦さんは全然精神が變つて夜叉のやうな者になつてしまふ、けれども其者が他人の子でも預かるか又甥でも姪でも宜しい、之に向つて愛情を注ぎ始めると其者は變化するのである、人の妻たる者も同じ事であつて、聖書にはエライ事が云つてある、提摩太書には女は子を産む事に依つて救はるとある、是は實に確かなことである、子を産まない女ならば他人の子を育つる事に依つて救はる、其意味は滿腔の愛情を注ぎ得る目的物が出来たらば夫で救はれるといふことである、即ち其人格が清らかになり、其品性が麗はしくなるといふ意味である、昔から今日に至るまで大きく捧げた者は大きい品性を造る、高く捧げたところの者は高い品性を造つて居る、又此世の中にお朋友のない人がある、實に孤獨の生涯を送つて居る人がある、是れはいかにも氣の毒な人、其人はどんな人だといふと己れあるを知つて他あるを知らない、自分の方に挿込む事を知つて、自分

の物は鏝錢一文でも出す事は嫌ひなといふ慾張爺か慾張婆か、慾張息子か慾張娘である、かゝる慾張者には友がない、其朋友のないといふ人は捧げる事を知らない人であるから汚ない一方であつて、磨ける道がない。

私は今此所に立つて熱々自分の過越し方を振返つて見ると、十八九の頃私より年が四ツ若い人があつて、其人は父親が早く死んで母親一人、而も其人には男の兄弟がない代りに女の姉妹が五六人あつて夫を支へて行きつゝ自分の勉強をしなくちやならないといふ氣の毒な人であつた、私は其人を朋友として多少の愛情を捧げて見た事がある、其人が旅費がない爲に我々と一緒に京都の同志社に勉強に行く事が出来ないといふ事を聞いた時分に、自分は一夏小學校の先生でもして其人の爲に旅費を拵へて、上げたものだと思つたが、實行は出来なかつた、實行したらば更に宜かつたらうと思ふが、思つただけでは朋友の爲め愛情を捧げるといふ事は、如何に我人格を清くし、我品性を美にするものであるかといふ事だけは實驗した、我に妻あり我に子あり、其妻子に對して愛情を捧げる事の如何に有難きかを知つたものである、私は牧師となつ

た事を悦ぶものである、生涯牧師でありたいと思ふ、何となれば幾百の人幾千の人の爲に及ばずながら多少の愛情を捧げるといふ事は、是れ天が與へた特權である、牧師となるのは修養に於て一番宜い事だと自覺した者である、兎にも角にも己が有つて居るものを捧げる事が出来るといふ一事である、基督教會の歴史を緝いて見ても第一に捧げたのがキリストである、一命までもお捧げになつた、次にパウロ、十二使徒も亦同様であつた、夫から下つてジョスタンマーターと云ひイダネシヨスと云ひオーガスチンと云ひマーチンルーテルと云ひ、モロカイ島の癩病患者に滿腔の愛情を捧げたダミアン、スコタリの病院に英吉利の手負兵に己れを捧げたナイチンゲール、監獄に於て憐れなる生涯をなす人々に己れを捧げたミッセスフライトと云ひ捧げた人は多し。

私共は捧げやうが足りない、捧げたいと思ふ心を持つただけでも神が聖化して下さる、捧ぐべきを知つて捧げないといふほど世の中に不幸な人はない、昔は聖母マリアに己れを捧げた人もあり、ナザレのイエスに己れを捧げた人もある、天の父に己れを捧げ

た人もある、けれども夫は最早人間の交際を離れた宗教の問題であつて、人間交際としては今生きて居るところの我四邊に在る人間の誰某に向つて己れを捧げなくてはならない、ところが諸君、己れを捧げるだけでは満足が出来ない、他人にも滿腔の愛情を貰ひたい、誰かに愛して貰ひたい、誰か愛して呉れるならば放蕩などするものではない、誰か愛して呉れるとさう馬鹿をやるものではない、けれども天地廣い中に人多き中に、誰一人我を愛して呉れる者がないといふ事を考へた時は、最早自棄を起して夜叉の如く荒廻る、愛して呉れないのは誠に淋しいものである、誰にか愛して貰ひたい、妻に愛して貰ひたい、親に愛して貰ひたい、子供等に愛して貰ひたい、兄弟に愛して貰ひたい、弟妹に愛して貰ひたい、又教會に加はれば教會の誰某といふ信者に愛して貰ひたい、若し愛して貰へないといふ時には反心を起す、姑が嫁を憎むといふ、何故憎むか、可愛い嫁を何故憎むかと云へば、今まで我のみに滿腔の愛情を捧げて居つた息子が、其妻にのみ愛情を捧げるやうになつたと思ふ時其舅姑は即ち夜叉である、其息子の愛情を奪はれた敵討を嫁に向つて試みる、恐ろしいものである。

諸君、私共は己れが満腔の愛情を捧げて誰かを愛して居れば、非常に愛して居れば、他人に愛して貰はなくても左程に思はない、何となれば満腔の愛情を注いで他人を愛するから己れを忘れてしまふ、己を忘れてしまふから、他人が我を愛して呉れないといふ事は思はない、そんな事は頭に浮ばぬやうになつて来る、其所へなつたらエライものである、ところが何人にも愛情を注がない人は自分ばかり考へる、夫で他人が私を愛して呉れない、他人が何うして呉れないといふので不平満々、いよく其人の性質は損はれてしまふのである、して見ると交際の本義といふものは情の満足であらう、其情の満足といふは他人に愛して貰ひたいといふよりも、此方が溢れるばかりの愛情、満腔の愛情を他人に注ぐといふことである、そこで私は考へるに、此愛情を捧げるといふ事は、捧げるのだが誰に捧げるかといふ事で非常な相違を生ずる、譬へば其愛情を藝娼妓に捧げた、劣等なる藝娼妓に捧げたとして見られよ、人格が向上するであらうか、否全然墮落してしまふ、其愛情を己れよりも徳の高い清い婦人に捧げたとして見られよ、其愛情を父母に捧げたとして見られよ、其愛情を己れが先生に捧

げたとして見られよ、其愛情を捧ぐる者が清ければ清いほど、高ければ高いほど、深ければ深いほど此方に反射して来るものが清く高く深く深くなる、そこで交際をするのに朋友を選ばなくてはならない、交際の間を選ばなくちやアならぬ、トマスアルノルドといふ大教育家が毎も自分の居室の窓から學生が運動をするのを見て居つて、ア、彼れは此頃彼の良い友を得たと云ひ、ア、彼れはあんな詰らない人を友としたと云つては、詰らない友を得た人があると、其人を呼んで良い友に結び付けたといふ、旅は道連世は情、我々信仰の旅も亦同じ事、友を求め、交際の友を求めなくちやアならぬ、近頃洗濯を受けた方は友があるか、信仰の友があるか、友のある人は宜いが、未だ友を得て居ない方は速かに友を得て貰ひたい、早くより教會に出入をして居らつしやる兄弟姉妹は、其新しい人に向つて満腔の愛情を注いで貰ひたい、其人の友となつて上げて貰ひたい、さうしなければ決して進むものぢやアない、我人格が高尙になるものぢやアない、愛して貰ふといふだけぢやア駄目、夫は慾張だ、此方が捧げなくちやアならぬ、受くるよりも與ふるは幸福なりといふはキリストの格言である、捧げ

なくちやアならぬ、捧げさへすれば清くなる、ガリラヤの東にガリラヤの湖水がある、その水ヨルダン河となつて死海に落ちて居る、ガリラヤの湖水へ行つて見ると其水は水晶の如く透徹つて、大小の魚が潑刺として泳いで居る、其四邊は青緑であつて如何にも美しい景色である云ふ、然るに死海に行つて見ると即ち死の海であるから魚が居ないのみか、一ツの生物だに居ない、管に其死海の潮の中に生物が居ないばかりぢやアない、其四邊は焼けて何の生物さへ見る事が出来ぬ、同じ水が湛えられてあるのにガリラヤの湖水は水晶の如く透徹つた心地よき水、而も生物が潑刺として跳るのに、死海は實に眼も當てられない有様である、是は死海は貰ふ一方、ヨルダン河から水を貰ふ一方で些とも其水を吐き出さない即ち慾張爺や慾張婆の心持である、遂に死海といふ名を得た、ガリラヤの湖水は四邊の山や谷より水を貰ふが、出す之を倍にして出す、故に清い、人間交際の本義は即ち此所である、情の満足を得なければならぬが、其情は貰ふ方に於て満足するよりも、與へる方に於ての満足といふ事を考へなくちやアならない、キリストは十字架の上に手本をお示しになつた、己れに敵する者の爲に命

を棄て、捧げるといふ手本、此手本に倣つて私共は捧げなくちやアならぬ、ヨナタンはダビデに捧げた、ペテロはヨハネに捧げた、ヨハネはペテロに捧げた、パウロはテモテ、テトス、シルワノに捧げた如く捧げなくちやアならぬ、何人かを捕へて上の者に捧ぐるも宜し下の者に捧ぐるも宜し、上の者にのみ捧げて行かうとするのは未だ慾張、人々を行得べき所は力を竭して是と睦親むべしとパウロが説かれた、私共は誰かを追駈けて行つて此愛情を貰つて呉れると云つて、其人に取つて貰つたならば夫丈基督信徒になる、其心を以て交際したならば、天下至るところ朋友ならざるはない、天下到るところ兩手を擴げて我を歓迎して呉れるやうになる、基督敎の交際問題は是から割出して行きさへすれば、確かに交際の道を守る事が出来る、其他色々なる禮式といふ事があるけれども抑々末、本義は此所に在る、是から割出して行かなければならないと思ふ。

進徳の本

その生命を得る者は之を失ひ我ために生命を失ふ者は之を得べし

(馬太傳第十章三十九節)

然ば兄弟と我神の路の慈悲なして爾曹に勸その身を神の意に適ふ聖き活る祭物となして神に獻は是當然の祭なり、又この世に做ふこと勿れ爾曹神の全かつきにして悦ぶべき旨を知んが爲に心を化して新にせよ

(羅馬書第十二章二節)

先日から教會の合同と云ふ聲が聞える、私は合同と云ふ聲は聲だけでも非常に良い聲である、決して悪い聲ではないと大阪講壇の社説に書いて置いた、今朝は徳に進むと云ふ題を掲げた、時に有徳の士君子と云ふ聲を聞く、徳と云ふ聲は聲だけでも非常に良い聲である、不徳と云ふ聲は聲だけでも實に悪い聲である、誰某が失徳の行状ありと云ふ、失徳と云ふ聲は如何にも聞難い聲である、私は此世に於て何が愉快など申しても又何が有益など云つても、徳の有る士君子に出會つたと云ふ事ほど結構なもの

はないと思つて居る、或は亞米利加のヨセミットと云ふ大公園に遊び、さうして二千六百尺もあるやうな瀑布を見たり、海拔七千尺もあるやうな大きな岩を見たりした事は、後で考へて見ても實に壯大など云ふ感興は殘る、成は倫敦のバンク、クラブ、インクランドの前の如き幾條の街が一緒に出會つて、幾十臺の馬車や自動車や荷車が輻輳ぶて、實に何うも蜂の巢のやうに人馬が群集して居ると云ふやうなところを見て、ア、繁華だなど云ふやうな事を感じる、後から考へて見ても其繁華な街を横切つる時に自動車や馬車に轢かれぬやうに注意したと云ふやうな事を考へると身の毛が竦立つ程に思ふ、けれども有徳の士君子に出會つて十年経たうが二十年経たうが將又三十年経たうが、何だか其徳の感化が我身に引付いて居るやうに思はれる、サンデー先生に出會つた事を思へば自からにして親愛の情が溢れる、モンゴル先生に出會つた事を思へば、其話が津々として盡きざる趣味に満ちて居つた事を思ふ、思ふだに壯絶快絶である、實に有徳の士君子に會ふほど愉快であり且有益なものはない。

夫に次では有徳なる士君子の傳記を讀む事である、私は幼い時からさう云ふ種類の傳記を讀む事が非常に好きであつて手當り次第に讀んで見た、もう三十年も前に讀んだ傳記でも今眼を閉ると、其傳記の主人公が活躍として我眼に現はれて来る、一度徳の芳しき香に接したと云ふ其香は今も尙其傳記と共に我衷に香ふて居るやうな心持がする、以上お話しする如き士君子に出會つて其の徳に觸れたと云ふ事と、又傳記を讀んで其徳行の後を尋ねたと云ふ事が夫位に結構なものであるとすれば、我自らが徳に進んだら如何であらう、我自らが有徳の君子となり淑女となる事が出来たならば、さう云ふ人に接したとか傳記を讀んだとか云ふ事に比べて見て、我快樂我喜悅は如何なるものであらう、實に何とも云へないものがあるに違ひない、今日我日本に於ては家庭の躰を喧しく云ふ、子供の躰方を喧しく云ふ、恐らく日本ほど子供の躰を喧しく云ふ國は外國にはあるまい、學校に於て倫理教育を喧しく云ふ、日本の文部大臣ほど徳育の訓令を多く出す大臣は何所の國へ行つてもあるまい、日本の學校の校長ほど學生の徳育に就て喧しく云ふべく餘儀なくされて居る校長は他の國には餘り多くなからうと思

ふ、又銀行、會社、商店何れの方面を見ても社員、行員、店員の取締方は夫はく喧しい事である、而して喧しいだけで其實が擧げられないと云ふ事も日本が第一だらうと思ふ、何故擧げないかと云へば色々原因もあらうが、他人が徳に進むやうにと云ふお世話焼が多い、而して自分が徳に進まなければならぬと自覺して努むる者が少ない譯ではあるまいか、親は子が徳に進まん事を望み、教員は生徒が徳に進まん事を望み、重役は行員、社員、主人は店員が徳に進まん事を望む、而して自分は徳に進むと云ふ事の爲には何等盡すところがないが、是れ徳を喧しく云つて徳に進まない大原因であらうと思ふて居る。

然らば徳に進むと云ふは何かと云へば、徳は得なりと支那の學者が書いて居る、けれども私は此反對に徳は損なりと云ひたい、人若し徳に進まうと思ふならば損をしなければならぬ、イエス、キリストが「生命を得んとする者は之を失ひ生命を失ふ者は之を得べし」と仰せられたのは是何を意味するか、徳に進まうと思へば自らを損しなければならぬ、言換れば犠牲の精神がなければ徳には進まれないと云ふ、献身の精神

かなければ徳には進まれない、もう一ツ言換れば自己本位の人徳の人は徳の人とはなる事が出来ぬ、他愛本位の人にして初めて徳に進む事が出来る云ふのである、看られよ、女は母となる事に依つて救はれる、母となる云ふ意味は何であるか即ち己れを損する事、犠牲になる事である、彼の娘は實におきやんであんな者がお嫁に行つたらは何うなるだらうか、主人泣かせてであるのみならず舅、姑を泣かせるやうな嫁が出来はしないか知らぬと親も人も心配をして居る、其娘が嫁に行つて一年ばかり経つと母親になる、其母親になつて二三月経てば、何うしてあんなに從容になられたであらうか、何うしてあんなに角が脱れたであらうか、何うしてあんな良い奥様振りが出来るであらうかと隣近所で噂するやうになる、何が此お轉婆娘をして徳のある人たらしめたかと尋ねれば、即ち子が生れたと云ふ事に他ならない、其子に向つて己が持つて居るものを與へ始めた云ふ、即ち犠牲と云ふ事を感じたことである、夜は三度も起きなくちやアならぬ、子供が泣いて泣き止まない時に方つては、其母親自身もシクシク泣き始むると云ふやうな事からしていよいよ世の中に犠牲と云ふ事を感じ始めた、

そこで此所に變化をなす、全く徳のない女が有徳の人となり掛けた、男子も亦同じことである、父となつて見れば無理も云へないことになる、父となつて見れば馬鹿金も使へないことになる、父となつて見れば子に對するの責任上良い手本をも現はさなければならぬことになつて来て、多少自ら犠牲をして見ると云ふ考が注いで来る、其考が此男子をして今までと違つた人たらしむる、けれども母親ほどには變らない、親子の間に於ては是はもう天然自然に痛いとも痒いとも辛いとも思はずして犠牲になる事が出来るやうに天が生み付け給ふたのである、格別の損なしに其子供に對しては犠牲となつて、不知不識の間に徳に進むと云ふ事が事實であるとすれば、若し他人の爲に或は己れを罵り己れを侮辱するやうな人の爲にも、父母が子に對するが如き犠牲の精神になつて、其人達の益を計る事が出来るやうになつたら如何であらう、夫は子の爲に犠牲となる事に比べて見たらば、其人の徳の進み方は著しいものがある、是が徳に進む根柢である、左ればこそイエス、キリストは口を開けば己れに克てどか、己が生命を失はなければならぬと云ふ事を教へられた譯である、私が本文に引いた馬太

傳の十章の三十九節、路加傳の十七章の三十三節、約翰傳の十二章の二十五節は悉く生命を失ふ者は之を得ると云ふ言葉、使徒パウロは羅馬書の十二章に基督者としての徳を叮嚀反復に教へて呉れた、而して其一節と二節に徳の根本を説いた、何であるかと云へば己が身も靈も聖き活ける祭物となして之を捧げよ是當然の祭なりと云つて居る、己が身をと羅馬書に記してある、けれども此身體ばかりぢやアない、己れを捧げよと云ふのであるから心も身體も二ツながら神の前に聖き活ける祭物として捧げよ、是は當然の祭である是が徳に進む根本であると説いたのである、キリストやパウロが徳に進む根柢は献身である斯う説いたわけであつたならば、恐らく何等の感化も残さずして過ぎたかも知れない、けれども諸君がキリストの御生涯を能くお讀みになり御研究になりお味ひになつたならば、キリストの御生涯は犠牲で貫いてある、何所までも犠牲の生涯であつた、嘗にキリストの御生涯が犠牲の生涯であつたばかりぢやアない、キリストの最期が犠牲の最期であつた、パウロも同じ事である、三十の年にキリストに召されて弟子となつて、六十幾ツになるまで三十幾年の間の生涯

は悉く是れ犠牲の生涯である、諸君が十九世紀に現はれたところの有徳の人々は誰だぞ算へて見られよ、私の頭の中に有徳の士君子、斯く思ふ時に一番先に響くのはゴルドン將軍である、砲兵要塞の司令官となつては、自分の官宅を開いて貧民に自由に使はせ又田園を拓いて貧民に耕作させた、又貧民を救はんが爲には各國の帝王から貰つた黄金の勳章を抛つて其資に供したと云ふ、遂にカルツームに於て斃るゝまでゴルドン將軍の生涯は他愛本位の生涯であつた、犠牲の生涯であつた。

其次に私の耳に響く淑女はフロレンスナイチンゲールである、更に響くのはミツセスフライである、献身犠牲の生涯を送つた人々は何れも是れ有徳の士君子有徳の淑女ならざるはない。

以上は大なる例を諸君の前に擔ぎ出したに過ぎない、更に小さな例を考へて見ても、己れを棄すして即ち犠牲を敢てせずして徳と云ふのが得らるか、此人こそは徳のある人と云ふ人にして何か棄て、居ない者があらうか、何かを棄て、居るに違ひはない、自己の名譽を棄て、居るか自己の學問を與へて居るか自己の財産を抛つて居る

か、何か與へて居るに違ひはない、與へない者にして有徳な人となつて居る人があるならば夫は虚偽の有徳である、私はそんなものはなからうと思ふ。

けれども諸君、茲に考へたい事がある、私が先きに我國人の誤りは他人を徳に進ましむると云ふお世話焼をして自分を進ましめない事だと申した、此犠牲と云ふ事に就ては犠牲とすべきものを有たねばならぬ、献身すると云ふ時には神の聖前に捧げて神がお悦びなさるやうな身と心靈を有つて居る事が大切である、水呑百姓の西も東も分らないやうな者が献身の生涯を送る、自分の犠牲をしなければならぬと斯う云つて見た時に、家を興へると云つても一の藁小屋に過ぎない、智慧を興へると云つても何等他人に興ふべき智慧を有たないので、別に隣りの物は盗まないと云ふくらゐな徳であつて、與ふべき徳は何にもない、けれども使徒パウロが献身すると云ふ時には、ナザレのイエスが犠牲の生涯を送り、遂に犠牲の死を敢てせられたと云ふ時には、同じ献身同じ犠牲でも其の内容が違ふ、して見ると御互ひは己れを損しなければ徳に進まれないけれども、其己れを損すると云ふ時にどれくらゐ損するものを有つて居るかと云ふ

事が大切である、キリストは神の最も高き位を棄て難き事と思はず此世に降り給ふたとパウロの書翰に書いてある、實にキリストの献身犠牲と云ふものゝ内容は限りなしと謂ふべきである、同じ犠牲をするならば内容の豊富な犠牲がやりたい、内容の立派な献身がやつて見たい、是に於てがアシ、のフランシスの如きクレルオーのベルナルドの如き、或は我國に道を傳へに來たザビエーの如き朝に夕に神の聖前に己れを願ひ己れを殺し、さうして如何にすればキリストの如き愛が出来るか、如何にすればキリストのやうな生涯が渡れるかと云ふ事に熱衷して、日に月に新たに日に月に高くなり日に月に清くなつて來て、さうして此所に美しいものが現はれて來た時に、主よ之を聖前に捧げますと云ふ事になれば、主も悦んでお受けなさるであらう、今日の我日本に於て何れの方面を見ても徳の話ばかりである、人格の話ばかりである、然らばどんな人格があるか、どんな有徳な人があるかと尋ねられるとハタと行詰る、是だぞ云つて見せる者が無い、夫が日本の弱點である、私は亞米利加でも英吉利でも何所でもキリストに似た人があるならば見せて呉れよ、眞個に有徳な人があるならば會つて

見たいから紹介して呉れよと頼んだ時に、夫は誰某が宜からうと云つて紹介をして呉れた人がある、其人に出會つて見て何人の前にも餘り下らない此頑固な頭が下つて、如何にも有徳な人と云ふは是かと染々と其徳の高い事を感じたのである、さう云ふ者が尠なからずある、我日本には何所に在るか、尙實物が無い聲ばかりである。

さうすると諸君、問題は世の中では人が徳に進めば宜いと云ふ、我々の間に於ては我自らが徳に進めば宜いと云ふ事にならねばならぬ、神の聖前に捧ぐべき心、神の聖前に犠牲とすべき我身を造らねばならぬと云ふ事が根本問題である、夫が出来さへすれば何時でも捧げ得らるのである、併し夫を出来すには毎日々々損をせねば不可、朝寝をして居る者は明朝から朝起をしなくちやア不可、修養と云ふ事は小さなところから始めねばならぬ、生命は棄てますと云つて居りながら朝寝をするのは面白くない、生命を棄てるのは日々棄てるにありと云ふから、先づ朝起から始めたら宜い、何うも朝は七時頃になつて起床ると云ふことでは不可、殊に青年諸君は今何時に起床して居るか知らぬが、三十分早く起きて聖書に眼を晒し跪いて神に祈り、夫から普通に

起床する時間から日々の仕事をおやりになつたら宜からうと思ふ、此寒空に三十分早く起床するのは辛い、眼時計でも買つて来て六時に起床する者は五時半に起床る、さうして先づ修養をやる、今度は己れの徳を立てなくちやアならぬ、夫から總て己が徳に進むのに害になるものを見たらは何でも一ツ棄てる覺悟をしなければならぬ、徳の害になるものは悉く排らねば不可、煙草を廢める酒を廢めるは勿論の事、菓子を食べ無駄な暇を費す事も皆棄てなくちやア不可、さうして其棄てた所の者が今度は我身を徳するに至る、斯くの如くして三年五年経つて後回首つて見らるゝならば何人も雖も徳に進まない者はあるまい。

人格の權威

ナタナエル答へて曰けるはラビ汝は神の子なり汝はイスラエルの王なり

(約翰傳第一章二十九節)

それは學者の如ならず權威を有る者の如く我たまへば也

(馬太傳第七章二十九節)

人格の權威